山本五兵衛様
千秋元五郎様

堀丈之助手合

半隊司令役　深山久五郎

足輕小頭
加藤榮次郎　堀幸之助　中野七之助　岩倉口惣平
五十嵐幸之助　島桑陸左衛門

足輕小頭加人
永山彌太郎　窪田半左衛門　高瀨長次郎　大屋常吉

雖方足輕
寺内九右衛門　南部清左衛門　北岡次三郎　谷尾作七郎
佐藤初右衛門　今村久太郎　深見淺之丞　水上津太夫
森田岩之助　野村小三郎　大坪九右衛門　山上半之丞
黑田又之丞　高瀨吉三郎　加藤林次郎　北村作太夫
高田勇次郎　奥田清之丞　上田伊三郎　島村清次郎
淺野權之丞　赤丸重三郎　山田辨之助　竹下於菟吉
押野半藏　三上左平　上林善六　杉山半太夫

宮崎久兵衛判



宮北治三郎　山形彦兵衛　由良藤作　山田兵藏
北川豐作　大桑安太郎　加藤宇之助　島田彦之丞
貴田良太郎　井村吉左衛門　北谷權三郎　宮川猪之助

〃

宮崎久兵衛手合

半隊司令役　寺垣十左衛門

足輕小頭
水野與之丞　加納源太郎　吉崎七左衛門　佐藤半右衛門
飯森八十太夫　長谷川清之丞　松本七郎

足輕小頭加人
水田久次郎　澤野甚左衛門　大屋清藏　中村吉藏

雖方足輕
藤井友左衛門　持田万次郎　牧　炮次郎　中村清太夫
小島熊之助　中島平吉　小島伊平　岡島直吉
增田長兵衛　福島吉藏　吉川捨三郎　萩　太三郎
梅田藤左衛門　長田伊太郎　芝木閑二　三田佐十郎
小泉常之助　藤田由太郎　栗野長次　桑原惣右衛門
芝野又三郎　大野小太郎　堀　直次郎　西村左太夫

鹿野乙次郎　水上鉦三郎　坂井彌右衛門　鹽井幸次郎
藤田作兵衛　小佐善太郎　三宅彦之丞　林　與八郎
石井清九郎　小島健太郎　二木清助　長谷川清藏
牛田鐵太郎　坂賀甚太郎　大窪太太夫　山本岡三郎

〆

右私共二小隊、越後上輪村宿陣より、當廿七日曉七ッ半時頃出發、青海川迄繰出し固守候樣、前晩參謀役より申來、則ち同所迄繰出候處、兵端を開き候間、鯨波宿へ繰込み候樣、三好軍太郎等より申來、炮聲頻りに相響候に付、則ち足早にて相向ひ候處、鯨波宿手前柝杭邊にて、追々味方の手負人引取候もの共に出逢候に付、駈足にて相進み候處、折田平内等差圖に付、鯨波宿濱手の方、小高き處へ一時乘上り、敵方山の上等見當にて、鐵炮追合に相成、敵方死亡も有之體に候へ共、繁しく場合打留之撿相立ち兼ね、其節の働き何れも同樣奮發致し候、

一右ヶ所において、丈之助手合の内、上林善六義深手負候に付、野村小三郎大坪九右衛門介抱として差添させ、病院へ相送り申候、黑田又之丞義深手負候に付、加納源太郎山上半之丞差添として、是又病院へ相送申候、

一右ヶ所に、一時計り迫り合ひ罷在候處、敵右山手の方へ集り候間、兩手合共敵方山手へ突込み度候存じ、餘程相働候へ共、何分沼田にて道無之渡り兼候に付、麓において暫らく擊合ひ候處、敵は手の暗きに罷在り、何れより玉を發し候や見留がたく候に付、敵所斥候として、澤野甚左衛門、山、○脫字あらん坂賀甚太郎を差遣はし候處、向ふの山三ヶ所に屯集罷在候段、慥かに見屆越し候に付、何れも味方の山の半腹へ登り、其處に於て餘程迫打致し候處、散亂の體にて玉勢うすらぎ候に付、山上へ上り最前打合濱手の方へ相向、力を添へ度と存じ罷越候處、三好軍太郎罷越し、濱手の方は大丈夫に付、並の山へ相向ひ申すべき旨申聞候に付、則軍太郎同道にて相向ひ、兵を配り迫打致し候處、敵方死亡も有之候得共、繁しく場所擊留め差別れ、誰彼れと相立兼候得へ共、其節の働一統同然に御座候、

一右濱手の方より山手へ相進み候節、久兵衛隊の内牧炮次郎義、谷間に賊徒捨置候鑓の身にて、足の胛怪我いたし、坂井彌衛門義、自分怪我いたし候、

一夕景、軍太夫相圖により、元のヶ所へ引揚げ候、惣勢休兵の場合に候處、丈之助隊は引上げ候樣、久兵衛一小隊は、宿の高右手の方へ兵を配り打合ひ可

申旨、參謀方より差圖有之則ち餘程迫打仕候、然る處惣勢殘らず引上に相成、敵方にも少々砲發薄らぎ候處へ、成田外機助より引揚候樣申越候、右について則ち引上げ、途中に於て高橋往來に出逢候に付、敵は未だ全く退き申さず、甚だ懸念の趣等申含め、青海川へ引下げ申候、猶始終御横目方においても、見聞御座あるべく候、

十一人

彈藥箱持等小者

右召連れ始終引續き罷在申候

右取調べ御屆申上候、以上、

壬辰四月

堀　丈之助
宮崎久兵衛

一司令役深山久五郎より指出され候口書寫

私儀、昨夜田塚村領にて、吉田省之進を短銃にて打ち候仕抹、御尋に付、左に申上候、

一昨夜五ッ時頃、中濱村宿陣堀丈之助方へ、官軍御用の爲にて、吉田省之進と申す人罷越、只今急速中田口迄出張致候樣甚だ迫たて申聞かれ候に付、直ぐさま丈之助手合一小隊繰出し候處、省之進義、先きに立ち罷越し、柏崎宿陣近藤新左衛門方へも立寄り、同樣劍口村と申すところへ、早速出張之義申し入れられ候由にて、即ち新左衛門も跡より引續き繰出し候處、途中早足にて罷越し候に付、夜中の義且つは後隊も相後れ候儀にも候間、暫時見合せ呉れられ候樣、度々申入れ候處、極急の義に候間、早足にて罷越候樣強て申し聞けられ、柏崎町を離れ候て五六丁計り過る時分、百姓體の者罷越し、何か省之助へ申入れ候義も有之樣の義、途中にて兩三度も有之、何か疑はしき樣子柄のところ、何れも提灯を打消し候樣申聞けられ、即ち相消し新左衛門手合へも申送り候處、右省之進携へ候提灯のみに相成候、提灯段々見受け候處、桑名合印附體の提灯持參にて、彌々早足にて進ませ候處、闇夜の儀、土地不案内のヶ處へ、無提灯にて罷越候儀、何とも甚束なき次第、然る處新田村とか申す邊にて、右省之進同役體の人、一人向方より罷越され、何か竊々申合せ、夫れより兩人にて先きに立ち罷越され候處、右今一人の言葉も全く越後の產と聞受、何應甚だ疑はしき義とも相見得、時々丈之助共示談仕居罷在候ところ、中田口と劍口との別れ道にて、今一人の者は劍口の方、新左衛門の者に立ち罷越候由に

て相殘り、省之進儀、丈之助の先きに立ち罷越候ところ、彼是れ疑はしき義とも多く有之、若しや官軍方の御用と僞り、桑藩脫走の者共罷越し、敵地へ引入れ開打に仕るべき計策にても無之やと、先刻已來丈之助共示談罷在候處、丈之助申聞けられ候は、今一返名前等相尋ね、其上にて彌々疑はしく儀有之に於ては、打取り申すべき旨申聞けられ候處、極懸念なる場所へ相懸り候に付、暫らく見合せ呉られ候樣、度々申入れ候へ共、返答に及はず候に付、走りつき申入れ候處、斯樣の懸念なる場所は、遲々に相成り宜しからず、一刻も早く過去り候樣申聞候へ共、是非と申入れ暫らく相見合せ候て、是れより何れへ相向ふ義に候やと相尋ね候處、中田へ參り候段申聞くに付、改めて名前相尋ね候處、吉田省之進と申聞候に付、何れの御藩と相尋ね候處、何國の藩にても無之段申聞候に付、再應相應ね候處、右同斷答へ、斯樣なるものと申聞け、再三應相尋ね候處、我れは天下の者と相答へ、彌々疑はしき者に付打取候樣、丈之助申聞けられ候に付、田塚村山の麓に於て、卽私持參短銃を以て三發打ち申候所、相當り候樣にも手答へ仕候得へ共、闇夜の義何れか相陰れ見當り申さず、打取候義相叶ひ申さず、且つ甚だ懸念なる場所柄に付、敵の計畧に懸らざる內に、急速其場を引取り、劒口の別れ道より少し手前に陣取候樣、丈之助差圖に付、則ち急速引上げ田塚村へ陣取候に付、斥候等罷在候、右は官軍方よりは今晩此口懸念に付、一小隊斥候罷在候へば、宜しき段參謀役より差圖有之候旨、御横目中より申談せられ候に付、其儘斥候致すべき旨、丈之助申渡され、丈之助も斥候に罷出られ候、今朝に至り丈之助斥候より罷歸らず候に付、最早敵間の之樣懸念の義無之に付、御人數柏崎陣所へ繰引きに致すべき旨、御横目中より差圖の旨、神田辰之助申越申聞候に付、則ち引揚げ申候、重て斥候として差出候處、兩田尻村庄屋三太夫、後口小高き山の麓に、丈之助儀自害相果罷在候に付、斥候役の者罷歸り申さず候間、其段御手前樣へ相達置申候通りに御座候、然るところ前條短銃にて打ち候人は、敎師役吉田省之進に相違無御座候旨承知仕候、何共當惑至極、依て御法之通、御所置方仰付られ候樣、仕度奉存候、此外申上候義無御座候、以上、

五月朔日　　司令役　深山久五郎

宮崎久兵衛殿

以手紙得貴意候、然は當二日私共陣中御尋の御使として、古市縫殿右衛門殿被罷越、御懇ろの趣、殊に一統へ御酒御肴頂戴仰せつげられ、難有仕合せに奉存候、何れも御禮私共迄申聞け候、右御禮然るべく御達被下候樣、仕度奉存候、其ため得貴意度如此御座候、以上、

五月四日

山本五兵衛樣　宮崎久兵衛
千秋元五郎樣　水野德三郎

〔日下部高明手扣〕（越中史料二所收）（當山藩越後出兵中）

十日、朝着、同十二日、昼後出立、

一三百疋、亭へ　一百疋、家内へ　一百疋、家來中へ　〆三兩

一堀丈之助家名御賞揚の義に付、手扣御渡しの事、

一越後にて惣督府へ御屆の事、

閏四月二十九日、津田藤藏より堀田貢へ紙面間違の事、

五月九日、夕七ッ時出立、暮頃高岡へ着、十日、朝五ッ時金澤着、直以手紙及案内、崎田小左衛門宅へ罷越、委曲申述置候事、

一十一日、朝罷越、右模樣相尋候へ共、治定未だ致さず候事、

一九日、播磨守殿京都より歸着の事、

一十日、越後より御使番富永順之助歸着、六日の戰爭の次第注進の事、

一同夜、人數御繰出しの事、

一十一日、夕八ッ頃二小隊御繰出に相成、尤御横目共騎馬三騎、

一暮頃、崎田氏より紙面到來の事、

一十二日、崎田氏へ罷越候處、堀家名御賞揚方の儀、早々申上に相成候處、追て何とか御詮議も仰せ付らるべき旨、仰出され候段御達しの事、

一丈之助殿一條、太政官へ御屆に及はずとも指極め難くに付、手數ながら高田表へ一應相運び、惣督にて萬端御裁許相濟申すべく哉、其上にて御屆方に相成候てもよろしくや、但し加州本多氏より土州殿まで、堀一條御屆方、暫らく見合せ置候義、申來り居候事、

一御加勢向は、惣て御屆等の御扱ひは無之筈に付、こなた樣より御屆等に相成候はば、京都詰御聞方へ、毎々打合の義申談置れ候事、

一御本家様向は、廿七日戰爭の儀は、先づ御屆に相成居候筈の事、

〔風聞書〕四

以手紙得貴意候、然は前月廿七日、鯨波において御加勢私共戰爭の次第、別紙寫之通り、監軍方へ指出候に付、寫指上申候、

一右戰爭後賊徒共逃去、同二十九日參謀役折田平内等より指圖により、柏崎の縁き中濱村まで繰込み、暫時宿陣罷在候處、同夜柏崎宿陣參謀役よりの使の由にて、官軍御用掛吉田省之進と相名乘り、只今至急に堀丈之助一小隊、中田口と申ところへ繰出候樣申聞、直樣出張のところ、右途中に於て種々懸念疑惑の趣共有之、若しや官軍方御用と僞り、桑藩脫走の者共罷越し敵地へ引入れ、闇打に致すべき計略にても無之やと心付き、右省之進何れの藩等の儀入念相尋候處、同人答方甚だ紛はしく義共有之、依て丈之助と半隊司令役深山久五郎へ申談、田塚山之麓において、右省之進を打取候樣申談し、則ち久五郎義、短銃を以て打ち候旨、委曲は別紙久五郎口書寫之通りに御座候、然るところ、丈之助彼遊斥候として、未明罷出朝に至り候へ共罷歸らず候に付、兵の內斥候として指出候處、兩田尻村庄屋三太夫、後ろ口小高き山の麓に於て、丈之助義、自害相果罷在候に付、委曲齋藤與兵衛、土田宗之助等へ相達候處、則ち昨二日撿使相濟申候、丈之助懷中に、齋藤與兵衛へ之書置有之由に御座候、

一右丈之助代り當分指揮役之儀、齋藤與兵衛へ相達候處、水戸德三郎義、右爲代當分指揮方與兵衛より申談候に付、丈之助手合之人數德三郎へ引送申候、

右得貴意度如斯御座候、以上、

五月三日　　宮崎久兵衛

山本五兵衛樣
千秋元五郎樣

六月丁未朔

二十二日、戊辰、富山藩の軍は越後に駐まり、戰鬪月を亘る、是日、又激戰し銃隊司令士森田三郎戰死す、

〔森田三郎東征日記〕

會議所御屆書之寫

當五日、森田三郎一手中、越後長岡在龜貝村ト申處ヱ出張罷在候處、當六日晝四

ッ時頃、福島村ト申處、長岡江ノ街道要衝ニ付、守兵無之而者不相濟場所ニ付、火急出張候樣被申越、直ト同處江出張之處、福井村ヨリ左手ニ當リ、大黑村出張之薩高兩藩之御人數ニ而、福井百束兩村ニ屯集之賊兵江炮發、戰爭ニ相成、同夜以來相方頻ニ打合有之候處、翌七日昼後ニ至リ、福井百束兩村江入込之賊ヨリ、弊藩處々築候陸臺江小銃打掛、弊藩ニ於テモ放發、夫々指揮罷在候處、折節大黑村出張之高田公手ヨリ、賊福井村邊江追々入込候ニ付、早々打立可然之旨應援申越、尙頻ニ賊ヨリ打込候ニ付、右水門固守之弊藩人數ヨリ及發砲、大小砲ニ而打立、一統奮發抽丹精相働候處、賊手負等モ有之體ニ而、福井村等賊散亂及敗績、砲發次第々々相止、先同夜以來官軍勝利、依而持口等嚴重固守、斥候等罷在、味方手負等モ無御座候、右之趣、不取敢此段御屆申上候、以上、

六月　富山藩

當十四日曉虎之下刻ヨリ、福井百束兩村之間ニ當リ、砲聲烈敗相聞候ニ付、斥候罷在候處、如案右兩村之賊勢ト、大黑村固守之薩高兩藩ト戰爭ニ相成候ニ付、弊藩臺場ヨリ大小砲等及放砲候處、賊軍、百束村之畔道ヨリ大黑村江進入之體、尤其頃者夘之上刻頃ニ而、賊軍之容モ彷彿相見ヘ候ニ付、弊藩愈憤發持口必死之地ト相定、嚴敵賊之横面江打立候ニ付、賊軍稍恐怖、然共賊先進之者共、大黑村高藩之臺場等江進入候ニ付、弊藩夫々指揮中、是迄進入之賊、全薩藩之猛襲ニ被打摧、福井村口江頗敗績致候ニ付、弊藩尙又强ク放砲、賊之退口江直ト轉軍、追打可申ト存候得共、持口固守之旨、兼々會議所ヨリ御達モ有之候ニ付、無據壓憤怒持口嚴重ニ守衛罷在候、此段不取敢一應御屆申上候、以上、

富山藩

六月

右當十四日、戰爭ニ付、翌日長岡表本營ヘ御屆之文ニ御座候、尤私持參ニテ罷越、長岡落城、連戰無虛日、殊ニ悍强之賊ト對壘連句不得休息、遂苦戰候段、實不堪感激、因馳一夫聊慰軍勞候、尙直樣朝廷江可及奏聞候也、

六月十八日　富山隊長中

銘酒白菊　六斗五升

永（花押）
公（花押）

右六月十九日、總督府ヨリ被下置、一統難有拜戴之事、

〔森田舊記〕

總督府御屆書之寫

福井百束兩村之際ニ屯集之賊徒、本月廿一日申刻ヨリ、大黒村固守之官軍ト及砲戰候ニ付、弊藩五番一小隊持場、福島村ヨリモ發砲、烈敵及戰爭候、然ルニ夜半ニ至リ賊兵龜貝村ヨリ窃ニ襲來、村家ニ放火致尾擊候ニ付、臺場保護之兵隊及砲戰候得共、前後苦戰ニ相成、薩長兩藩之兵士、爲應援繰込嚴シク發砲、弊藩兵隊モ必死及砲戰、臺場ヲ守返シ申候、弊藩四番分隊三十人許、長岡市上巡邏罷在、同夜筒場邊ニ焔火起候ニ付、一入謹嚴致巡邏候處、從本營之申談ニ付持場ヘ出張、直ニ龜貝村ヘ繰出奮進砲戰、賊兵福島村ヘ致敗散候、同分隊十人餘、稻葉村ヘ進擊、賊兵敗走、猶更松代藩ト戮力致進擊、字十諏訪のきト申地所ニテ憤戰追々相進、佐五右衛門新田之堤ニ而大ニ痛擊、長藩ニ相與ミシ益發砲、官軍三面ヨリ折立、賊兵狼狽致潰走候、賊兵若干打留候得共、進擊切迫中印ヲ揚不申候、爾後分隊之者共組合任指揮、五右衛門新田堤ヘ引揚、半隊宛同所堤一ヶ所、同所村祠之邊一ヶ所、嚴守罷在申候、右之節死傷人名等左ニ申上候、

戰死　五番隊司令士

森田三郎
田島庄治
玉島太七
杉谷治介

即死　放石莊安
人夫一人

深手　林茂理衛
山田金次郎

榊原喜三郎
福松善四郎

櫻木志藏　四番隊佐藤孝太郎

人夫二人

分捕

小銃（内一挺元込）四挺　胴亂一ッ
ニラ山笠一蓋　皮笠一蓋
大炮彈藥箱二ッ

右等之趣御屆申上候、以上、

辰六月

〔風聞書〕四

一宮崎九兵衛へ御意

其後度々戰爭、隊中一統竭死力奮戰、別て先月廿四日、於久田村、小勢を以數百之敵を追擊、勝利の段、稠松樣被成御聞、深御感悅思召候、然る處水野德次郎等戰死の由、數度の粉骨別て御惜思召候、右等之趣一統へも可被申聞候、且是迄手負之者相劬、厚療養可有之旨被成御意候事、

辰七月

一六月二十七日出張之渡瀨守馬、鈴木權太夫等へ御意等左之通、

永々滯陣何も太儀被思召候、既當月二十一日、二十二日於福島隊五番隊戰爭、一統格別憤發の段、神妙之義御滿足思召候、猶更可有盡力、且手負之輩別て相劬、可加療養旨御意に候事、

辰六月

藤太忰林茂理衛





右當月廿一日、於福島村格別憤戰之段、神妙之儀御滿足思召、其節負手疵候由、達御聽可爲難儀、尙折角可加療養旨、被仰出候事、

辰六月

一五月宮崎久兵衛水野德三郎へ御意、

其後度々戰爭勝利之段、御名樣被成御聞、御感悅思召候、數日の滯陣別て御太義、猶盡力有之度思召候事、

辰五月

一越接高田表へ出張之面々一統への御意書、并藤田太郎兵衛への御意、

永々滯陣何も太儀被思召候、既先月廿七日より元與板において、金岡湊一小隊戰爭、一統格別憤發之段、神妙之義、御滿足思召候、尙更可有盡力、且手負之輩別て相劬可加療養旨、御意に候事、

辰六月

右先月廿八日、於元與板、格別憤戰之段、神妙之儀、御滿足思召候、其節負手疵候由、被聞召、可爲難儀、猶折角可加療養旨、御意に候事、

辰六月　　藤田太郎兵衛

長岡落城後、連戰無虛日、殊に悍强之賊と、對壘連旬不得休息、遂苦戰候段、實不堪感激、因馳一夫、聊慰軍勞候、尙直樣　朝廷へ可及奏聞候也、

六月十八日　　永　□
　　公　□

〔風聞書〕二　越後出兵名書　　富山隊長中

隊長　　佐々左盛　家來三人　○中略

右八月十二日、富山出立、長岡表へ同廿二日到着之事、

隊長　　大房善太左衛門　家來四人　○下略

右七月廿九日立、八月十八日杤尾着、

〔森田三郎之碑〕

三郎諱直寛、直右衛門忠則男、慶應戊辰東征之役、爲銃隊使令司、從北陸鎭撫軍、赴越後、夏六月夜賊俄來犯、三郎奮激拒戰、賊勢大挫、而三郎身頗創傷、歸本營、竟斃、年廿八、

我公賞恤之、祿其弟直則補新番隊、以爲後、三郎有遺孤、共幼、直則養之、友人爲建石記其略、若其詳、則著於太政官日誌、

明治紀元冬十月　　富山敎授　大塚敬業撰
　　同　鄕　稻垣　克書

當藩開闢第一忠勇之士三郎之鬪死を聞て、

雨霰しけく飛來る矢玉さへ追立らるゝ君か太刀風

〔森田文書〕　　森田三郎

右當月廿一日、福島村におゐて格別憤戰之段、神妙之儀御滿足思召候、其節負手疵候由、遠御聽、可爲難儀、尙折角可加療養旨、仰出候事、

森田三郎

右當月七日ゟ於越後福島戰爭、同廿二日格別奮戰令討死候段、達御聽、御感惜之至思召候、此段不取敢父直右衛門へ申聞置候樣、被仰出候事、

辰六月廿九日　直右衛門三男　森田正之助

拾八俵

右兄三郎越後於福島村奮戰令討死候ニ付、爲名跡右之通被下之、新番御步行被召出旨、被仰出候、以上、

辰八月十七日　寄合所　森田正之助

五俵

右養父三郎、越後出張中、福島村臺場守返ニ付而は、中隊を勵し格別奮戰竟遂戰死、御感惜思召候、依之右之通加俵被仰付旨、被仰出候、以上、

巳三月五日　寄合所　森田直右衛門

拾七俵

右二男三郎越後於福岡村奮戰令討死候段、同人覺悟トハ申スモノ、全ク父母教育方宜敷ト思召候、依之新番御步行被召出旨、被仰出候、以上、

巳三月五日　寄合所

森田三郎名ハ直寛、幼名顯、字子隱、北涯ト號ス、富山藩士直右衛門忠則ノ第二子ナリ、天保十二年　月ヲ以テ富山舟橋今町ニ生レ、別ニ家ヲ興シ、稻垣氏ヲ娶リ二男一女ヲ擧グ、三郎幼ヨリ藩學廣德館ニ入リ、書ヲ讀ミ又書法ヲ市河米庵ニ習ヒ、畫ヲ稻垣碧峰ニ學ビ、人ト爲リ剛毅、最モ劍ヲ善クシ、競技ノ際木刀並銀幣ヲ賜ルコト再三、數年ニシテ白井流ノ奥ヲ窮メ、秘卷ヲ授ケラレ、尋テ藩ノ劍術見計役ニ補セラル、元治紀元藩允ヲ得テ、金澤壯猶館ニ入リ、砲術ヲ修ム、慶應戊辰關東奥羽ノ各藩騷擾ス、鎭撫使ノ北下セラルヽヤ、特ニ藩命ヲ奉ジ、送迎ニ勤メ、銃隊司令士ニ補セラレ役ニ從フ、同四月越後高田ニ進軍シ、鎭撫使總督ノ指揮ヲ承ケ、各地ニ轉戰シ、高田藩老及薩州長州加州各藩ノ隊長等ニ會シ、應對頗ル勗メタリ、越後長岡城ヲ攻擊スルニ方リ、適々隊長逃亡、藩軍一時土崩ノ厄ニ際シ、自ラ代テ隊長トナリ、纔ニ士卒ヲ統率シ、大黑、筒場各村ノ軍ヲ援ケ、福井、百束、四谷村等ノ賊ニ對シ、戰鬪數十日ノ久キニ彌リ、終始福島村ノ要衝ヲ扼シテ、以テ活動ス、六月十六日、長岡城陷落、賊據ヲ失ヒ、各地ニ散亂セルニ及テ、其出沒常ナラサルヲ慮リ、益々防備ヲ嚴ニス、同二十一日休戰中、賊夜闇ニ乘シ龜貝

村ヨリ縞ニ來襲スルヤ、憤激衆ヲ勵マシ、本營ヲ固守シテ拒戰シ、大ニ賊ヲ破リ殺傷亡算最後ニ賊將ヲ斫殺シテ身亦遂ニ戰死ス、年二十八、戊辰ノ役ニ於ケル富山藩掉尾ノ面目之ニ由リテ發揚スルコトヲ得、當時出征藩士中勳功第一ヲ以テ稱セラレ、藩内上下ノ景仰セシ所ナリ、遺孤尚ホ幼、三郎ノ弟正之助直則之ヲ育フ、三郎出征ノ曉ヨリ、戰死ノ前日ニ至ル戰況ハ、自ラ記述シタル東征日記ニ詳ニシテ、其梗概ノ若キハ太政官日誌、日本武勇鑑ノ諸書ニ散見セリト云フ、

## 〔富山縣内務部社寺兵事課調査〕

戊辰役戰死

| 戰死年月日 | 戰死場所 | 戰死當時ノ住所 | 官等 | 氏名 |
|---|---|---|---|---|
| 明治元年八月廿三日 | 越後國長岡附近福島村ニ於テ戰死 | 富山愛宕町 | 小隊司令士 | 森田三郎 |
| 仝 上 | 仝 上 | 仝 八人町 | 醫官 | 放石莊安 |

外ニ下士二名　兵卒二名

## 〔前田伯爵家調査〕

戊辰ノ役ニ於ケル、戰死軍人遺族ニ對シ恵與調、

| 郡 / 市 / 村 / 寺 / 別 | 戰死者給與 | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | 準士官 | | 士 | 兵卒 | | |
| | 人員 | 給額 | 人員 | 給額 | 人員 | 給額 |
| 富山市 | 一人 | 遺族ヘ家祿二十三俵給 | 一人 | 同上元家祿ニ五俵增給 | 二人 | 一人ハ仝上拾俵中ニ一時金五圓給與 内一人ハ同上一人半扶持ニ銀七十目給與 |
| 上新川郡ノ内舊領地ノ部分 | ○ | ○ | ○ | ○ | 一人 | 遺族ヘ元家祿ニ參俵增給 |
| 計 | 一人 | ○ | 一人 | ○ | 三人 | ○ |

## 〔前田侯爵家調査〕

戊辰戰役ニ於ケル、死沒軍夫遺族救助金調、

一金拾貳圓九拾八錢貳厘宛

明治十八年四月病死　礪波郡岸川村　赤井七郎兵衛

明治十九年　病死　仝郡立野村　中野理右衛門

明治三十一年七月死去　新川郡寺家村故庄兵衛悴　松尾榮次郎

右庄兵衛妻　松尾きく

礪波郡二島新村　島田助藏

明治卅三年十二月死去　新川郡田中村故七二弟　中村　作次郎
明治卅一年十二月死去　右七二妻　中村　みつ
高岡町津幡屋故勘右衛門悴　津幡　外次郎
同町末友屋故甚三郎悴　末友　元吉
同町三邊屋　三邊理右衛門
同町堀屋　堀　庄藏
射水郡朝日村故伊三郎養子　山下　勇吉
同郡氷見町疊屋兵助悴　田多兵左衛門
同郡三品田村故次郎兵衛悴　田中　幸次郎
同郡中野村故彦三郎悴　島田　竹次郎
新川郡東岩瀬村故甚三郎悴　牧野　恒次體
右妻三郎妻　牧野　ちゑ
同郡魚津町四十物屋　吉崎權右衛門
同町住吉屋與平次悴　住吉　初次郎
同町石垣屋二助悴　石垣　要次郎

明治九年病死

明治十九年四月病死

明治卅七年一月死去



明治十二年九月病死　同郡泊町　大平　吉六
明治八年九月廿五日死去　同郡氷橋東出町長藏悴　杉本　金次郎
明治四年六月十九日死去　右長藏妻　杉本　いと
一金六圓四拾八錢九厘宛
明治三十六年六月死去　射水郡高岡町御蔵屋　御蔵長左衛門
同郡氷見鍛冶屋　鍛冶久左衛門
一戊辰ノ役ニ、加賀藩出征ノ軍人中ニハ、越中地方ノ者ナシ、但右軍人中廢藩後ニ、越中地方ヘ移住セシ者アルヤモ測ラレスト雖トモ、今之ヲ知ルニ由ナシ、
一北越平定藩兵凱旋ノ後、從軍夫卒中死傷若シクハ、格別ノ功勞アリシ者ハ、各々鳥目拾貫文、其中裁許役ノ者ハ拾五貫文ヲ賞賜シ、死者ニハ別ニ香花料金貳歩ヲ下賜シ、其嗣子生涯扶持米二人口ヲ給スル旨、舊記ニ見ユ、
一舊記中見ル所、藩兵凱旋後夫卒ノ賞典ニ預リシ者、百七十五人ナリ、其人名ヲ詳ラカニセズト雖トモ、前記遺族ノ先代ノ如キ、無論此人員中ニ在ルヘクト察セラル、

## 〔社團伏木商工會調査〕



明治元年、王師北越ヲ征スルヤ、舊加賀藩軍艦ヲ以テ

伏木港ヨリ、北越戰地ニ向ケ、諸藩ノ出兵及輜重糧食等ノ運搬、且ツ戰地ヨリ負傷兵引揚ケ等ノ爲メ、同年五月ヨリ十月マテ、晝夜數回ノ出入アリ、

五月丁丑朔

二十八日、甲辰、新川郡宮崎村火あり、全村殆と燒失す、

〔下新川郡宮崎尋常小學校報告〕明治元年五月二十八日、宮崎村前川清吉ヨリ出火シ、風烈シク全村百八十六戸ノ内、僅ニ十戸餘ヲ殘シテ、悉ク類燒ニ罹レリ、

六月丁未朔

今石動、氷見、城端を郡奉行の支配とす、

〔王政御一新御布告留〕　御算用場奉行江

卷目之上

今石動氷見城端支配方、御詮議之趣有之、御郡奉行支配に被仰付候、依て右支配引請方等、万端伊藤平右衛門申請候樣、礪波射水御郡奉行江可被申談候事、

辰六月

右御算用場より申來候事、

六月四日　改作奉行

七月丙子朔　諸郡

勅使仁和寺宮、越中を通過せらる、

〔仁和寺宮樣御通行〕

別紙御休泊附廻可相心得旨、御指圖御座候間、御承知可被成候、留より御返可被成候、以上、

辰六月廿八日　諸郡溜

加越主附衆中

御休泊附　御小休

俱利伽羅　壹里拾五町

〃三里十五丁

越中今石動　御泊　貳里

福岡　御畦
壹里
立野　御小休
壹里
〆四里
高岡　御泊
壹里
大門　御小休
壹里武十五丁
小杉新町　御畦
壹里十七丁
願海寺村　御野立
武里壹丁
〆六里七丁
富山　御泊



壹里
町新庄　御小休
武里拾壹丁
東水橋　御畦
武拾五丁
滑川　御小休
武里武丁
〆六里武丁
魚津　御泊
武里
三日市　御畦
壹里十三丁
下ヶ札
同所御泊御可相成居候得共、貧宿にて指支候に付、魚津御泊ニ相願度、
上飯野　御野立

壹里五丁

入膳　御小休

壹里二十七丁

〃六里九丁

泊　御泊

壹里二十七丁

境　御小休

壹里餘

越後

以上

九月乙亥朔

七日、辛巳、神通川出水、

〔富山縣水害誌〕　慶應四年九月七日、神通川出水一丈二尺三寸、浸水二千五百七十戸、

廣德館燒く、假に塾舍を設く、



〔富山市沿革志〕　明治元年九月、廣德館舞馬ノ災ニ罹ルヲ以テ更ニ近藤光美邸ニ假設シ塾舍ヲ置カル、之ヲ新塾ト謂フ、又別ニ二ノ丸侍番所ニ塾舍ヲ置カル、之ヲ古塾ト稱ス、古塾ノ在リシ所ハ今ノ越川樓邊ナリ

〔日本教育史資料〕　十　明治元年九月、廣德館火災に罹るを以て、更に民邸を假り、上等生下等生を分ちて塾舍を設く、此時に當り、俊逸の生徒を東京及西京に遣し、廣く學業を修めしむ、

十月甲辰朔

力士階ケ嶽龍右衛門死す、

〔越中史略〕　階ケ嶽龍右衛門は、越中礪波郡戸出町權兵衛の長男、幼名を岩次郎と稱し、膂力衆に勝れ、常に角力を好み、年二十五の時力士鋭岩に從ひ、江戸に出で雷權太夫の門弟となり、奥の海と號し、又龍ケ嶽と改め、遂に相撲大關に昇り、奥州八戸侯の召抱となり、更に階ケ嶽と改め號しぬ、後盛岡藩の召抱となりしが、文久二年辭して故郷に歸り、權兵衛の家を再興し、明治元年十月死す年五十二、

十二月甲戌朔

十五日、戊子、金澤藩、家老以下の名を廢し、執政等の職を置く、

〔金澤藩布令留〕

今般藩治職制之義、行政官より就被仰渡候、從前年寄中御家老役、暨御用加判等之名目被廢、夫々執政等左之通、今十五日より被仰付候、

一執政　前田土佐守　奥村河内守
　　本多播磨守　村井又兵衛
一參政　横山藏人　津田玄蕃
　　本多圖書　前田將監
　　前田内藏太　不破彦三
　　横山外記

右之通被仰出候條被得其意、同役中傳達組支配不相洩樣、可被申渡候、以上、

十二月十五日　村井又兵衛

明治二年己巳　紀元二千五百二十九年　癸酉朔

正月

十九日、辛卯、富山藩、家老以下の名を廢し、執政參政等の職を置く、

〔明治二年の改革〕越中史料二所收

一明治二年正月十九日を以て、富山藩御家老、若年寄、御用部屋等の役名、及び寄合所、加判御用人等の名を廢せられ、新たに執政職、參政職、内家知事を設けられたり、而して其主掌の事務は、執政は庶務主事、軍務學校主事、刑法主事、會計主事、公儀方に分たれ、參政は以上の副主事なり、右改正と同時に、任命されたるもの左の如し、

刑法主事富田讃岐、刑法副主事市川金六、庶務主事西尾逸角、會計副主事杏丈右衛門、軍務學校主事戸田青海、軍務學校副主事千秋元五郎、會計主事花木兵庫、庶務副主事林助八、内家知事板津左兵衛、大殿樣内家知事山崎藤兵衛、井上才記、

一同時に戎服の制を定むること左の如し、

一執政、人持組、參政は、左右襟下に方一寸白角四つ宛、
一商知組以上は、右同斷三つ宛、
一御醫者以上は、右同斷二つ宛、
一御衣服所細工人以上は、右同斷一つ宛、方一寸五分、

一諸足輕は、左右袖口に白三角一つ宛、
一又家中は、左右襟下に赤角一つ宛、外に家々の相印付くること勝手次第の
事、

是月、金澤藩關所を廢す、

〔金澤藩布令留〕

別紙寫之通、行政官より被仰渡候、依之境御關所始被廢止、併御門御番所江御國賣物改之爲め、在來の通被成置候、尤晝夜明通他國者は不及申、御領國之者にても不及相改旨、夫々申渡候、產物等出津等之義は、是迄之通夫々可被相心得候、以上、

二月十九日　　三浦八郎右衛門殿
　　本多播磨守
　　澤村恒右衛門殿

〔越中史略〕　またこの際、境（下新川郡）の關所を開放して、旅人物貨の通行を自由ならしめ、從來他國へ輸出又は他國より輸入することを制限しありし產物も、多くは隨意に出入するを許しぬ、

〔參考〕

〔金澤藩布令留〕

今般大政更始、四海一家之御宏謨被爲立候ニ付、箱根始諸道關門廢止被仰出候事、

正月（○法令全書ニハ正月二十日トアリ）　行政官

三月（癸酉朔）

二十六日、（戊戌）金澤藩職名を改む、

〔金澤藩布令留〕

別紙之通、執政中ゟ申來候ニ付、爲承知相越之候條、可被得其意候、以上、

三月廿六日

能美郡宰中　　民政寮
石川河北郡宰中　　會計寮
羽咋鹿島郡宰中
鳳至珠洲郡宰中

礪波郡宰中
射水郡宰中
上新川郡宰中
下新川郡宰中
金澤市宰中
勸農局主事中
理財局主事中
商法局主事中
營修局主事中
民政察知事江
會計察

御作用場　民政察
改作所ハ　會計察
御勝手方ハ　勸農局
　　理財局



產物方ハ　商法局
元御作事所ハ　營修局

右四局會計察附屬

御郡奉行遠所町奉行ハ本吉湊才許ハ被止更ニ

能美郡宰　小松湊附屬
石川河北郡宰　本吉松任金石附屬
羽咋鹿島郡宰　所口附屬
鳳至珠洲郡宰
礪波郡宰　今石動城端附屬
射水郡宰　高岡氷見附屬
上新川郡宰
下新川郡宰　魚津境附屬
金澤町奉行ハ金澤市宰

右職民政察江附屬

御郡所ハ　郡治局

町會所ハ　市政局

六月　辛丑朔

十七日、丁巳、加賀藩主前田慶寧、富山藩主前田利同版籍を奉還す、是日、慶寧、利同知藩事と爲り、華族と稱す、尋て富山藩は職制を更定す、

〔加賀藩史稾〕歷世襲封一覽

恭敏公　慶寧、溫敬公長子、慶應二年四月襲封、明治二年六月還封、七年五月薨、年四十五、

淡路守利同　溫敬公第十一子、安政六年十一月襲封、明治二年六月還封、

〔明治職官沿革表〕一

澄知藩事　明治二年六月十七日

本日勅シテ、諸藩版籍奉還ノ請ヲ聽シ、其請ハサル者ハ奉還ヲ命ス、乃チ前田慶寧、島津忠義等二百六十二人ヲ以テ知藩事ト爲シ、從前所帶ノ官職ヲ罷ム、隱居嫡子ハ此限ニ在ラス、挨次宣任二十五日ニ至テ終ル、是日公卿諸侯ノ稱ヲ廢シ、改テ華族ト稱ス、後三年八月三日ニ至ルマテ、藩知事ニ任スル者十二名、總計二百七十有四藩トナス、又四年六月ニ至ルマテ、廢セラル、モノ十三藩、四年七月藩ヲ廢シ縣ト爲スニ至リ、總テ二百六十一藩アリ、

但シ、從來ノ諸藩及維新後新立再立ノ諸藩ヲ合算スルナリ、喜連川、米澤、新田、高知、新田、高瀨、宇土、平戸、新田、諸藩ハ、初ヨリ知事ヲ置カサルヲ以テ算入セス、

〔風聞書〕一　前田御名

今般版籍奉還之儀ニ付、深く時勢を被爲察、廣く公儀を被爲機、政令歸一之思食を以、言上之通被聞食候事、

六月　行政官

富山藩知事被仰付候事、

明治二年巳六月　前田御名　行政官

官武一途、上下協同之思食を以、自今公卿諸侯之稱被廢、改て華族と可稱旨、被仰出候事、

但官臣者可爲是迄通候事、

六月

## 〔明治二年の改革〕 越中史料二所収

一二年七月五日を以て、職制に改正を加へ、學政寮、軍政寮、布政寮、議政寮、會計寮等を設け、各寮に知事を置く、

## 行政官

一同年八月又改正あり、五日布政知事の名を以て、左の通知を發したり、

此度於朝廷、官制別紙の通、御改正就被仰出候、相達之候條、可被得其意候事、但し官職同名の向は、相改可申候事、

一同月十一日藩主より、左の依頼狀を藩下へ發す、

此度藩知事の職を蒙り候處、不肖弱年の身にして、其任に難堪痛心此事に候、併藩屏の任を盡し、累世の朝恩を報し奉候時に當り、辭職の儀も却て素志に背き奉恐入候に付、謹て奉職罷在候、追々朝命に隨ひ、變革の所置も可有之候、就ては是迄銘々精勤を盡し候義、滿足の至猶又祖先以來、累世厚く大義を以て相交り來り候、深契今日に至り一際奮發勉勵して、其當職を盡し我等と心を協せ力を同ふして、且朝恩に報じ藩任を立て、其に祖先の神靈に對し不愧樣致し度存候、此旨於銘々不取失樣賴入候事、

一同年九月五日、更に舊藩主より、各執政に對して左の直書を發す、

今般藩知事被仰付候に付ては、猶又大變革可申出筈に付、萬一祖宗以來の規則を無謂相改、好て新法を行ふ樣などゝ、存違の者出來候ては不容易義、第一奉對天朝尊奉の道も不相立、且は此方の意を體せず、往々政事向の障りにも相成候ては、以ての外の義に候條、此段厚く被相心得、豫て一統へ屹度可申諭置候也、

一同年九月二十七日、御殿中向御住居向の外、御表廻り總て向後藩廳と御改、被仰出候事と達せらる、

一同年十月十七日、職制改正に伴ひ、藩の執政富田讃岐、西尾逸角、花木兵庫の職務を免せられ、家令の等級に置き、共に重大事件を參議すべく、舊藩主より命令せらる、而して同日任命されしもの左の如し、

大參事戸田青海、　盤江監物、　權大參事刑法方入江事、　少參事當分會計方　民政方兼務山本五兵衛、　少參事當分民政方會計方兼務千秋元五郎、

權少參事庶務方瀧川圖書、　同奥村三左衛門、　權少參事軍政方學法方野村平馬、　家令若土春江、　同山田次郎左衛門、　家扶市川金六、

一同月内家役名を改め、家扶を家令とし、家従を家扶とし、近侍を家従とし、近侍並を家掌と稱す、

是月、舊加賀、富山兩藩主、越後戰役の功を賞せらる、

〔風聞書〕一

戊辰之夏、北越之賊勢猖獗之時に當り、大兵を出し各國戰爭勉勵盡力、且盛に金穀を運輸し、北越の官軍其資に由る不少、竟に平定之功を奏し候段、叡感不淺、依て、爲其賞壹万五千石下賜候事、

六月　　行政官

御本家樣御名

高壹萬五千石

依戰功永世下賜候事、

明治二己巳年六月　御印

戊辰之春、兵を北越に出し、每戰盡力藩屏之任を遂げ候段、叡感被爲在、依て爲其賞五千石下賜候事、

六月　　行政官

前田御名

高五千石

依戰功永世下賜候事

明治二年己巳六月　御印

新川郡上野平を開墾す、

〔下新川郡西布施尋常小學校報告〕明治二年六月十三日、大海寺野村の人、紙谷長太郎始めて上野平に移住したり、當時はナギ畑、切替畑の如きもの、一二處々に點在するの外、荆棘のみにて見るも物淋しき、不毛の大原野地なりき、然る

に同人は最も熱心に開墾に從事し、稍好果を得るに至りし故、其地の附近村落八ヶ村より移住者七八戸、遂に農村を形成するに至れり、現今畑地として開墾の成功せし反別は約五十町、主として甘藷を栽培す、其他各種の畑作物にも宜しく、長引野一帶の農民は之が爲め、多大なる生活の資料を仰げり、

七月　辛未朔

二上山知識米の徴收を禁す、

〔金澤藩布令留〕

能州石動山初穂と相唱、能越村々ゟ毎歳軒別白米貳升宛、竪越中二上山知識米と相唱、越中四郡ゟ軒別白米壹升宛、取立來候處、村々極貧窮之者、甚迷惑之體相聞、得申候、以來小前之者共之義は、右軒別米取立方指止、任懇志迷惑之筋無之樣、右兩山江嚴重被仰渡置候樣仕度奉存候事、

越中諸郡宰

巳七月

右之趣、兩山手前遂詮義候處、別紙兩通之通申聞、無據次第に相聞へ候に付、當年之義は別而村方難澁罷在候に付、別紙寫之通、兩山江申渡置候條、爲心得申達候、以上、



石動山　佐藤兵庫等江

例年初穂米、能州町在共軒別貳升宛取集方、小前之者等致候而は分限に應じ取集候山に候へ共、當年不順氣難作等に而、別而村方可爲難澁に付、右集方も例年に不拘、村方不服等之筋無之樣、和談を以取集可申候、尤集方に相廻候神役共、心得方嚴重可被申談候事、

石動山等、知識初穂米取集方等義に付、詮議之趣達置候處、別紙寫之通、民政察ゟ就申來候相越之候、然は當年取集方に廻村不致樣、書附出候組々も有之候へ共、別紙に有之候通、和談を以相辨候樣可申渡、併押達取集候樣之義申募候はゞ、其段及斷候樣可申渡候、先は急速相廻從留可相返候、以上、

巳八月廿六日

寺島陳太郎
本保孫八郎

八月　庚子朔

三日、壬寅、射水郡十二町潟の吐川工事成る、

礪波郡　十村中

〔氷見郡十二町尋常小學校報告〕

十二町潟ノ開墾　　經費總額

一七萬四千四百三十四貫七百十六文

內譯　　補助額

四萬貳千貳百五十九貫五百六十四文　　關係村割附高

貳萬四千貳十九貫貳百參十壹文　　矢崎嘉十郎寄附高

八千四十五貫九百貳十壹文

新排水路は深さ平均二間、堀割長五百四間、上幅拾二間、下敷十間にして、着手はは慶應三年(月日不詳)にして、將に竣工に至らんとして崩壞し、更に着手したるは明治元年八月十八日、竣工は明治二年八月三日、殘務整理悉皆結了は明治三年十一月卅日なり、施行前は湖水漲溢、米穀登實僅少なりしも、排水後今迄に五十町餘の異田を新墾し、且つ被害地五百九十餘町の收益、八千九百六十一石四斗五升四合なりしが、直ちに一萬五千六十五石六斗二升に增加し、外に最初新開の貳十町歩に對し、貳百四十貳石六升を加ふれば、實に純增加六千三百四十六石貳斗貳升六合なり、該事業は矢崎嘉十郎の拮据經營したる結果にして、同人



歿後其の生前の偉業に關し、令息外吉氏に對して富山縣知事より、左の如く追賞されたり、

富山縣氷見郡十二町村大字十二町村平民　矢崎外吉

亡父嘉十郎、資性溫厚、素と慈善の心に富み、公共の念に篤し、夙に居村の一部が十二町潟に瀕し、輙もすれは氾濫浸水の害を被むるを憂ひ、明治の初年、熱誠を揮つて里正に說き、工事を起さしめ、自ら是が幹理の任に當り、忍耐刻苦私費を捐て勤勞を盡し、遂に能く水害を除去し、新田を墾闢し、大に地方の收穫を增加し、富力を進むるに至る、其他居常軍人を奬勵し、敎育を興振し、農事に留意して、害虫驅除を激勵する等、公利を興し成績を擧げたるもの尠からず、其行爲洵に奇特とす、仍て爲追賞木杯壹組下賜候事、

明治三十七年四月十五日　富山縣知事正五位李家隆介

〔氷見郡窪尋常小學校報告〕

布施貫通碑　布施之湖、自古爲患、潰決氾濫、無歲无之、射水郡十村役笠間作五郎、苦心規畫、請藩得允、貫通距海、乃新川也、是役矢崎嘉十郎黨之、輔以陸田彦四郎、屋敷太三郎、明治元年八月起工、二年八月竣焉、長實五百餘間、底闊十間、所費七萬五

千餘金、潴支、其六、環湖十四郡賦、其四、嘉十郎司計、不差毫釐、又以寒郷不勝重賦、捐貲千餘金、既而無復災害、灌漑之利滋多、蓄舍歲增、湖畔收穫倍舊云、興一利不如除一害、今除害興利、決川距海、潴畎距川、全導湖亦是也、然則笠間矢崎等之功甚偉矣、可不以紀乎、

明治三十五年五月　　石川縣僧蒙撰書並篆額

記念建碑義捐郡名列左

古江新　萬尾　耳浦　川尻　十二町
中島新　中谷内　西朴木　下久津呂　海津
園　潟中開　窪

二十七日、丙寅、新川郡常願寺川に、立山橋を架す、

〔中新川郡東水橋尋常高等小學校報告〕

元水橋架橋取調書

〔由來〕今ヨリ百二三十年前、廣野屋半四郎等二三名、賣藥業者中ヨリ一人廻リニ付、金三百匁ッヽ、賣子一人ニ付、金百五十匁ッヽ、徵收シ設キ、富山舟橋ノ如キ、一大鐵鎖ヲ以テ常願寺川水橋常渡ニ、舟橋ヲ架設セント企圖セシガ、遂ニ變ジテ明治元年、木橋架設ヲ計畫スルニ至レリ、

架橋ノ議其筋ノ許可アルヤ、水橋町ニ於テ許可ヲ受ケ、富籤ヲ執行シ其益金ヲ以テ幾分ノ工事費ヲ支出スルノ計ヲナセリ、

〔役付〕是ヨリ先キ、東岩瀬御郡奉行ヨリ、水橋常渡架橋ノ役付ヲ申付ラレタルモノ左ノ如シ、

主　附

御　扶　持　人　　田村前名
十村杉木彌五郎悴　　杉木彌八郎
十村直江重右衛門悴新田才許上條組才許　　直江寧邦
山廻リ　　伊藤敬三

下　役

東水橋町　廣瀨甚藏　　東堂權兵衛　外三四名
西水橋町　兒島折之助　　池田屋圓右衛門　外三四名

右ノ者ハ、總テ御郡奉行ノ支配ヲ受ケ、執務セシガ、會計係ハ杉木彌八郎、材料蒐集ノタメ官木ノ伐採ヲ命シタルハ伊藤敬三、其他二名ハ總指揮ヲナ

セリト云フ、

(材料)橋材ハ、元上新川郡常願寺川以東(水橋以南大森村大字三塚村邊マデ)ノ各村、神社境内ニアリシ官木(廻リ四五尺以上二丈二三尺以下ノ杉材)ヲ、其村人民ヲシテ伐採シ運搬セシメタリ、尤モ伐採期ハ、明治元年七月以降同年十二月二十五日限リ、材料ノ常渡附近ニ集積スルモノ幾千ナルヲ知ラス、而シテ大木ヲ削リ赤身ノミヲ用キシモ、完成後尚同大ノ橋梁架設材料ノ殘餘アリシヲ以テ、田村主附、下新川郡布施川、片貝川ニ架橋セントシテ、材料ヲ生地方面ヘ回漕セシメタリ、然ルニ其筋ノ嫌疑ヲ受ケ、下役太田圓右衛門、主附田村前名ハ縲紲ノ戒ヲ受ケタリト云フ、

(職工)棟梁ハ、下新川郡生地町ノ大工某ニシテ、勾配ヲ算出スルコトスラ知ラザリキト云フ、又副棟梁ハ、水橋町水木吉助ニシテ棟梁以上ノ技倆アルモ、是レ亦勾配ヲ算出シ得ズ、同人次男ノ江戸ヨリ歸來スルヲ待チ、勾配ノ算出ヲ見ルニ至レリト、其他大工木挽杣等幾百人ヲ用フ、

(工事)橋杭ハ、根元ヲ掘リ込ムタメニ枠ヲクミ、數多ノ土俵ヲ載セ其重サヲ以テ搖リ込マントシ、次ニ三間餘モアル樫材廻三尺許ノモノヲ以テ打込マントシ、次ニ桶ノ筒ヲ用キテ土砂ヲ掘リ上ケ、其穴ニ橋杭ヲ埋メントセシニ、是レ又水ノ湧出多キト、側方ヨリ崩レ込ミテ何レモ失敗ニ歸シタリ、然ルニ最後ニ不得止、主附田村前名ハ斷然杭ヲ倒ニシテ、打込ムコトトシタリシト云フ、

工事着手ハ明治二年二月頃、落成渡橋式ハ同年八月二十七日ナリ、

(橋梁)長サ百三十間幅二間、馬除二ケ所アリテ、兩側ニ各三尺ツヽ取擴メアリシ、

(橋祭)前陳ノ如ク橋材ハ、神社境内ニアリシ官木ノミナリシカハ、或ハ神佛ノ祟リアランカヲ懸念シ、東水橋橋詰河岸ニ水神社ヲ建テ、毎年六月二十七八日ヲ以テ橋祭ト定メタリ、

〔杉木記錄〕

一壹橋　水橋川　立山橋

惣入用錢、六萬四百八拾貳貫貳百九拾七文、

二十八日、丁卯、金澤外八藩に、北海道開拓の支配を命せられ、翌年免せらる、

〔法令全書〕

明治二年八月二十八日(沙)

金澤藩　鹿兒島藩　靜岡藩

各通　名古屋藩　和歌山藩　熊本藩
廣島藩　福岡藩　山口藩

北海道開拓之儀ハ、兼而被仰出候通リ、即今之急務ニ而追々御手ヲ被爲著候處、何分全國之力ヲ用ヒスンハ成功無覺束、依之今般別紙地所其藩ヘ、支配開拓被仰付候間、指据經營實効相立候樣可致事、

明治二年八月二十八日（沙）

北見國之内　宗谷郡　禮文郡　枝幸郡　金澤藩
右三郡、其藩支配ニ被仰付候事、

明治二年八月二十八日（沙）

今般、支配被仰付候三郡之内、宗谷郡之儀ハ、御用之地所モ有之候ニ付、開拓使ヘ可伺出事、　金澤藩

明治三年六月十九日（沙）

依願、北見國宗谷枝幸禮文三郡支配被免候事、　前田金澤藩知事

九月己巳朔

大巡察使、覓彈正來る、

〔大巡察覓彈正殿御通行一件〕

休泊附

九月三日東京發足

| | | | |
|---|---|---|---|
| 休泊 | 三日 | | |
| 大宮 | 板橋 | 十七日 | |
| ○中略 | | | |
| 舟見 | 泊 | 十八日 | |
| 水橋 | 魚津 | 十九日 | |
| 高岡 | 下村 | | |

竹橋　石動廿日
金澤着　津幡廿一日

以上

| | |
|---|---|
| 筧彈正大巡察 | 上下四人 |
| 大久保彈正少巡察 | 上下三人 |
| 松岡彈正巡察屬 | 上下弐人 |
| 水野彈正巡察屬 | 上下弐人 |

右就御用通行候條、右之休泊相心得、於宿々賄等無指支、用意可有之者也、

彈正臺

九月二日　問屋役人共江

〔金澤藩布令留〕

大巡察使

| | |
|---|---|
| 筧彈正大巡察 | 上下四人 |
| 大久保少巡察 | 上下三人 |
| 松岡巡察屬 | 上下弐人 |
| 水野巡察屬 | 上下弐人 |

外ニ通行用八九人計入用

右十月三日東京御發足金澤江御越之事、

十月己亥朔

射水郡放生津火あり、

〔新湊警察署調査〕　明治二年十月、放生津山王町荒木茉澁谷茉方ヨリ出火シ、山王町、立町、西立町、紺屋町、及放生津新町ノ幾部ニ延燒シ、戸數約七百戸燒失セリ、

霖雨稻登らす、新川郡に暴徒起り、富豪及ひ扶持人十村等の家屋を破壞し、放火す、

〔越中地方農業雜誌〕　明治二巳年夏頃長降ニテ凶荒ス、尤夏ノ土用明キヨリ稻株ニ枯穗見ヘ、縣内ニテ別テ上下ノ新川郡ハ多シ、且養水冷水懸リノ地ニ尤多シ、又高低ノアル地所モ多凶シ、又肥ヲ多ク用ユル平地ニテモ株ノ大ナル分ハ是又許多枯ル、故ニ礪波射水兩郡ハ金澤舊領主ヘ早ク請願シ、收納米ヲ幾多免許アレトモ、新川兩郡ハ其請願遲延ナリ、且礪波射水兩郡ハ、中口ヨリ米納藏該地ノ向寄々々ニ分裁シ、築造アル故ニ藏入ノ便宜ニテ、其係リ吏員出頭シ早

ク其事ヲ謀ル、新川郡ハ、里程ヲ隔テ、運輸シ納米スル故、總テ何事モ遲延トナル、又彌波射水ハ郡吏以前ヨリ古高所有スル地主ノ吏員故便宜ヨシ、新川郡ハ、古田新田ノ地主、或ハ市街商法ニ關スル吏員打交リ之レヲ行フ故ナリ、且前兩郡ニ比較スレバ大ナル遠ヒアリ、是等ニ付キ人民意外ニ沸騰スルアリ、

因ニ云、此年十月半バ頃ヨリ、新川郡常願寺川東向寄ノ村々、人民黨ヲ結ヒ同盟シ、郡吏ニ携ハル人ノ豪農家屋、或ハ土藏物置等ヲ數百人ニテ打毀チ、其家財ニ至ル迄モ一々損傷シ暴動ヲナス、概略一週間計リナリ、尤其際村々ノ長立、人民ニ松明又食事等ノ用意ヲ觸狀ニテ廻シ置キ、承諾セザル該家ハ又右ノ暴動ヲ働ク故、人皆恐怖シ其意ヲ遵守ス、尤右一條ハ上新川郡松本開邊ヨリ泊邊マテナリ、此頃水橋川ハ架橋ナク舟渡シナル故、夜中ノ往行甚東ナク故カ、該川ヨリ西ヘ一切來ラサルナリ、右事件ニ付、舊加州藩主士族等ニ令シ、其暴動ヲ鎮メンカ爲メ武器器械等ヲ持參シ、數十人派出ヲ命ス、其際富山藩士ノ内ヨリモ、亦其助成トシテ頭立吏員二名、下官許多引率シ、遣ハサントヲ發出ナスニ、豊計ランヤ、魚津邊ニ至ル頃、徒黨解散スル由注進ニ付各歸郷ス、是等全ク、該郡吏員長立人ノ農事ニ志薄ク、下情ヲ視察セザルヨリ謀ラスモ其事件ニ立至ルナラン、故ニ其後農民救米、或ハ借用米ヲ請願シテ許多支給ス、又此年、舊富山領内ニモ村々ノ窮民各バンドリヲ着ケ、市街覺中町舊旅家ヘ押集リ甚ダ騷ガシ、故ニ其請願ヲ容レ、救米、借用米現石壹萬石余給與セラル、但シ此年暮中ニハ米價騰貴シ金拾圓ニ至レトモ、翌春ニ至リ西洋米入湊シテ漸々下廉ニ至ル、且藩主ヨリ領内豪農豪商ニ令アリテ、窮民ニ救助賑恤ノ法ヲ諭シ、所々ノ郡市等ヨリ有志輩、金拾圓ヨリ百圓二百圓ヲ助成ス、

〔新川郡百姓動亂留〕

新川郡百姓共、ばんとりを着所々江寄集リ、夫ゟ騷立放火等仕候人數大躰書、

十月十二日　七八十人計　東加積組印田新村領江寄集リ候人數
同十六日　千人計　大布施組御用所江歎願ニ罷出候人數
同十九日　弐千人計　右組々之者共出度旨ニ而下村
同二十日　千人計　下布施組之者共同斷組之
同日　弐百人計　中加積組中嶋村領江寄集リ候人數
同二十一日　七百人計　同組之者共岩瀬郡治局江歎願ニ罷出候人數
同二十八日　三十人計　東加積組之者共早月川筋江罷出爲惣代兩三人魚津相談所等江罷出候事

同二十日　百人計　上條組上川原村江寄集り候人數

同二十日　五百人計　清水堂村江端同斷

同二十日　千人計　同所江同斷

同日夜　貳千人計　結城甚助方江指向候人數

同日夜　千五百人計　朽木兵三郎方江同斷

同二十五日　八百人計　結城善丞方江同斷

同日夜　千人計　石佛村七左衛門方江同斷

同二十九日　千五百人計　高野組竹内村無壓寺江寄集り候人數

同日夜　貳千人計　四加茂宮川原江兵隊御出張之所川原下筋方引取り相集り候人數

同日夜　數千人　石佛村七左衛門方江指向候人數

同日夜　同斷　寶田六左衛門方江同斷

同日夜　同斷　神保助三郎方江同斷

十一月二日夜　七千人計　伊藤彦四郎等居宅取毀候上早川原江寄集り候人數

同三日朝　貳千人餘

此末、下新川上新川人數打合候事故、大凡貳萬人餘と申由に御座候、



同日　壹萬人計　丹見村邊江也集人數

〆

○中略

家并土藏等取毀之覺

十月廿四日　家并土藏等三つ取毀　御扶持人十村　結城甚助

同夜　家并土藏等貳つ同斷　平十村　朽木兵三郎

同　斷　結城善丞

同二十五日夕　家取毀納屋壹つ燒捨　新田才許ニ而組才許石佛村　七右衛門

同夜　家　取　毀　廣野新村　與助

同二十六日夕　戸障子等取毀　同村　文助

同夜　同　斷　廣野村　平右衛門

二十六日　戸障子等取毀　北島村　六右衛門

同　斷　法音寺村　庄右衛門

納屋燒拂　石佛村　七左衛門

二十九日夕　土藏貳つ取毀

但再取毀

| | | | |
|---|---|---|---|
| 二十五日夜 | 家取毀 | 結城善丞手代 | 茂兵衛 |
| 二十九日夜 | 家并土藏弐つ取毀 | 森尻村 平十村 | 寶田六左衛門 |
| 同夜 | 家取毀土藏燒捨 | 同人手代朽村 山田七日新村 | 多助 |
| 同夜 | 戸障子等取毀 | 佐野竹村 | 宗次郎 |
| 同夜 | 家取毀 | 笠木村 | 孫右衛門 |
| 朔日曉 | 家土藏共取毀 | 無組御扶持人 十村並 | 神保助三郎 |
| 同日 | 家取毀 | 同人手代 吉島村 | 孫兵衛 |
| 同日 | 同断 | 同断 同村 | 甚作 |
| 同日 | 同断土藏弐つ取毀納屋壹つ | 紋左衛門手代 同村 | 甚右衛門 |
| 朔日夜 | 壹軒燒捨 | 平十村 田家新村御用所 | 米澤紋左衛門 |
| 同日 | 家燒捨土藏弐つ同断 | 同断 | 神保祐三郎 |
| 同日 | 家取毀 | 同人手代 三日市村 | 清藏 |
| 同日 | 同并土藏弐つ同断 | 紋左衛門手代 同村 | 善藏 |
| 同日 | 家取毀 | 祐三郎手代 同村 | 傳三郎 |
| 同日 | 同断外ニ納屋壹つ | 逢次郎手代 同村 | 藤右衛門 |



| | | | |
|---|---|---|---|
| 同日 | 同断 | 祐三郎手代 同村 | 彦十郎 |
| 同日 | 同断 | 同村 同村 | 長次郎 |
| 同日 | 家土藏取毀 | 佛田村 | 平兵衛 |
| 朔日夜 | 家燒捨土藏取毀 | 平十村 | 野島和七郎 |
| 同日 | 戸障子等取毀 | 入勝村 | 興三九郎 |
| 同日 | 同断 | 和七郎手代 同村 | 次右衛門 |
| 朔日夜 | 戸障子等取毀土藏壹つ同断 | 紋左衛門手代 入勝村 | 重五郎 |
| 二日朝 | 家并土藏燒捨 | 大家庄村 | 六郎右衛門 |
| 同日 | 同断 | 月山村 | 宗右衛門 |
| 同日 | 家并土藏四つ取毀内壹つ燒捨 | 御扶持人 十村 | 伊東彦四郎 |
| 同日 | 家取毀 | 次郎左衛門手代 泊町 | 清之丞 |
| 同日 | 同断 | 同所 同所 | 次右衛門 |
| 同日 | 同断 | 同所 同所 | 勘右衛門 |
| 同日 | 同断 | 幸右衛門手代 所 | 恒右衛門 |
| 同日 | 同断 | 同所 同所 | 新八 |

同　　同所　　榮次郎
同　　同　和七郎手代　清六
二日　家焼捨土藏等三つ同斷　平十村　伊東幸右衛門
朔日夜　同斷土藏貳つ同斷　御扶持人指加十村　田村前名
朔日夜　貳軒取毀　前名手代　兩人
朔日　家取毀燒失　山廻り齋木村　新左衛門
同日　家取毀　宮津村　平右衛門
同日　同斷　出村　助右衛門
同　　同斷　大海寺新村　助七郎
同　　同斷　大海寺野村　長八
同　　同斷　金山谷村　與三右衛門
同　　同斷　觀音堂村　茂三郎
同　　同斷　鹿熊村　九郎右衛門
朔日夜　家土藏共取毀　中新村　豐右衛門
二日夜　同斷　新田才許舟見村　茂兵衛



朔日夜　同斷　生地町　平
同日　同斷　柵山村　武右衛門
同日　家取毀　石田村　吉右衛門
同日　同斷　同村　與次郎

○中略

覺

一壹人　鐵炮疵　平柳村領ニ而　死人
一壹人　刀鑓疵　大屋村領ニ而　死人
一壹人　刀鐵炮疵　泊町領ニ而　同
一六人　刀疵　同　同
一壹人　刀鐵炮疵　同　同
〆拾人

村名名前等相知不申候

右今般亂妨人御打拂ニ相成候内、手負死人相調理書上之申候、以上、

巳十一月三日　伊東次郎左衛門

○中略

明治二巳十月ゟ百姓亂妨之事件ニ付、役義御取放し交名書、

| | | |
|---|---|---|
| 布施山開當分才許 | 無組御扶持人十村並 | 神保助三郎 |
| 太田組才許 | 御扶持人十村 | 伊東彦四郎 |
| 弓庄組才許 | 同 | 結城甚助 |
| 廣田組才許 | 同 | 岩城平左衛門 |
| 上條組才許 | 平十村 | 金山十左衛門 |
| 高野組才許 | 同 | 朽木兵三郎 |
| 中加積組才許 | 同 | 寶田六左衛門 |
| 大三位組才許 | 同 | 野嶋和七郎 |
| 大布施組才許 | 同 | 神保祐三郎 |
| 下布施組才許 | 平十村御扶持人指加 | 田村前名 |
| 下條組才許 | 平十村 | 結城善丞 |
| 東加積組才許 | 同 | 神保達次郎 |

西加積組當分才許

| | | |
|---|---|---|
| 新石佛村才許 | | 七左衛門 |
| 十村並勤方田才許新堀村 | | 八郎平 |
| 新田才許四ツ屋新村 | | 源三郎 |
| 同舟見村 | | 茂平 |

〆拾六人

十村之内無崇交名書、

| | | |
|---|---|---|
| 島組才許 | 平十村 | 杉木彌五郎 |
| 上布組才許 | 同 | 米澤紋左衛門 |
| 三位組才許 | 同御扶持人指加 | 伊東次郎左衛門 |
| 五ケ庄組才許 | 平十村 | 伊東幸右衛門 |

〆四人

十一月廿五日更組才許替リ交名書、

| | | |
|---|---|---|
| 高野組當分才許 | 射水郡御扶持人 | 高島庄右衛門 |
| 東加積組當分才許 | 鹿島郡御扶持人 | 岡部平右衛門 |
| 大田組才許 | 能美郡御扶持人十村 | 牧野平吉 |

上條組才許　平十村御扶持人指加扶　杉木彌五郎
上布施組才許　平十村　米澤紋左衛門
三位組才許　平十村御扶持人指加扶　伊東次郎左衛門
五ヶ庄組才許　平十村　伊東幸右衛門
　　元新田才許也
大布施組才許　同　寶田彌三郎
　　元新田才許也
下布施組才許　同　柚木權十郎
　　元新田才許也
廣田組才許　同　岩城重右衛門
　　元新田才許也
大三位組才許　同　野島友助
西加積組當分才許　石川郡十村　得能三右衛門
中加積組當分才許　礪波郡十村　野澤善兵衛
下條組當分才許　射水郡十村　竹脇與三右衛門



弓庄組當分才許　奥郡十村　中橋勘左衛門
島組當分才許　新田才許神田村　甚六郎
布施山開當分才許　同新堀村　半三郎

初而御召出シ

新田才許　入膳村　元直支配也　順之助
同　住吉村　元直支配也　宗七
同　東長江村　金山十左衛門悴也　十郎兵衛
同　天正寺村　十次郎悴也　彦市

〃　〃

○中略

新川郡淺生村　伊七郎

右之者犯罪不屆ニ付、准流十年被仰付候處、癈疾ニ付收贖申付候條、右贖金拾三兩弐歩、伊七郎本家同村伊兵衛等ゟ、至急取立可指出候也、

辛未十一月四日　執法係

右郡　里　正江

新川郡塚越村　忠次郎

斬　罪

右之者、不屈之趣有之、頭書之通、今日御仕置被仰付候條、可得其意候也、

辛未十月二十七日　　執法係

右　里　正江

里正預ヶ　新川郡中馬場村　清三郎
同　同村　與三次郎
同　竹内村　二右衛門
遠行留　浦田村　七右衛門
謹慎　吉島村　助三郎
同　神田村　甚助
同　東長江村　十左衛門



同　新堀村　兵三郎

右之者共、詮議中頭書之通申付置候得共、最早指解候條、得其意夫々申渡、請書取立可指出候也、

辛未十月二十七日　　執法係

右郡　里　正江

新川郡寺田極楽寺村　權右衛門
同　村　文三郎

右之者共、病氣少々ニ而モ快候ハヽ、來月七日別人相添、押而罷出候樣、可申渡候也、

辛未十月二十七日　　執法係

右郡　里　正江

〔金澤公事場取糺口書〕

新川郡高野組塚越村百姓　忠次郎口書

私義今日御引出、昨年凶作ニ立至候ニ付、作難御取扱願等ニ事寄、同十月同郡百

姓共徒黨を結、暴動ニおよび候始末、有體可申上旨、御糺被成候、

去秋非常之難作ニ相成候處、例歳之通秋締御請仕候樣、組才許ゟ被申談候ニ付、作損御取扱之義、村役人ゟ願立候處、先御請之義例歳之通相心得、其上ニ而如何共相願可申旨被申聞候ニ付、則御請仕御取扱之義、相願罷在候處、何之樣子モ相知不申、然所十月ニ至リ、御收納米御藏納仕候樣、組才許ゟ被申渡候ヘ共、御取扱之樣子相知不申内ハ、御藏納難仕旨百姓一統申立、其段村々役人ゟ相達候處、御請仕候上ハ、御取扱願の義ハ、御採用難被成旨被申談候由、村役人ゟ申聞有之、何れ茂當惑仕居候、且又從前御藏納仕候節、新京升ニハ候得共、年古用來候分ニ而、種々奸計モ有之體、兼而百姓共申立罷在、其余納米下敗之義請負人有之、石ニ付壹升宛納人ゟ指出、米積人等日用稼の者多立入、不正の族有之體、是又百姓難義之趣申立罷在候所、昨年之義は改而新京升御渡ニ相成、下敗之義ハ納人ゟ相整、米積人等日用稼之者立入不申事、御布告有之候風評承リ、一統難有存罷在、私義十月十日頃、水橋御藏江籾納ニ罷越候所、下敗茂出來致居、米積人等も立入罷在、且籾之義も納高之外ニ、爲貯用持參仕候所、矢張從前之桝ニ而量缺多相成候ニ付、其節納方ニ罷出居候十村手代江申入、桝之樣子得と見受申候所、裏ニ紙を張印章有之、右ハ同郡十村金山十左衛門殿、見屆之旨相聞候ヘ共、兼而承リ居候趣と相違仕、不心服之義に付、歸村之上村役人を以、前條之趣願立候所、其義ハ御布告ニ相成居候廉も有之候得共、下敗等之義ハ當年之處、惣代肝煎を以取極有之、新京桝之義ハ一時ニ相成、指支候ニ付、指當候處在來之桝吟味之上、印章を加相渡置候間、當分右升を以相納候樣、被申談候旨申聞有之、其後村々之者共、作難之事而已相嘆罷在、同月廿二日國重村領上川原江寄合いたし、願方之示談仕候旨、村方竪近村ニモ噺有之、同日暮過ゟ追々罷越候ニ付、右場所江罷越候所人多々相集リ居、十村中ニ而ハ、加樣之年柄三年續候而茂御取扱無之候間、御收納不足之者ハ、家財賣拂候而成共皆濟可仕、其上ニ而飢渇ニ可及者ハ、撫育所入可願出旨被申聞、一統立行不申旨ニ而、人々得手勝手而已口々ニ申立罷在候ニ付、私義右寄合之者共江對し申入候者、右樣得手勝手而已申立居候而ハ、何之示談も整不申、私存寄ニ而者凶作御取扱之義ハ、追而何とか御談も可有之、指當り御藏納米ニ付而ハ、改而新京桝御渡之義、幷下敗請負人、米積人等指止之義、御布告有之由ニ候得共相改り不申、是全十村同手代竪惣代肝煎申合不相改義と被察、且御藏納中欠

米之義も、御藏之鍵十村手代江預り居、百姓共ゟ欠米相辨候義ハ不心服ニ候間、百姓ゟ番仕飯料ハ御渡ニ相成、以來十村同手代暨惣代肝煎ハ、百姓入札ヲ以被命候樣、夫々願立候者可然哉と申述候所、何れも別存無之候間、私引請願立呉候樣申聞候ニ付、左候ハヽ、私義萬人のため一命を抛可願立、併大勢騷立亂妨ケ間敷義有之候而ハ、願方之障リニ可相成候間、心得遂無之樣得と申談置候得共、今一往組才許江相願、何れにも取揚無之候ハヽ、金澤表江相願可申と存、其翌朝村肝煎を以願立候得共、一切取揚無之旨申談ニ付、其夜清水堂村下河原江罷出申候所、在所宗三郎、與三兵衛も罷出追々相集、其夜ハ上川原寄合之節とは、格別人多ニ相成候ニ付、尚又前晩示談之趣申入罷在候内、廿四日晩天ニ相成、郡治局下役之由ニ而四五人被罷越、立騷候義不相成旨等說得有之、私共願之趣被相尋候得共、示談中ニ而相決不申旨相答候所、左候ハヽ、舟橋村江引取居候間、相談相決候ハヽ可申聞旨被申談、重而同日朝罷越被相尋候所、何分人多ニ而中ニハ、法外之趣申立候者も有之候所、右役人中立腹ニ而左樣之我儘者ハ、貪着難罷成段被申聞候所、一統騷立、其内寺田極樂寺村十兵衛方ニ而握飯指出候由、村の者共申聞候旨に而、追々右村之方ニ罷越候ニ付、私義も一集に罷越、十兵衛方ゟ指出候食事之手傳仕居、夫ゟ若宮川原江罷出、於同所一統江申入候ハヽ、是ゟ富山通金澤江罷出相願候ハヽ、可然と示談仕候所、中には御扶持人十村之方に罷越、相願可申旨申立候者も有之に付、私に而は所全御扶持人等に而取揚有之間敷候間、直に金澤江罷出可申旨申立候得共、其節は甚人氣引立居、私申入候趣取用不申、同郡御扶持人弓庄組才許神田村結城甚助殿方江一統罷越候故、私義心ならす跡若宮新村平八方江罷越申候、然内結城殿門前に而淺生村伊七郎逢申候に付、唯今人を以焚出之義を結城殿江申入置候間、食用次第品能爲引取可申と申入候所、伊七郎申聞候者、唯今食用所に而者無之、先つ願方仕候而可然と申合居候内、大勢之者、結城殿致亂暴候體に而、夥敷物音仕、無程新堀村朽木兵三郎殿方江罷越候由に付、私義は同所江も罷越不申、其内高野開發村肝煎久兵衛と申者、高野組總代肝煎に相成居候所、同人方取毀可申由風評承候に付、私義罷越同人之所業人氣に障り候義、一統江言譯爲致、亂妨不致樣取鎭罷在候所、當願寺川原江郡治局下役の由に而、被罷越候旨承り候に付、直樣同所江罷越候所、一統立騷不申樣種々說得有之、願之趣被相尋候に付、凶作御取扱を初、改而新京桝御渡之義、并御藏納米、

下敗米積人等之義御藏米欠立辨方に付、百姓番之義、且十村等百姓入札を以被命候樣、夫々相願候所、其趣は速に金澤表江御達可被成、大體廿九日頃迄には樣子相知れ可申候間、決而立騷不申樣被申渡候に付、嘆願之趣御採用に相成候へは難有義と何れも歸村仕候、其節私心付候は、衆人之ため引請嘆願仕候而も、入費之出道無之と存候に付、右寄合候村々壹軒ゟ錢百文宛取集、同廿九日一村ゟ壹人宛右錢指參、竹内村無量寺迄罷越候樣申談歸宅仕候、其後高野組才許朽木兵三郎殿、弓庄組才許結城甚助殿被免、高野組は同郡御扶持人十村吉島村神保助三郎殿、弓庄組は同郡同斷沼保村伊東彦四郎殿、當分才許被命候旨御布告有之、村々に而は是迄助三郎殿取捌を嫌居候所、組才許に相成候而は彌立行不申旨一統申立罷在、廿九日早朝ゟ追々無量寺江相集り、就而は助三郎殿ゟ高野組御用所に、新田才許新堀村朽木八郎平殿方、借用被成候由風評有之、寄合候者共之内、八郎平殿方江可罷越抔と、申立候者も有之候故、若大勢之者罷越候はゝ、亂妨可致哉も難計に付、淺生村伊七郎義、八郎平殿方江罷越、助三郎殿に家貸渡候義被指止候樣申入、其趣一統江談置候筈に御座候、右寄合示談仕居候内、人氣立大勢之者追々神保助三郎殿方江罷向候體に付、私義も不取敢罷越、亂妨等之義有之候へは、取鎭可申と存罷在、然所其場に在合候人々申聞候は、私義衆人之願を引請候身之上に、若故障等有之候而は不相成と、宿忽籠體之もの持參仕候に付、右忽籠に乘罷越候所、夜中之義に而爾と相分り不申候へ共、前後暨脇道ゟ夥敷人數松明を照し群參仕、私義小林村十村方等江罷越候節は、最早取毀候跡に而、夫ゟ吉島村隣村相木村醫者之方江罷越、暫休息仕候所、十一月朔日未明に而助三郎殿方も多分取毀候跡に候故、於同所も亂妨不致樣說得仕、追々罷越候者共江、食物分配仕居候所、三日市入膳道驛立候由風評有之、私義無量寺ゟ乘用仕候忽籠相損候所、何方ゟ持參仕候哉、乘忽籠壹挺有之候付右忽籠に乘、三日市江罷越候所、同所十村等も取毀有之に付、直樣入膳江罷越候所、是又十村等取毀有之、其餘取毀可申旨申立居候箇所は、私罷越夫々取鎭申候所、泊町小澤屋等ゟ罷越呉候樣使指越候に付、則右町江參候所、同所十村等取毀候旨申聞候に付、小澤屋江立入候所、同人隣家草野屋ゟ罷越呉候樣申越、同人方に而甚馳走に預り、小澤屋江罷歸暫時寢所江入申候所、何者共不知寢所江踏込、刀を以左之頰江切付立去申候、併格別深手に而も無之候故、疵所手拭に而包罷在、其内同宿暨外宿之者共追

々罷越候所、私宿所與庭之方ゟ小銃打騷、頻りに銃聲相迫り候に付、右小澤屋を立出怒鬼籠に乗、上手之方江引取申候所、村々ゟ集り候者共一時に散亂仕、私義同郡青木村領に而、郡治方役人中に被召捕申義に而、一統之願方引請候義は、相違無之候得共、御取扱願等に事寄、爲致亂妨候義は曾以無御座候、

上河原寄合候節、誰々罷越居候哉、有體可申上旨、御糺被成候、

其節見請候者は、在所與三兵衛、宗三郎、竹内村二右衛門、中馬場村清三郎、同村與三次郎と申者に而、其余は夜中故慥に見留候者無御座候、

右寄合之節、竹内村二右衛門義、明日は御藏納可仕旨、村役人ゟ申談有之候間、如何可致哉と私江相尋候所、加様之時節米納候而は不宜、其上にも納方に罷越候者有之候者、指押候旨申入候由、白地に可申上様、御糺被成候、

二右衛門納方之義相尋候に付、願立暫見合候者、可然旨申入候得共、指押候様と申入候義無之、其節は寄人も繞に候故、明晩重而可致寄合旨に而引取申義に御座候、

清水堂村下川原江寄合候節は、誰々罷越居候哉、其節郡治局下役中江、何故願之趣相違不申候哉、且若宮川原に而寄合候者共、名前致帳記候筈、其節結城甚助殿方江可罷越旨、申立候者誰々に候哉、夫々可申上旨御糺被成候、

清水堂村下河原江寄合候節は、前條申上候五人并淺生村伊七郎罷越居、其余は甚無御座候、於同所郡治局下役中江、願之趣相違可申所、人多之内に不計法外之申立等仕、相談相整不申、且若宮河原に而帳記仕候筈に御座候得共、右は何村々々之者共、相願候と申義、取調理候ためにに御座候、於同所結城殿江罷越可申旨申立候者は、其節寄合居候者共、大體同様申立罷越候義に御座候、

竹内村無量寺寄合中、浦田村七右衛門罷越候筈、且杉木彌五郎殿手代淺生村伊七郎を以呼寄、申談候義有之筈共、様子夫々可申上旨、御糺被成候、

浦田村七右衛門罷越、私歎願之様子段々相尋、同人存寄申聞候得共、右申聞方甚手ぬるき様に存候故、左様之緩成願方難致、眼前渇命之場江至候故、何れ押立相願可申旨申入候、且又杉木殿手代者淺生村伊七郎を以呼に遣し、則罷越候に付、無量寺與之間江相通面會いたし候所、右手代又吉申聞候者、杉木殿江大勢之者罷越候義無之哉と相尋候故、私申入候者、彌五郎殿は未致對面候へ共、是迄慈悲心の人と承居候間、大勢の者罷越候筈は無之、就而は今度願之趣、郡宰殿江直に相願度候に付、其段執次いたし貰度候得共、彌五郎殿金澤江

被罷出、せかれ彌八郎殿は、東岩瀬江被罷出候由に候間、私義吉島村迄罷越候
戻り、加茂宮橋に而郡宰殿江引合に相成候樣、相願度候間、此段彌八郎殿江相
達、又吉同道罷越呉候樣申入候義に御座候、
無量寺に而寄合之節、神保助三郎殿、高野組才許に相成候義、百姓一統不心服に
而、彼是申立居候體に候得者、何とか示談不致筈は無之、然所大勢之者共人氣立、
追々吉島村神保殿方へ指向候體に付、不取敢爲取鎭方罷越候旨申上候得共、甚
不分明之申上方、元來於同所寄合何事之示談も不取極、私を目當に仕居候者共、
無謂吉島村江罷向候と申義は無之筈、全取包罷在候體に而、重々不都合至極に
候間、有體可申上旨御糺被成候、
其節一統江申入候者、今日寄合候義、別成事に而も無之、結城甚助殿、朽木兵三
郎殿を及亂妨候所、神保助三郎殿は御扶持人之出頭に而、當時高野組當分才
許に相成候得共、同人才許を請候義甚不快、依而、致亂妨候節は一番に指向可
申筈、尤同人方及亂妨候上は、高野組才許も御指除に相成、御扶持人も勤まり
申間敷候間、一統指向可申、何茂如何存候哉と申入候所、私之申分尤に候間、一
統罷越可申旨申聞候に付、重而此間罷出候節、郡治局役人說得に寄て、何れも



散々に相成致歸宅候、加樣之譯に而者、所詮志を遂候所江者至り不申候間、今
度者何れも一心同腹に相成可申、就夫壹軒ゟ壹人宛罷出候得共、人多に相成
候故、後日に至り、假令御穿鑿に相成候而も、縛り候にも繩も盡き、牢江入候に
も入れ所無之故、大勢罷出候事にいたし候義に而、其上何とか申義有之候得
者、私引請可申候間、其義は安心いたし、今晩堀江之川原江集、吉島村江指向可
申旨私ゟ申談、同寺出立仕候處、追々罷出候者共何程有之候哉、相知不申、前後
左右に打續、堀江之河原通直に下筋江罷越申候、
同寺江、寄合候樣申談置候、村々は、大凡何程に候哉と、御糺被成候、
高野組、弓庄組、上條組、下條組に而、大凡弍百ヶ村計にも相成可申哉と奉存候、
同寺に而、取集候錢高何程有之、如何いたし候哉と、御尋被成候、
右錢は惣高三百貫文餘有之、同寺住持江指預、入用之節取に遣候旨、申入置候
義に御座候、
同寺出立仕候節、翌朔日滑川迄立歸候圖に而、伊七郎を同所江遣し、食事之爲致
用意候由、左候得者、私義何方迄罷越候心得に候哉、夫々申上候樣、御糺被成候
吉島村神保殿亂妨におよひ候上ハ、直に滑川江罷越、同所に而伊七郎に逢、夫ゟ

郡宰殿江直願可仕心得ニ而、食事之義ハ見計五升一斗宛、焚出爲致候樣伊七郎江申談置候義ニ御座候、

相木村醫者之方ニ罷在候節、在所宗三郎、並浦田村七右衛門罷越候筈、夫々可申上旨、御糺被成候

宗三郎義、罷越茂空腹ニ相成致方無之、追々罷歸候間、如何いたし候ハヽ可然哉と、私江相尋候ニ付、如何共取計食事爲致可申候間、罷歸候者指留候樣申談候、其後宗三郎義、如何致候哉存不申候且浦田村七右衛門罷越、一軒ゟ百文宛持參仕候錢、致帳記罷在、其後ハ如何いたし候哉存不申候、

相木村ゟ下筋江者、如何之譯ニ而罷越候哉と、御糺被成候、

其義ハ、相木村醫者方ニ罷在候内、下筋殊之外動搖之體ニ而、追々私共ニ罷越候樣申越、大勢之者も騒立、私儀籠ニ乘申候所被引立、下筋江罷越申候、其時分ハ取登せ罷在前後不辨、入膳迄罷越始而心付候所、下筋江參り候ゟ彌增人氣引立、私參り候上ハ、如何體之義相働候而も、宜敷と相心得候哉、以之外之動搖ニ相成、後悔仕候得共詮方も無御座、其内泊町小澤屋等ゟ使を以、私ニ早々罷越呉候樣申越、無據泊り迄罷越候義ニ御座候、下新川格別人氣立候義、全私罷越候故と實以恐入罷在候義に御座候、

右醫者之方江は如何之譯に而立入候哉、且大勢之者共、食事は致如何候哉、尤所々焚出方も申談候に而可有之、夫々不包申上候樣、御糺被成候、

醫者之義は、門前に罷在候所、大雨に相成無據立入候義に御座候、大勢ノ者食事之義は、一々存不申、尤焚出抔私ゟ申談候義は無之候得共、如何之都合に相成居候哉、所々ゟ持參仕候故、大勢之者江配分いたし、食事爲致申義に御座候、所々ゟ、焚出持參仕候躰に而は、何れ私ゟ申談候義に而可有之、無左而は無謂持參仕候義は無之筈、有躰可申上旨、御糺被成候、

別段私ゟ、申談候と申義は無御座候得とも、所々亂暴に及ひ候躰も有之所、食事指出向は多分亂妨いたし不申故、巨細は存不申候得共、右等之邊ゟして、多焚出持參仕候哉と被存申候、

相木村醫者之方におゐて、取集候錢は如何いたし候哉と、御糺被成候、

於同所取集候錢高、大凡四五拾貫文計も有之、入膳江罷越候所、同所亂妨中、怪我人出來候故、療治料として配分仕、殘錢所持罷在被召捕候節、右錢之義は御引揚に相成申候、

若宮川原、竪無量寺、相木村に於て相認候帳冊は、如何いたし候哉と、御糺被成候、
右帳冊は、如何相成候哉分り兼申候得共、必混雜中取失ひ申候と奉存候、尤被
召捕候時分も、所持不仕義に御座候、
私義徒黨を企候に付而者、一味之者共名前承知可罷在、且泊町に而同宿之者共
等之義も、逐一可申上旨、御糺被成候、
最前より申上候人々之外、何分人多之義ニ而、名前等相尋候義無御座故、一切存
不申、且泊町に而同宿之者共等之義も、同様之義に御座候、
無量寺より乗用之駕籠、竪相木村より乗替候分も、何方より指出候哉、夫等之様子委細
可申上旨、御糺被成候、
其義は前條申上候通、其場に罷在候人々、何方より取出來り候哉、私義曾而存不
申候、
右様徒黨企候に付而は、魚津町三ヶ屋作兵衛等之者共と、兼而及示談候義も可
有之、尤其餘主謀之者も可有之、白地に可申上旨、重々御糺被成候、
作兵衛義は、見知之者に候得共、右一條及示談候義ハ一切無之、尤其餘主謀之
者抔罷在不申、前條申上候通、私存寄一統江申入、嘆願之趣引請候所より、衆人之

寄望に預り、不容易擧動に立至、何共奉恐入候、
右様申上候得共、既に一味之内、在所與三兵衛義、結城甚助殿等之様子、並神保助
三郎殿方可及亂妨躰、宗三郎を以爲相知、其節宗三郎義委を替罷越候旨、申顯居
候得者、私義作兵衛等江及示談、暴動を企て相通有之間敷、白地に可申上旨、御糺
被成候、
作兵衛方江は、一昨年一兩度罷越候へ共、其後罷越候義無之、與三兵衛義は、作
兵衛と年久敷懇意ニ仕居候故、兩人手前ニ而申合候義有之候とも、其義は存
不申候得共、私義作兵衛と示談仕候様之義、一切無之候、
神保助三郎殿方、一番ニ取毀可申筈之旨申立、其餘不正之見込有之者共、彼是申
立居候所に而は、助三郎殿等如何躰之所業仕候哉、其様子無泥可申上旨、重々御
糺被成候、
其義は非常之凶作ニ候へ共、一粒も御取扱無之抔と申義、全助三郎殿より被申
出候故、外組才許之人々同様被申渡候義と、一統申立罷在候故、於私も右様之
心得に而、御扶持人之出頭ニ罷在候而は、下々立行不申義と存込、前條之通、寄
合之人々江申談候義ニ御座候、尤同人竪其餘之人々も、不正之所業有之抔と

申立候義も有之候得共、風評而已ニ而證立候義ハ存不申候、
無量寺出立仕候節、吉島村江指向不申以前、所々及亂妨居、其余私指向不申ケ所
も所々及亂妨候義ハ、夫々私方申談候ニ而可有之、其樣子有躰可申上旨、御糺被
成候、
其義は、別に私方申談候義は無之候得共、前條申上候通、私罷出候上は、如何樣
之亂妨仕候而モ、不指支義と相心得、所々及亂妨候義ニ而、何共奉恐入候、
右之通申上候處、元來私義願方ニ事寄せ、恐民を鼓舞し徒黨を結ひ、一味之者共
所々致亂妨、食事等爲焚出、無謂米錢取請、身分不相應之奢籠ニ乘り、所々奔走い
たし、右等之邊方格外人氣立、私罷越候上は、如何躰之亂暴いたし候而も、不指支
樣相心得候者、全私義於無量寺、衆人江申談候義方、右樣之氣請ニ立至リ、遂ニ新
川一郡之動搖と相成候義は、始終私之擧動方事生し候義、如何相心得罷在候哉
と、御糺被成今更申譯も無之、重々恐入候段申上候、尙追々御糺之趣も有之候間、
先是迄之通相慎罷在候樣、御申渡奉畏候、
右申上候通、相違無御座候、以上

庚午十月

塚越村百姓　忠次郎



廣德館を藩學校と改稱す、時に富山に變則英學校、西洋醫學校、變則中學校、
共立義塾等の設立あり、

〔廣德館沿革要略〕　明治二年十月、英學教師森本弘策ヲ聘シテ、別ニ變則英學
校ヲ創立シ、寄宿通學ノ生徒ヲ募ル、當時幼年ノ子弟多ク此校ニ入學ス、又廣德
館ノ名ヲ廢シテ更ニ藩學校ト稱シ、之ヲ富山二番町ニ移シ、漢學ヲ專修セシム、
其教員等如故、又其支校ヲ同總曲輪ノ民邸ニ設置シ、德聚堂ト稱シ、課程ヲ分チ
テ皇學、漢學、洋學、數學ノ四課トシ、士民ヲ教授ス、之レ平民ヲシテ學校ニ就カシ
ムルノ始ナリ、又別ニ演武場ヲ同山王町民邸ニ移シ、槊劒ヲ專修セシム、此ニ於
テ乎廣德館從來ノ學規及ヒ院內ノ武技盡ク廢棄ス、此ヨリ先キ西洋醫學校ヲ
山王町ニ創立シ、加州士族高峰昇ヲ教師トシ、醫生徒若干ヲ募ル、民間ニハ漢學
ノ家塾ヘ入學セシメ、藩費ヲ以テ之レニ給ス、尙岡田信之、小西有義、松田煌、佐伯有
種等ノ私塾アリ、以テ漢學ヲ教授シ、其他五六ノ習字家アリ、各幼童ヲ教育ス、已
ニシテ同四年七月、廢藩置縣ノ令アリ、百事變革安永以降連續セシ學規再變シ

テ全ク廢絶セリ、然ルニ明治五年士族渡瀬恒時、山田清純等文學ノ久シク廢棄ニ屬スルヲ憂ヒ、有志輩ト協力シテ共立義塾ヲ設ケンコトヲ縣廳ニ請願シ、認可ヲ得テ富山御指町ニ創設ス、生徒入學スルモノ其數夥多ナリ、塾則ノ要略末尾ニ記セル如シ、又此ヨリ先キ有志者相謀リ、變則中學校ヲ同梅澤町ニ設置ス、後チ共立義塾モ該校ニ合併ス、偶同年七月、學制頒布ノ後ニ際シ間モナク閉鎖ス、

〔富山市沿革志〕　明治二年十月、英學校ヲ近藤邸ニ創立シ、寄宿通學ノ、生徒ヲ募集セラル、斯ノ時ニ方リ幼年子弟多ク之ニ入學ス、後チ洋學北校ト改稱ス、是ノ月、廣德館ヲ二番町勅使旅館跡南ハ、今ノ富山警察署邊ニ表門アリ、北ハ總曲輪ニ裏門アリ、東ハ神田横町ヲ限リ、西ハ民家ニ隣リテ地アリ、ニ移轉シ、藩學校ト改稱シ、漢學ヲ專修セシメ、生徒ヲ別チテ之ヲ上等生、中等生、下等生、及ヒ等外生トセラル、等外生ハ、四書五經ノ素讀ヲ習フ者ナリ、別ニ支校ヲ、總曲輪西尾逸角邸ニ搬メ、德聚堂ト稱シ、士族及ヒ平民ノ子弟ヲ教授セシメラル、其ノ課程ハ分チテ皇、漢、洋、數學ノ四科ト爲ス、是レ平民ヲシテ學校ニ就カシメラル、ノ嚆矢ナリトス、

又山王町（蓮山田嘉勝邸、今ノ高致ニ醫學所ヲ設ケ、醫學生若干名ヲ募ラル、其ノ尊常小學校ノアル所）

最モ多キ時ハ、百四十人ニ至レリ、後チ洋學南校ト改稱ス、

〔參考〕

〔富山市沿革志〕　明治四年四月、洋學南校ヲ廢シ、五月洋學北校ヲ廢セラレタリ、

是歲、兩藩、救恤を行ふ、

〔金澤藩布令留〕

一凶作下々困窮飢渴に至り、御達候處、十二月廿六日ゟ七歲以下貳合八歲以上、三合宛所々におゐて、粥焚立被下候事、

粥ハ米、　籾引割粉（麥之代也）　粉糖、　鹽也、

右午二月日ゟ連日御渡、三月廿九日ニ而止、晦日ゟ出作人家田江は、壹人米六升宛、夫賃江見込被下、出作不致者は、七歲以下七十文、八歲以上百文宛被下候事、

〔風聞書〕一

當年稀成凶作に付、米價高貴ニ相成、下民之困難不一形、此上渴命之者有之候而は、從四位樣におゐて、御職任も不被立義と深被遊御心配、當夏以來差向御救助之御手當も有之候得共、諸商賣も手詰候より、貧窮人日々相增候、然るに當御收

納過分之御取落に相成、種々御差添に而上下一同不致協力候而は、往々御行屆難相成候而、此後市郡共協助之御規則被相定候、就而は士族におゐても分限に應し、爲救助上け米も不被申付筈に候得共、明年か多分之減祿被申付候事故、可爲迷惑と被成御察、其義は不被申付候、併前顯之通、市郡共重立候もの共、爲貧民令救助居候折柄、士族におゐても、傍觀罷在候而は人情におゐても不安義、且御收納不足御行詰之折柄に付、別紙割合之通爲協力一時御振替米被申付候條、前顯之御趣意篤と奉戴し、來る廿六日迄に民政局へ出米可有之候、然上は市郡小前のものへ、石六圓之直段を以御拂渡相成、一時凌方之詮義筋に候、且右割合已下之面々たり共、志之輩は不拘多少、右同樣申出可有之候、猶別段施行之志有之候はゝ、其段茂民政局へ可被申出候事、

但本文の通、米穀無數之年柄に付、麁食等相用半穀相除候心得、可爲勿論候、然るに濁醪等釀し賣拂候向も有之哉に相聞、以之外之事に候、是等は急度相心得可申候、

右之趣可被得其意候事、

巳十二月

## 明治三年庚午　紀元二千五百三十年

正月　戊辰朔

十四日、辛巳、金澤藩銃卒を廢して常備兵を置く、富山藩亦之を設く、

〔金澤藩布令留〕

今般、三州常備兵指置候ニ付、從前取立置候銃卒指止候條、夫々申渡、豫而相渡置候小銃等取立、兵器局江可指出候也、

正月十四日　藩廳

二小隊　小松

但分大隊口長以上一人

二小隊　碼波射水

二小隊　新川

二小隊　能登

右常備詰被命、來二月上旬出足之樣、

正月　兵制所

〔參考〕

〔金澤藩布令留〕

覺

一弐百拾壹人　二小隊二砲門輜重方共總人員

但小松

一弐百拾壹人　右同斷

但高岡

一百　六人　一小隊一砲門輜重方共總人數

但所口

一百　六人　右同斷

但輪島

一百　六人　右同斷

但魚津

一百　六人　右同斷

但　境

右小松等江、今般常備兵被相建候に付、弐番大隊、三番大隊、操口爲詰近々出足仕





候、就而は臨時非常之節於夫々兵粮米並鹽茄子等之類、右役員方斷次第渡方不指支樣、豫て民政所江御下知之事、

午二月

御付札　爲入御渡候也　朱印

兵制所

〔富山藩常備大隊職員表〕（越中史料二所收）

富山藩常備大隊職員表　（明治三年に組織されしもの）

大隊長　權少參事　森曉高　　右敎頭大屬　渡邊清知

左敎頭　大　屬　宮地義昭　　敎佐權大屬　高畠永英

小隊は一番より十番までに分たる、之れに長たる者左の如し、何れも權大屬、

一　平尾良實　二　栂永務　三　大久保秀延

四　林信敏　五　藤田成章　六　野澤直昌

七　吉田茂穀　八　山崎定武　九　河尻尙尹

十　湯口光熙

小隊の下に半隊あり、半隊長又十人何れも少屬なり、其人名左の如し、

松見善休　菊池方英　不破重定

渡邊正義　生田休復
中村信定　村一種
宮口義勝　戸田寛德　淺尾行敏

半隊長の下に分隊長あり、官は何れも少屬なり、其人名左の如し、

松田義辰　林寛美　松田信熙　平井親遜
淺野清暉　杏直義　磯野員平　渡瀨恒時
木村貞興　井上武美

筑士官少屬（中村清古　澁谷孝常）　稗官長權少屬前里壽信

分隊長の下に嚮導なるもの、亦各十人あり、何れも權少屬を以て任せらる、其姓名左の如し、

角尾貞義　須山秀清　中村定義　山田澄治
富永則次　沖田正近　森井清勝　中川源清
榮義政　長澤正清

猶ほ鼓長筑稗官、及び屬稗官なる者あり、鼓長及び筑稗官は、各央生の内より任用せられ、屬稗官は廳掌より舉ぐ、其名左の如し、



鼓長　福岡芳義　筑稗官　木田川光山　中村清慶

屬稗官（小林貞貴　森田義知　廣瀨泰利　中川武則）

嚮導の下に押伍稗官なるものあり、廳掌の内より任用す、各小隊毎に四人宛配置せらる、

一
- 山崎保直
- 淺野清棟
- 横山弘明
- 長島盛明

二
- 淺地光則
- 玉川了尊
- 今村重寛
- 磯野充繼

三
- 森田直則
- 松原信茂
- 木村義守
- 野入貞盛

四
- 明珍宗治
- 山川忠賀
- 佐久間道直
- 中川正義

五
- 久郷正嘉
- 守田直信
- 沖　尚之
- 大房致永

六
- 渡瀨恒政
- 田上道貞
- 須藤樂保
- 島田正辰

七
- 村田典治
- 堀　義正
- 石黑直哉
- 小林正重

八
- 高瀨修廣
- 前川正義
- 平井懷忠
- 木村貞育

九
- 三田一尚
- 佐藤信依
- 岡本信義

十
- 瀧口庸愼
- 谷　忠尚
- 永井陳親

市川武治　加藤清伊
鼓補長　廳掌　福原近喜
旗　押　伍長　原田義信　同　大房清辰
土工兵　伍長　木村芳直　同　河村光弘
喇叭手　伍長　渡邊信義　同　渡邊唯勝
鼓　手　伍長　宮崎直爲　同

押伍裨官の下に、又一小隊毎に伍長七八人宛、並に彈藥士一人、喇叭手一人宛を配屬す彈藥士、及喇叭手は何れも伍長と同一に過せらる、伍長の小隊別人名は左の如し、

一番小隊
勝山房成　布村昌秀　宮口光豐　平井茂義　興津貫道　田邊義正

二番小隊
橋本實閣　瀨木道行　柴垣守孝　花野直增　柳原信誠　湯口光範

三番小隊
新庄泰政　野口安國　中川秀定　藤田爲重　長谷川直輝　牧野布共

四番小隊
島田正光　安井一政　福田勝貫　守佐清範　寺澤恒督　長島盛次





隊
森　勝正
安井暉光

隊
吉田茂昌
高野以通

五番小隊
青山光秋　福澤直明　五十嵐定明　若杉直行　吉浦昌言　高橋義勝

六番小隊
竹內榮熙　小泉貞尙　山田重之　黑田正孝　堀內林友　小柴直尙

九番小隊
中村久義　奥田貞濟　日比野貞直　若松亭茂　村井尙壽

十番小隊
松山貞近　志賀宏俊　澤野永安　藤堂良孝　島田一義

隊
生　信次
小山豐秀

隊
近藤光正
村　一興

七番小隊
河村貫思　平井重義　磯野充武　村井邦貞　江本雅作　山田方辰　黑崎正治

八番小隊
窪田喜作　坪田本知　內山政雅　池田佳政　松爲周幸　高橋祐直　渡邊尙弘　渡邊由規

隊　根塚正貞　隊　笹川茂則
小塚之定　新山一政
和泉美明

猶ほ各番小隊に付屬せる彈藥士と喇叭手との人名は左の如し、

| 小隊番號 | 彈藥士 | 喇叭手 |
|---|---|---|
| 一番 | 藤堂良則 | 横江勝芳 |
| 二番 | 林政義 | 北岡法芳 |
| 三番 | 杉坂昆治 | 河部幸秀 |
| 四番 | 池澤忠直 | 高島照光 |
| 五番 | 今村直久 | 岩城正輝 |
| 六番 | 市原房暉 | 田村正義 |
| 七番 | 吉尾宗元 | 森田一久 |
| 八番 | 山崎高塔 | 早崎記義 |
| 九番 | 佐々木範良 | 佐々倉顯定 |
| 十番 | 安達欽光 | 佐々倉友義 |

〔富山市沿革志〕　明治三年一月以來、東ハ今ノ兩本願寺別院間横小路ヨリ、西ハ富山裁判所裏小路ノ邊ニ至ルマテ、漸次ニ開墾シテ練兵場ト爲ス、之ヲ盥ム ニ渺漠タル曠原ニシテ、更ニ目ヲ遮キル物ナク、中ニ一條ノ大道ヲ通スルノミ、

〔參考〕

〔武技略傳〕　明治三年八月佛式護衛イスカトロント云隊ヲ御組立、尤モ歩兵ナリ、此隊ハ都テ元士族ヲ以テ御組立トナル、

明治三年九月、吉田元鶴ヲシテ英式ノ小隊長ニ被仰付、同歩兵大隊ヲ元卒ノモノヲ以テ御組立、

〔法令全書〕　九月廿八日(布)(太政官)

今般藩制被仰出候ニ付テハ、現米壹萬石ニ付士官ヲ除ク之外、兵員六十人ヲ以テ、先ツ常備ト被相定候事、

六月　丙申朔

十五日、庚戌、淺野五兵衛歿す、

〔富山市小學校報告〕

富山藩ノ家臣ニシテ、武藝ノ勝レタルモノ少シトセス、然レトモ膽大ニ業勝レ、

加フルニ德高カリシモノ、恐クハ淺野五兵衛ノ右ニ出ヅルモノナカルベキ也、

五兵衛名ハ武太郎、字ハ清泰、五兵衛ハ其俗稱ナリ、代々富山藩ニ仕フ、祖父十兵衛二子アリ、太兵衛、五助トイフ、五助劍術ヲ能クスルヲ以テ、新ニ藩主ヨリ十人扶持ヲ賜ハリ、其師範役ヲ命ゼラル、二男アリ、長ヲ五兵衛、次ヲ權兵衛ト云フ、五兵衛ハ享和十三年五月ニ於テ、呱々ノ聲ヲ山王町ナル邸ニ上ゲ、幼時ヨリ父ニ就キテ劍術ヲ學ビ、弱冠ノ頃ニハ若侍中ノ腕利ナリシガ、一日感奮スル所アリ、博ク諸國ヲ巡歷シテ業ヲ磨カント欲シ、父ノ許ヲ受ケ遍ク諸國ニ修業シ、大ニ得ル所アリ、後江戸ニ留リ、中西某ニ就キテ修ムルコト三、悉ク奥義ヲ授ケラレ歸國ス、後數日藩侯ニ謁シ、武藝修業ノ苦心談ヲ言上セシニ、感斜ナラス、御盃及ビ多クノ引出物ヲ賜ハリ、後師範役ヲ命ゼラル、弟ノ權兵衛、又槍術ヲ以テ十人扶持ヲ賜ハリ、同シク師範役ヲ命セラレタリ、

五兵衛ノ指南番タルヤ、諸國修業者試合ヲ申込ムモノアルモ、一タビ其人ニ接セハ遠ク及フ所ニアラサルヲ知リテ、技ヲ交ヘス立去ルヲ常トセリ、後ニ藩侯ノ近習役ヲ兼ネ江戸ニ詰メ居リシ時、主用ノ歸リ道、他藩士數名ト事ヲ生ジ、其ノモノ不意ニ拔刀シテ切カヽリシカハ、止ムナク三名ヲ切リ捨テシニ、他ハ恐レテ逃ゲ去リタリ、依テ歸邸ノ上、殿ニ言上シ、早速屆出シモ何藩ノ武士ナリヤ判明セス、事ナキヲ得タルモ、之レガタメ遂ニ歸國ヲ命セラレタリ、當時撿死ノ役人切口ノ見事ナルニ感心シ、富山侯ハ好キ家來ヲ持タレシトテ、イタク嘆賞シ、是レヨリ其名廣ク他藩ニモ知ラル、ニ至レリト云フ、渡邊氏ノ女ヲ娶リ、男五人ヲ生ミ、明治三年病ヲ以テ歿ス、享年五十五歳ナリキ、

五兵衛身長五尺八寸、肩骨聳エ、眼光人ヲ射、寒中ト雖モ足袋ヲ着セシコトナク、衣服袖裾ヲ短クスルヲ以テ、臂及ヒ足ハ常ニ見ハレ、宛然古豪傑ノ風アリ、今其逸事二三ヲ擧クレハ左ノ如シ、

一當時、三久トテ賣藥行商ニシテ劍術ノ勝レシ者アリ、或時其腕前ヲ試ミント欲シ、暗夜ニ五兵衛ノ外出ヲ待チ受ケ、後ヨリ無言ニテ組附キ、二三間許リモ投ケ付ケ以テ得タリト爲ス、何ソ知ラン五兵衛ハ舊ノ位置ニアリテ已レ却テ三間許リ投ゲラレアラントハ、其人五兵衛ノ非凡ナル早業ニ感シ急キ立チ去リシト、

二五兵衛ハ至孝ニシテ、父母存生中ハ曾テ命ニ背キシコトナク、其亡キ後ニテモ變ル事ナク、物ヲ得ル毎ニ、先ヅ父母ノ靈前ニ供ヘ、生ケル人ニ物言フ如ク

告ゲタル後ニアラサレハ、之ヲ使用セサリシト云フ、

三五兵衛ハ所謂律義一遍ノ方ニテ、人ト約束セシコトハ如何ナル事情アルモ之ヲ破リタルコトナク、同役ノ人モ之ニ感化セラル、所多カリシト、

四五兵衛劍術ニ巧ナルノミナラス、膂力衆ニ勝レタリシカバ、或時江戸二段目力士富山ナル者ト、淺野十兵衛宅ニテ相撲セシコトアリシニ、相方五勁ニテ勝負ナカリシカバ、力士モ其強力ニ深ク感シタリト、

五兵衛ハ山口流劍術ノ達人、(世間ハ淺野流ト云ヒ居レリ、)槍兵衛ハ寶藏院流槍術ノ達人ナリ、一家ニ於テ兄弟同時ニ二本槍ヲ立テ、登城スルコトハ破格ノコトナリ、

備考、左ニ五兵衛ノ父母ニ就キ述ベン、

一父五助ハ劍術ヲ以テ師範役タリシコト前述ノ如シ、當時其友人タリシ槍林ト云フ人、本家ノ淺野家ニ來リ、酒席等ノ席ニ於テ常ニ五助ヲ賞シ、五助殿ハ中々エライ人デアッタ、或日三劍術ノ内ノ一手使ヒヲナシツ、(今ノ山王町清水道具屋ノ家ハ五助ノ宅ナリ、)日枝神社ノ前マデ、木劍ヲ上下ニ振リ廻シテ行カレシガ、其勇シサハ何トモ言ハレナカッタモノダト言ヒシトヅ、五助ハ禪學ヲ好ミ、光嚴寺ノ桂堂トイフ方丈ハ有名ナル禪學者ナリシカ、其人ト座禪ヲ共ニシテ膽ヲ錬レリトヅ、

二母ハ極メテ嚴格ナル人ニテ、且ツ所謂婦德圓滿ノ良母ナリ、五兵衛等ノ後年世ニ名ヲ擧クルヲ得タルハ實ニ母ノ訓育ニ俟ツ所多カリシト云フ、老イテ病床ニ在リシガ臨終ノ際、病床ニ起キ直リ二子ヲ呼ヒ、嚴カニ遺言スル所アリ、念佛ヲ稱ヘテ眠ルガ如ク往生セシト云フ、

## 〔淺野武報告〕

故淺野五兵衛略歷

一生月不詳(但シ明治三年病歿ノ際ヨリ推算スルニ文化十三年ナラン カ、)

一幼名武太郎、通稱五兵衛、字ヲ清泰ト呼ブ、

一文政十年五月、父五助清弘ノ遺跡ヲ相續ス、

一同年同月、御手廻組御本丸御番被仰付、

一天保五年七月、山口流劍術師範役見習被仰付、

一同年十月、寶藏院流鎗術印可皆傳、

一同十二年七月、山口流劍術寶藏院鎗術師範役被仰付、

一萬延元年三月、江戸御屋敷警固トシテ急行ス、
一慶應年間、京都御警衛被仰付、其功ニ依リ朝廷ヨリ烏帽子一冠、大紋一具ヲ賜ハル、
一同三年邸内（當時當市山王町五番邸）ニ演武場ヲ建築シ、藩士並ニ近郷ノ志士ニ武術ヲ教授ス、
一明治元年師範役兼御武具奉行被仰付、
一其他藩主御參勤等ノ節、御供被仰付、江戸ニ勤務セシコト前後數回、
一明治三年六月十五日歿ス、享年五十五歳、

## 是月、金澤藩、錢札通用のことを告示す、

〔杉木御用留〕　監察局江

錢札爲辨利、拾貫文消込、三貫文札、武貫文札出來、當月十二日より通用之筈ニ候事、
右之趣、一同江可申渡候也、

庚午六月五日　藩廳

〔參考〕
〔杉木御用留〕　卷目之上　監察局

一同江可申渡候
明治元年出來之錢札、三百文より五拾文迄、漉入無之分、來ル十月より通用指留候條、當九月中迄ニ不殘引替可申候、此段御藩中並町在等、夫々御布告御座候樣、奉存候事、

庚午七月　會計局

〔金澤藩布令留〕
明治元年出來之錢札、漉入無之分、慣札多に付、先達而拾貫文札より五百文札迄、增印加候分、來月十五日迄に不殘引替可申、十六日より通用指留候、且三百文札より五拾文札迄之義は、追々引替可相渡、安政度出來之札ハ、先達而相觸置候通、來午四月中迄通用之筈ニ候、
右之通一統可被申談候事、

十月

七月乙丑朔

新川郡太田本江村の小農百貳拾八人、租税怠納の爲所拂に處せらる、

〔新川郡太田本江村徒黨人轉住一件留〕

覺

戸數貳拾三軒　一百二十八人　太田本江村徒黨男女共惣人員

但三州定納合高六拾七万石之割

二軒　九人八歩二厘　能美郡

此方ニ

五人　△茂右衛門

五人　○四郎三郎

〃十人

三軒　十九人六歩五厘　石川郡

此方ニ

七人　○伊兵衛

六人　○半右衛門

六人　○彌三兵衛

〃十九人

二軒　九人八歩二厘　河北郡

此方ニ

六人　○次兵衛

四人　三右衛門

〃十人

三軒　十六人八歩七厘　同郡

此方ニ

五人　△和三郎

九人　○伊助

三人　△忠四郎

〃十七人

二軒　十人六歩九厘　奥郡

此方ニ

三人　△喜兵衛

八人　○理兵衛

〆十一人

五軒　二十五人四歩二厘　磯波郡

此方ニ

六人　忠五郎

三人　△平八

六人　彌三郎

六人　久兵衛

四人　兵五郎

〆二十五人

三軒　十七人五歩　射水郡

此方ニ

六人　傳右衛門

六人　善五郎

五人　半助

〆十七人

三軒　十九人六歩　新川郡

此方ニ

六人　小兵衛

四人　忠次郎

九人　九右衛門

〆十九人

△印五人　最前首長罷在牢死之者

○印八人　當時首長罷在中者

右新川郡太田本江村之者、數年御收納明不埒之徒黨、今度所拂ニ可被仰付人員、諸郡御達申上候事、

庚午七月

理兵衛　伊兵衛　伊助　半右衛門　彌三兵衛　四郎三郎
九右衛門　和三郎　平八　三右衛門　久兵衛　彌三郎
茂右衛門　兵五郎　忠五郎　小兵衛　喜兵衛　忠四郎
傳右衛門　善五郎　半助　忠次郎

右之者、去ル安政五年四月、當願寺川泥洪水ニテ、村々御田地泥入變地ニ相成候ニ付、右勢子方追々出來之處、太田本江村共以前、無地草附等之ヶ所迄モ、勢子致候故、自然村方惣テ過歩可有之旨等、小作共申立、長百姓ト申分ニ及ヒ、先達以來重々及詮議、小作共御收納米致不足居候分ハ、早速入詰致候樣申渡、村方之儀者去春内檢地申付、則出高モ有之候、然所小作之内故彦兵衛等ヨリ出高之分、持高ニ致シ度旨願出候ヘ共、高方御格合モ有之候ニ付、其儀ハ難取揚候、將又故彦兵衛等儀是迄年々御收納米及不足、其時々遂詮議候ヘハ是候旨申聞、受書迄モ指出置候ヘ共、年來御收納米計リ入不申、重々不埒至極之儀ニ候、元來村方惣高ニ過歩有之旨等ヲ以、可計入御收納不致トノ義ハ、有之間敷心得方不宜故、御法ニ相觸レ候儀、兼テ願聞、其上組裁許等ヨリ、時々詮議之上、色々説得モ致候ヘ共、一圓聞入不申義抔ハ、甚以御縮方ニモ指障、高方御縮之義、彼是ト會得不致ニ於テハ、先前ヨリ其村追出候御格合ニ付、今般居住替申付候、且家財等之儀ハ御收納不足之方ヘ引上、組裁許ヨリ村役人ヘ申渡、縮爲致候筈ニ候間、尚亦罷越申先々御郡村ニ至ツテハ、其村役人及ヒ其組裁許等ヘ對シ候テモ、不調法ノ義等モ無之哉急度心得、耕作稼專出精相勵致改心、手前成立候樣可致、然ル上ハ畢竟元村ヘ引返方可申付哉ニモ候間、此義ハ此末ノ心得ニヨリ候儀ニ候、能々改心之義深ク相心得可申、此段急度申渡候也、

庚午八月三日　乙未朔　　租税局印

八月

二十三日、丁巳、金澤藩、官職名に因みたる名を稱することを止めしむ、

〔高島御用留〕

先頃官名ニ相唱候通稱、相改可申樣被仰渡、猶又當時職名略稱ニ似寄候、何太夫何之助等之唱も、惣して相憚候之方可然旨、重而被仰渡候、依而御巡より分役直支配迄、何太夫、何之助、何右衛門、何左衛門、何兵衛、何之進、何之丞、之通稱相改可申段、同日郡治局より被仰渡候間、左樣御承知分組中等江、其組御裁許より御演述

可被成、此狀留より御返可被成候、以上、

庚午八月廿三日

九月 甲子朔

十八日、辛巳、射水郡庄川の支流和田川、出水す、

〔越中地方農業雜誌〕 和田川、○中略、凡ソ三郡内ヲ通水ス、下流ハ所々用水ニ取入ル、且大門村ヨリ中田村迄ノ通路ノ邊、所々架橋アリ、此橋側ニ長キ大懸樋アリ、又少シ上ニ又長キ大懸樋アリ、夫ヨリ南ニ、又長キ大懸樋アリ、是ヲ濕ノ樋ト云、右南ノ懸樋ノ川上ニ、又短キ大懸樋二ケ所アリ、此樋ノ字ヲ父ドヒ、母ドヒ、子ドヒ、孫ドヒ、彦ドヒト云、此和田川ノ上ミニ又短キ大樋アリ、夫ヨリ上ミニ又長キ大樋アリ、是レヲ字伯父ドヒ、伯母ドヒノ名アリ、此川下モ大門村ノ宮ノ上ニテ打合フ、且洪水ノ時ニハ水上ヘ水浙ルコト壹里餘モノボル故ニ、往來人通行成難ク、又田地ノ損害ハ云モ更ラナリ、中ニモ強ク水損ノ村々六ケ村許リアリ、此村々協議シテ水流打合ノ所ニ大水門ヲ出來シ、洪水ノ時此水門ヲ鎖シ、浙ル水ヲ防ク手當テヲナセ共、明治三年九月十八日ノ洪水ニハ、此大水門ヲ押崩シ莫大ノ損害アリ、

二十四日、己亥、金澤藩、扶持人十村山廻等を廢し、郷長棟取郷長等を置く、尋て復改む、

〔金澤藩布令留〕 卷日上 民政所江

無組扶持人十村
扶持人十村

右史生加郷長棟取

平十村

右同斷郷長

新田裁許

右同斷郷長次列

右之通申付候條可申渡候也

庚午九月廿四日

藩廳

今般山廻被廢候ニ付、從前御林山、並往還並松之義、其箇所之裁許にて、縮方可致

候事、

右之趣可得其意候也、

庚午九月

民政所

諸郡直支配

右今般御改正ニ付、從前郡治方直支配御指止候事、

庚午九月廿五日　土田權少屬

礪波郡直支配人々中

監察掛江

今般、史生加郷長之人々職務被免、更ニ里正と改唱、務向是迄之通と被仰渡候ニ付、右之通申渡候ニ付、此段諸掛御布告御座候樣にと存候事、

郷長棟取ハ　里正棟取

郷長ハ　里正

郷長次列ハ　里正次列



庚午壬十月

租税掛

史生加り郷長

右今免職候也

庚午閏十月

金澤藩

是月、金澤藩、々制を改め、民政、會計の兩所を置く、尋て富山藩亦改革を行ふ、

〔高畠御用留〕

今般民政所被□之役局共營修局を除、其餘惣而各渾一改、而民政、會計兩所取建、管轄之事件左之通、

民政所屬事務

一藩内地方之經緯、經界、山川、江湖、海岸、島嶼之位置を分明にする事、

一御領所之事

一忠孝貞順之者ニ旌表之事

一郡村市街制置之事

一戸籍人員之事

一地方石高之事
一租税之事
一寺庵之事
一物産工藝之事
一開墾種藝牧畜之事
一口進之事
一道路橋梁水利堤防之事
一諸港津船路標之事
一鑛礦之事
一聽訟之事
一養老濟貧之事

會計所屬事務

一歳入歳出之事
一用度之事
一營繕之事



一通商之事
一廻漕之事　爲替會社取締之事
一藩造紙幣之事
一藩債之事
一倉庫蓄積之事
一秩祿其外諸費用供給之事

附金穀貸附之事

一郡治・市政・租税三局は民政所江合併、會計・商法・兩局は打込、會計所と被相改候事、

右之通取極候條、得其意可勤務候也、

庚午九月

藩廳

〔金澤藩布令留〕

今般郡治局・市政局・民政所江合併に付、是迄兩局直支配之者、以來郡治・市政方分課之民政掛、正權少屬に而支配、御用向に付而之儀は、其事柄に依而少參事等江及直達、又は少參事等より、直可申渡有之事、

一右直支配之者、役義進退賞罰者、少參事等に而致所置、右以下遠所町方非村方肝煎は少屬等に而致所置、組合頭は從前之通裁許十村に而可致進退事、

右之通相改候條、可被得其意候也、

庚午九月十日

## 民政所

〔武技略傳〕　明治三年十月、藩政大改正、火藥製造所、幷銃炮御筒製造所を市街柳町正立寺眞宗に被仰付、

〔參考〕

〔金澤藩布令留〕　今般被仰出候御趣意有之、民政向總而於藩廳取捌候筈に候條、右掛之名目令廢止、依而樞要之事件は取調相達候、其他之事件は附屬之分課掛江夫々引渡可申候、

一郡治市政之名目廢之、兩掛合併更に聽訟掛と相唱、勤向之義は、先是迄之通相心得候樣可申渡候、

一營修堤防之名目廢之、兩掛合併更に土木掛と相唱候、事務分課を以可相勤候、

一軍艦掛之名目廢之、右事務洋學都師分課之筈に付、學校掛に於て取捌候樣申渡候、

一口米方事務會計掛に於て取捌候樣申渡候條、夫々引送方郡治掛江可申渡候、

一開業掛は、租稅掛江打込、可相勤候樣可申渡候、

一通商掛は、會計掛與打込、可相勤候樣可申渡候、

右之通令改革候也

庚午閏十月

十月甲午朔

九日、壬寅、新川郡上市火あり、

〔上市警察分署調査〕　明治三年十月九日夜、上市西中町質屋吳服商三浦祐三郎方ヨリ出火シ、折柄南風强クシテ遂ニ全燒百九十戸、半燒三十戸、土藏十棟ヲ燒失ス、乃チ罹災民三百四十名ニ對シ一人ニ付二分三朱宛、加賀藩ヨリ救助金ヲ給與セリ、

閏十月癸亥朔

二十七日、己丑、富山藩合寺の令を發し、一派一寺と定む、

〔海秀閣合寺規則〕

此度　朝廷より萬機嚴律御布告も有之、追々時勢轉變之秋、郡市諸藩若、渾而一

派一寺に御改正有之候條、迅速合寺可有之候、尤寺號之儀は此迄通可相唱、若及
遠背候はゝ規正之嚴科に可被處候也、

庚午閏十月廿七日

印　藩　廳○宮山藩

法　大法寺一致勝劣合併　　法　光嚴寺曹洞臨濟合併

天　圓隆寺

時　淨禪寺

山　清傳寺

眞　眞興寺

淨　來迎寺寺町

門　淨久寺東四合併

右

此度一派一寺之御改正、迅速合寺之趣奉畏候、則配下之寺院郡市共不殘今曉當寺より令合寺候畢、猶又從來之伽藍、及梵□金佛具は、其儘奉差上候旨、各寺奉同意候、右兩樣早速御屆申上候、以上、

閏十月廿八日

社寺御方　　大法寺

以書附奉願候

此度以御布告之趣、郡市とも諸藺若渾而一派一寺に御改正、迅速合寺之嚴命有之奉得其意候、則配下之寺院、郡市共急劇に當寺より令合寺候、依茲各寺本尊并開基之像碑、竪滅罪擅那靈牌靈簿全所持仕、其他從來之伽藍等は其儘奉差上候旨、各寺奉同意候次第に御座候、爾來彷彿に承り候得共、依願方之運而は各寺江御下方相叶候由、此義乍風聞寺擅共本望、宛も再生之心地奉□心渴仰候、實以一伽藍中數寺合寺之仕合、進退惟谷候而迷惑至極罷在候、爾は風聞を以出願、甚不束之段恐入候得共、自然之難澁難忍、遮而奉歎願之儀は、何卒一舍合寺相改め、一境內集寺方に被仰付被下候はゝ、最前之伽藍之內、聊頂戴各寺別火に營寺仕難有仕合に可奉存候、此段奉願候、以上、

明治三年庚午十一月　　大法寺

社寺御方

再三相願候得共不相叶不及是非候事、

此度　朝廷之御趣意有之候に付、合寺申付候處、速に令奉體候段奇特之至に候、

就而は佛道探練之輩は、寺號等共儘被差留候得共、有名無實之輩速に可申聞、廢寺院可申付筈に候、併有實之者有之候はゝ、一派人撰を以申出候得は、右後住に可申付候此段申達候也、

庚午十一月十日

社寺方 印

大法寺　日祥

右今般、合寺之御趣意令奉體、迅速規律相建、寺中示方等萬端行屆、神妙之至に候、依而目錄之通下賜之候也、

庚午十一月十日

右金一千疋　目錄頂戴也

印 藩廳

〔富山市沿革志〕　十月二十七日、封内合寺ノ令ヲ發シ、一宗一寺トナシ、乃チ曹洞宗、臨濟宗ヲ五番町光嚴寺ニ、日蓮宗ヲ寺町大法寺ニ、淨土宗ヲ日付來迎寺ニ、眞宗ヲ京都常樂寺通院持專寺ニ合併セシメラル、等、悉ク一宗ヲ一寺ニ集メラレタリ、是ニ於テ廢寺ヲ毀チ垣墻ヲ破リ、墳墓ヲ長岡山ニ移セシ者モ亦多ク、廢寺ノ跡ハ處トシテ、斷壞缺塊ナラサルハナク、人ヲシテ古戰場ヲ過クルノ懷ヲ抱カシメタリキ、又士族寺院各々有スル所ノ銅佛鐘磬ヲ擧ケテ、一朝之ヲ二ノ丸侍番所邊ニ輸シ送リテ、堆積スルコト山ノ如ク、其ノ柳町正龍寺ニ鑄造場ヲ設クルニ方リテハ、鞴ヲ皷シ火ヲ起シ比隣喧囂タリ、固ヨリ將サニ以テ砲ヲ鑄ントス、然ルニ未タ幾バクナラズシテ廢セリ、

〔參考〕

〔海秀閣合寺規則〕

口上書ヲ以奉願候

夫無鐘皷則行律不正、依茲各寺從來梵鐘法皷相備來候處、此度時之鐘並太皷御廢止之御觸書相達し奉畏候、然所御藩於寺院は、從來時之鐘太皷と稱し相用候向は更に無之、但し朝晡之看經、暨法要式に相用來り族、一應今般之御觸面に不相拘哉に、承知仕候得共、併心得違も難計故、配下之寺院即今當寺江聞合之向も有之、不取敢昨日口上書に而奉伺置候次第、若右法要之節迄も、御指止に相成候儀に御座候而は、一統甚以迷惑至極仕候、何分梵鐘皷之義は、永世之法具、所謂勸善懲惡、幽明聲動に福口に而、寂滅爲樂滅罪檀那修福之合力、加旃、澆季退慢之僧

倡朝夕策勵之告知、守戒律之方便、決而不可怠却、有益の資具に御座候事、如法來之推擊御聞屆に相成候樣、此段奉願候、以上、

明治三年庚午十月

社寺御方　　大法寺

右は時之鐘之義は、御廓內有之候に付、寺院等に時之鐘并太鼓御廢止之御觸有之、早速如形出願候處、深き御趣意に而御廢止故、迚願意不貫時勢不及力歎息無窮、しかし、右之內太鼓は鼓擊勝手次第と被申渡、則朝暮或は法式に相用候、但し此義も當寺丈の事に而、自他之寺院更に無擊音、恐怖之時勢如此唱題三返止之不乙、

〔大法寺文書〕

昨年御改正之砌、各宗之寺院合併申渡置候處、御規則相守彼是遺念ヶ間敷儀茂無之、宗法を相守候段不堪感賞之至、猶此上御趣意柄畏失無之樣、可相心得候事、

辛未七月八日　　寺院方

是月、富山藩、郷村高を民部省へ上申す、

〔前田伯爵家舊記〕

一明治三年十月民部省へ書上郷村高帳之表

拾万四千八百七十六石八斗四升八合　婦負郡　一四

三百六十八ヶ村

五万三千四百六十八石八斗五升一合五勺　新川郡ノ內

百四十七ヶ村

村數合計五百十五ヶ村

計拾五万八千三百四十五石六斗九升九合五勺

內譯

拾二万百九十八石九斗七升九合五勺　古高

二万八千八十一石六斗一升三合　新田高

一万六十五石一斗七合　銀納高

十一月壬辰朔

金澤藩廳の出張所を、高岡杉木魚津等に設く、

〔金澤藩布令留〕

管内藩廳出張所

越中高岡　杉木　魚津　○越中國以外は略す

右之通取極候條、正租掛、雜秋掛、聽訟掛、戶籍掛、土木掛、廳掌各出役分席相立、諸達書廳掌に而執次可指出候條、其事務職掌に隨夫々可取捌候也、

但聽訟掛、廳掌之義は不斷相詰、其他正租掛等は定詰等程限不取定候條、職務之便宜次第不詰合節は、通達方事務不指支樣、詰合之者江可申談候也、

右之趣向々可相達候也

庚午十一月

十二月　壬戌朔

富山藩、歲出入を調査す

〔越中國歲入歲出明細書〕　明治二巳年十月ヨリ午九月迄

高拾五万八千三百四十五石六斗九升九合五勺越中國之内

此貫米

五万六千三百七拾六石九升八合三夕八才

内譯

米五万三千五百七拾二石五斗三升八合七夕五才　米納

米二千六百五十三石八升六合弐夕五才　石代

此代金

二万三千百七拾壹兩弐朱、永五拾三文四分

米百四拾九石七斗七升三合三夕八才　石代附札

此代金

千百九十八兩弐朱、永六十二文

| | |
|---|---|
| 此籠り居 | 此内六石六斗六升一合一夕五才貫高 |
| 此代金五十三兩一歩 | 永三十九分二歩 |

一七拾八丁弐反壹畝三拾三歩弐分六厘　同國之内

此貫米

弐拾六石弐升四合

一金五百弐拾兩壹歩計

一金拾兩弐歩計

見取之分

年々增減雜　山役野役川役林役　小物成　稅

同口撥子冥加

一金弐千弐百兩計　同賣藥人
一金弐千兩計　同諸店税
一金五百兩計　同地子運上
一金五百兩計　同魚市場運上
一金七千兩計　同鹽倉運上
一米五百七拾四石四升弐合弐夕壹才　同古米口米懸り担店
一金千弐百八十五兩計　同高懸り夫永
一金二十六兩二歩一朱、永五文　同並木等拂木代雑入
一金四十六兩三歩一朱、永四十五文　同過料金納
一米九拾四石六斗四合八夕　同辰年夫喰米御貸渡巳年より返無利足五ヶ年返納
一米四千百五拾弐石七斗九升　内巳年、凶荒ニ付買入米口入
一米弐千九百五拾五石六斗四升七合　寅年籾摺立米
一米八百四拾石三斗八升　辰年より巳年へ越米
一金九万弐千九百五拾五兩弐歩弐朱　藩札調達
一錢八万五千貫文　右同斷



此金　八千五百兩　市中等依頼拂米代上納
一金三万四百弐拾五兩弐歩、永五十九文　森藩之助扱南京米買入等ニ付巳六月より九月上納金調
一金壹万六千三百五拾兩
一金壹万七百兩　於東京爲替會社より借入金
右寄

米六万五千拾九石六斗二升九合五夕九才
内譯
米五万四千弐百六拾七石二斗三升二合九夕六才　米納
金二万四千三百六拾九兩一歩、永百五十五文四分　右代金納
此米二千八百三石五斗七升九合六夕三才
米七千九百四十八石八斗一升七合　巳年凶荒ニ付買入米〆
金拾七万三千弐拾兩壹歩、永百九文　雑税北外品々金納
二口合　米六万弐千二百拾六石四升九合九夕六才（六カ）
金拾九万七千三百八拾九兩弐歩、永二百二十四文四分
右拂

一金三万九千貳百貳兩一歩計　廳中諸費

米三拾貳石四斗壹升　金貳萬六千四百二十七兩壹歩貳朱計　陸軍資

金三千兩　海軍資金大藏省納

金一万二千四百七拾壹兩三歩貳朱　官員俸給

米百六十石七斗八升　金五百五十三兩貳朱計　養老扶持等

金貳千六百三兩、永六百八拾五文三分　堤防入用

金貳千五百拾五兩三歩計　營繕入用

米千七百八拾石計　夫食貸渡貸

壽巳年凶荒ニ付郡中依願貸渡午暮一季返納分

米三千貳拾石　右同斷

但右同斷午年より無利足五乙年返上分

米千石　右同斷

但夫食貸渡午年無利足五ヶ年返納分

米三十石五斗

但山方難渡所貸米午年より無利足三ヶ年返納分





米五千四百二十六石七斗二升三合　金二千四百三十六兩三歩二朱計　知事家祿

此形ニ米千四百三十四石計　金一萬四千二百二十四兩計　正渡り

米四萬三千六百四十二石九斗六升六合　金二千百三十八兩一歩三朱計　士族卒家祿

金一万二千五十三兩一歩

巳年凶荒ニ付郡中貸渡午年より年々返納　貸

金五千八百兩

市中難渡人へ貸渡午年より年々返納

金六百兩

三宿難渡人へ貸渡右同斷

金五百兩

賓藥人共依願貸渡午米兩年返納

米四千四拾三石四斗九升三合六勺三才

巳年凶荒ニ付市中三宿へ御救被下米　養老

金三万九千八兩、永五百十三文九分

南京米等買入代金渡り　諸渡

金六千六兩、永八百二十二文三分

右同斷買入米賣拂損費　同

米四千六百八拾石八斗六升

町方三宿等依願拂米　拂米

金七千兩

賀金一萬兩上納見代り三千兩御渡殘り　諸渡

金壹万兩

産業爲引立産物所へ元手金貸渡　貸

金二百三兩二歩、永三十三文七分

大阪元銅座江納金借出

金四千八百貳拾七兩三歩、永二十七文八分

大藏省より刻借金四萬九千六百六十六兩二歩、永百六十六文七分

米五万九千八百二十五石九合六勺三才　巳年ヨリ十三ヶ年返納、
　　諸渡方
　　拂合
金拾九万三千六百三十六兩壹歩壹朱、永八十三文　海軍資金
内
　金三千兩　大藏省納
　金拾九万〇六百三十六兩一歩一朱　巳歳入歳出
　米二千三百九十一石四升三勺三才　差引殘リ
殘
　金三千七百五拾三兩三朱
　永百四拾壹文四分
外
粃壹万七千貳百四拾八石七斗四升　圍粃
　但寅年より辰年迄請粃
　右拂
粃五千九百拾壹石貳斗九升四合　扶助米摺立
　此米貳千九百五拾五石六斗四升七合（本帳米入に書載候分）
粃三千六百八拾四石九斗九升八合　郡中難澁人御救被下米
粃三千石　夫食貸渡
　但巳年凶荒ニ付依願貸渡、午年より無利足五ヶ年季返納之分
拂合粃壹万貳千五百九拾六石貳斗九升貳合
殘粃
　四千六百五拾貳石四斗四升八合
右者富山藩支配地、越中國之内、去巳歳入歳出明細仕譯、書面之通ニ候也、
　明治三庚午年十二月　富山藩 印

## 是歳、米價騰貴、高岡の富家等、醵金して窮民に施米す、

〔高岡市沿革志〕　今年米價騰貴シ、市中ノ貧民將サニ飢ニ啼カントス、是ニ於テ服部嘉十郎、大橋與三市等深ク之ヲ憂ヒテ救助米ヲ施サント欲シ、富家ノ等差ニ從ヒテ各自ニ出金セシメ、一方ニ於テハ郡宰大野木源藏ノ力ヲ假リテ、藩費ノ下附ヲ願ヒ、毎日男ニ四合女ニ三合ノ米ヲ與ヘ、市中幸ニ一人ノ菜色者ナキヲ得タリ、其ノ施米高貳千貳百石餘（一石平均價額壹貫四百目、此ノ代金三千八百目、銀札百六拾目ヲ以テ金壹圓ニ換ス、即チ合計金額壹萬九千貳百五十圓、之ヲ折半シテ半額ハ市中ノ富家之ヲ負擔シ、他ノ半額ハ藩庫ヨリ之ヲ下付セラレタリ、）蓋シ是レ特筆大書スヘキ、空前絶後ノ一大美事ナリ、

明治四年辛未　紀元二千五百三十一年

正月　辛卯朔

二十日、庚戌、金澤藩廳、町村の分合を行ふ、

〔金澤藩布令留〕

別紙御渡ニ付、披見之上承知驗可相調候也、

辛未正月廿日　　加越能諸郡里正へ

金澤等諸町市長へ　　廳掌

一今石動　後谷村　福町村　上野村　小矢部村　畠中村　櫻町村

從來町立之内附屬村有之ヶ所

一城端　理休村　野田村

一高岡　横田村　内免新村　中川村

一氷見　岩上村　朝日新町　加納村

一魚津　下村木村





右從來之町續ニ有之、村々之内町家ト混居、或ハ建並候家ニハ村名ヲ削、町内江打込可申事、

新ニ町立可申付ヶ所

一井波　松島村　藤橋村　北川村　山見村

一滑川　領家村　高月村　田中村　寺家村

右町續ニ有之、村々之内町家ト混居、或ハ建並居候家ニハ、村名ヲ削、町内江打込可申事、

一東水橋　西水橋

右合併一郷地ト成シ、更ニ水橋ト相唱候事、

一放生津　荒屋村　四日曾根村　放生津新村

長德寺村　六渡寺村　三ヶ新村

一伏木村　古國府門前地　古國府村

右合併一郷地ト成シ、更ニ新湊町ト相改、且町續ニ有之、村々之内町家ト混居、或ハ建並居候家ニハ、村名ヲ削、町内江打込可申事、

從來町立之内組入可申付ヶ所

一境

右里正支配ニ相改候事、

○越中國以外ハ省略

遠所諸町ヶ所、別紙之通相改候條可得其意、右之趣至急一同可相觸候也、

辛未二月　藩廳

別紙御渡ニ付相達候也、

辛未二月十日　廳掌

加越能諸郡里正へ

射水郡下東條組三日曾根村

右村名ヲ削、放生津町江打込可申事、

右同斷　上庄組　池田新村

右同斷、氷見町江打込可申事、

新川郡西加積組　滑川浦方

同斷　高月浦方



右同斷、滑川町江打込可申事、

右之通相改候條得其意、至急一同江可相觸候也、

辛未二月　藩廳

○越中國以外ハ省略

四月（庚申朔）

庄川出水す、

〔富山縣警察部保安課調査〕　明治四年四月庄川出水、太田村堤防八十間缺壞シ、田畑ノ荒廢サルルモノ二十町歩ニ及ブ、

富山藩知藩事前田利同一族、東京に轉住す、越えて八月元金澤藩知藩事前田慶寧一族、亦移る、

〔富山市沿革志〕　四月、藩主利同公ノ家族東京ニ移住セラル、

〔金澤縣布令留〕

別紙就御渡相達之候條、承知之驗候而可相廻候也、

辛未八月三日　廳掌

加越能諸郡里正

○別紙

為承知　諸掛江

大參事御中　廣瀨五十八郎

今般御歸京、明十一日朝六半時、御供揃ニ而御發駕可被遊旨被申出候條、此段御達申上候、以上、

八月十日

追而、東海道通御歸京ニ付、此段御達申上候、以上、

右に付、諸郡並井波新湊町江御酒代として千四百三拾三貫文、並御盃御添御土器御三方頂戴被仰付、尤八月十日、石崎順造等御住居へ御召、御奥御書院におゐて、御目見之上被仰付候事、

〔參考〕

〔法令全書〕

明治四年二月二十日(布)

先般華族元武家ノ輩、東京住居被仰付候ニ付テハ、總テ可為東京府貫屬候條、此旨相達候事、

〔金澤縣布令留〕

本郷　官邸拾万三千八百弍拾弍坪

内

富山藩知事江　壹万弍千弍百坪

大聖寺藩知事江　六千五百坪計

貸渡

平尾私邸弍拾壹万七千九百三拾五坪

右ハ今般御布告之趣も有之候間、當藩官私邸書面之通相定申候、此段致御屆候也、

庚午八月

東京府　御中　金澤藩

五月(甲午朔庚寅)、黒部、早月の兩川出水あり、

〔富山縣警察部保安課調査〕　明治四年五月五日、黒部川出水、下立村堤防百三間欠壞シ、田畑ノ流失スルモノ三十三町歩、

〔越中地方農業雜誌〕　早月川○中略百年前後用水ノ口ヨリ切レ込ミ、下流ヨリ上ミヘ浜リ、小林村、七口村、山間南村ヲ通水シテ、上市川迄打込、又一度ハ横ノ方ヘ切レ込ミ、滑川ノ東ヲ通リ海ニ注ク事モアリ、又明治四年五月五日ノ出水ニハ、堤防モ損害人家モ毀損アリ、却テ此川流水ノ性質幷ニ石質モ惡敷、且出水ノ際ニモ大ニ溢レタリ、



六月　庚申朔

射水神社を、國幣中社に列せらる、

〔神社改正記〕

大板奉書紙ニテ認メ渡ル、

射水神社　越中國射水郡二上村鎮座

國幣中社列自今官祭被仰出候事、

太政官

辛未六月

射水神社

國幣中社列別紙之通相達候事、

但、御改正向、追々御沙汰有之候迄ハ、先從前ノ通相心得可申、尤爵位有之分ハ、

早々返上可致事、

神祇官

辛未六月

兩官ヨリノ御書付社納之候也

金澤藩廳

辛未七月

〔射水神社明細書〕

國幣中社射水神社明細書、

一富山縣越中國高岡市大字本丸十番地、射水神社、

但、往古ヨリ鎮座ノ地ハ、射水郡二上村二上山ノ麓ニアリ、

一祭神　瓊々杵尊

一座數　一座

一鎮座年月及由緒、　往古ヨリ越中國射水郡二上村二上山ノ麓ニ鎮座ナリ、年月未詳、養老元年　勅ニヨリテ、僧行基其地ニ佛閣ヲ建テ養老寺ト號シ、社地殿閣廣大ナリシト云、且國史ニ現存スル文ニ、寶龜十一年十二月甲午朔、甲辰、越中國射水郡二上神、叙從五位下、延曆十四年八月丁卯朔、壬午、越中國二上神、叙從五位上、承和七年九月癸酉朔、辛丑、越中國射水郡二上神、叙從四位上、齊衡元年三

月辛卯、越中國二上神、加從三位、同年十二月戊寅、越中國二上神、禰宜祝並預把笏、貞觀元年正月戊午朔、甲申、奉授越中國從三位二上神、正三位云々、此二上神ハ則當社ノ神ナリ、延喜式ニ、越中國射水郡射水神社名神大トアリ、中古盛昌ヲ極メ社家社僧頗ル多ク、且國內每戶ニ初穗米ヲ收メシム、然ルニ承平年間兵燹ニ罹ルニヨリ、天曆年度僧空也ヲシテ再建セラレ堂宇悉ク備ハル、又天正年間兵火ノ爲メ再ヒ灰燼トナリ、社僧ノ宿坊纔ニ三ヶ年ヲ殘ス、後舊藩主、贈權大納言前田利家卿、更ニ社殿再建アリテ社領及一山ヲ附シ、國內ニ命シテ初穗米ヲ如元寄附セシメ爾後絕ル事ナシ、明治二年、神佛混淆廢止ノ令ニヨリ、佛具等ヲ取除キ社僧亦從テ復飾ス、同三年四月、社領並初穗米ヲ收ル事ヲ止ム、同四年六月、國幣中社ニ列セラル、同七年、當社移轉ノ官令ニヨリ、高岡町古城跡ニ社殿新築ノ功ヲ竣ヘ、同八年九月、二上村ヨリ此地ニ遷座ス、

一例祭　四月二十三日

但、私祭九月十六日、明治八年九月十六日、舊社地ヨリ遷座ノ日ヲ以テ定ム、

〔參考〕

〔高岡市沿革志〕　明治七年九月十六日、射水神社殿堂落成シ、乃チ遷座セラル、土地高爽ニシテ祠宇モ亦清淨ナリ、

〔射水神社社務所調査〕

一明治三十五年十月九日　新築落成（附再建ノモノ）（三年罹災ニ）

一工費金弐万五百圓　內務省ヨリ保存金下渡

一同　金九百弐拾圓　（事誠會募集金ノ內ヨリ渡リ廊等工費ヘ補助）

通計金弐万千四百弐拾圓

事誠會　射水神社新築ニ付テハ、政府ヨリ弐萬五百圓ノ御下附ヲ受ケ中玉垣祭器庫、本殿階段ノ庇、中門マテノ渡廊等ノ建設、其他御帳臺、祭器、裝束品等ノ調製費、遷座式等ノ祀典費ヲ要スルカ爲メ本會ヲ創設シ、本縣下ヨリ寄附金約壹萬圓ヲ募集スルノ目的ヲ以テ着手セシモ、決局ノ募集高ハ五千六百四十八圓四十二錢二厘ニ止マレリ、

七月己酉朔

十四日、壬戌、廢藩置縣の令出つ、隨ひて金澤縣富山縣を置かる、

〔法令全書〕

（明治四年七月十四日）

詔書

朕惟フニ更始ノ時ニ際シ、内以テ億兆ヲ保安シ、外以テ萬國ト對峙セント欲セハ、宜ク名實相副ヒ政令一ニ歸セシムヘシ、朕曩ニ諸藩版籍奉還ノ議ヲ聽納シ、新ニ知藩事ヲ命シ各其職ヲ奉セシム、然ルニ數百年因襲ノ久キ、或ハ其名アリテ其實舉ラサル者アリ、何ヲ以テ億兆ヲ保安シ萬國ト對峙スルヲ得ンヤ、朕深ク之ヲ慨ス、仍テ今更ニ藩ヲ廢シ縣ト爲ス、是務テ冗ヲ去リ簡ニ就キ、有名無實ノ弊ヲ除キ、政令多岐ノ憂無ラシメントス、汝群臣其レ朕カ意ヲ體セヨ、（此日在京知藩事ヲ召、御前ニ於テ免官ノ御達アリ、翌十五日、在藩ノ知事名代トシテ、在京ノ參事ヲ召、同様御達アリ、）

〔越中史略〕　同四年七月、金澤富山の二藩を廢し、金澤縣富山縣を置き、○下略新たに縣令等を置き、舊藩知事には前に定めたる家祿を給して、皆東京に貫屬せしめ、士族は皆その本縣に貫屬せしめ給へり、

〔金澤縣布令留〕

免本官

辛未七月

金澤藩知事前田慶寧

太政官

〔礪波郡治概表〕　明治四年七月廢藩置縣ノ際、金澤縣ニ屬シ、乃チ礪波郡ヲ拾貳區ニ分割シ、茲ニ六區會所ヲ置レ、○下略

〔參考〕

〔法令全書〕

明治四年七月十九日（沙）　縣元藩

今般廢藩被仰出候ニ付テハ、追テ縣治一定ノ御規則可被仰出候得共、差向是迄取扱來リ候庶務ハ、大參事處決可致、尤重大ノ事件ハ伺出可請朝裁事、

〔杉木記錄〕

明治四年金澤藩正廳　大參事　内田從五位

〔參考〕

〔富山縣知事官房調査〕

縣廳ノ部課

明治四年十月二十八日　租稅、庶務、聽訟ノ三課ヲ置ク

同　年十一月二十七日　改テ庶務、聽訟、租稅、出納ノ四課ヲ置ク

同　八年五月八日　學務課ヲ置キ庶務課ノ次ニ列ス、

同　年十一月三十日　屬史生分課ヲ改ム
　第一課庶務　第二課勧業
　第三課租税　第四課警保
　第五課學務　第六課出納

同　十二年十二月二十七日　術生課ヲ置ク

同　十三年四月十二日　衛第四課ヲ改テ警察本署ト稱ス

同　十六年一月二十三日　兵事課ヲ置ク

同　十九年七月十二日　官制ヲ定ム
　第一部　第二部　收税部
　警察本部（部中課ヲ設ク）

同　二十三年十月十日　地方官官制ヲ改ム
　知事官房、内務部（第一課、第二課、第三課、第四課）、警察部（警察署、警察分署）、直税署（直税分署）、間税署（間税分署）、監獄署、

同　二十六年十月三十日　地方官官制改正（十二月一日實施）

同　三十二年六月十四日　地方官官制改正（六月二十七日實施）
　知事官房　内務部（第一課、第二課、第三課、第四課、第五課）、警察部、

同　三十四年三月六日　内務部ニ第六課ヲ置ク

同　三十八年四月十八日　地方官官制改正（四月二十一日實施）
　知事官房、第一部、第二部、第三部、第四部、

同　四十年七月十二日　地方官官制改正（七月十五日實施）
　知事官房、内務部、警察部、

（以上明治職官沿革表、法令全書、富山縣廳達ニ依ル）

是月、藩用の紙幣を太政官錢札と引換へしむ、

〔金澤縣布令留〕

今般廢藩ニ付、諸藩製造之楮幣、今七月十四日之相場ヲ以、追而御引換ニ可相成旨等、官邊ヨリ被仰渡候御趣旨、既ニ及布告置候通ニ付、尚又大藏省ヨリ之御達

書ニ基キ、三州之内五ヶ所、平均金相場別紙之通ニ候條、右平均相場ヲ以、追而錢札御引換ニ可相成筈ニ候間、心得違無之樣、一同不洩可得其意候也、

辛未七月　　金澤縣廳

覺

金壹兩ニ付錢札　　加賀國　金澤　小松
一拾九貫七百九文　　越中國　高岡　魚津
　　能登國　所口
　　右五ヶ所辛未七月十四日金相場平均

右之通ニ候也

## 〔大日本貨幣史抄錄〕

法規分類大全　第一編所收

### 加賀國金澤藩

金澤藩ノ札ハ、寶暦五年始メテ幕府ノ許可ヲ受ケテ、製造セルモノ八種アリ、曰ク銀百目札、曰ク銀五十匁札、曰ク銀十匁札、曰ク銀五匁札、曰ク銀三匁札、曰ク銀二匁札、曰ク銀一匁札、曰ク銀五分札、其ノ總計四十一萬二千五百九十三枚、此ノ銀價九百六十三貫百九匁ナリ、其價格明治四年七月十四日、金價一兩ニ付キ、銀札百九十七匁九釐ノ屆ニ據テ定ムル所ノ價格、銀百目札一枚ハ新貨價五十錢七釐ニ當リ、銀五十目札一枚ハ新貨價二十五錢四釐ニ當リ、銀十匁札一枚ハ新貨價五錢一釐ニ當リ、銀五匁札一枚ハ新貨價二錢五釐ニ當リ、銀三匁札一枚ハ新貨價一錢五釐ニ當リ、銀二匁札一枚ハ新貨價一錢ニ當リ、銀一匁札一枚ハ新貨價五釐ニ當リ、銀五分札一枚ハ新貨價二釐ニ當ル、又維新ノ後製造セルモノ十種アリ、曰ク錢十貫文札、曰ク錢五貫文札、曰ク錢三貫文札、曰ク錢二貫文札、曰ク錢一貫文札、曰ク錢五百文札、曰ク錢三百文札、曰ク錢二百文札、曰ク錢百文札、曰ク錢五十文札、其ノ枚數總計千九百七十七萬八千六百九十九枚、此ノ錢價四千二百三十萬五千四百十五貫百文ナリ、其價格明治四年七月十四日、金價一兩ニ付キ、錢價調錢十九貫七百九文ノ屆ニ據テ、定ムル所ノ價格、錢十貫文札一枚ハ新貨價五十錢七釐ニ當リ、錢五貫文札一枚ハ新貨價二十五錢四釐ニ當リ、錢三貫文札一枚ハ新貨價十五錢二釐ニ當リ、錢二貫文札一枚ハ新貨價十錢一釐ニ當リ、錢一貫文札一枚ハ新貨價五錢一釐ニ當リ、錢五百文札一枚ハ新貨價二錢五釐ニ當リ、錢三百文札一枚ハ新貨價一錢五釐ニ當リ、錢二百文札一枚ハ、新貨價一錢ニ當リ、錢百文札一枚ハ新貨價五釐ニ當リ、錢五十文札一枚ハ新貨價

二釐ニ當ル、

越中國富山藩

富山藩ノ札ハ、寛政四年、始メテ幕府ノ許可ヲ受ケテ、製造セルモノ九種アリ、曰ク金一兩札、曰ク金一分札、曰ク金二朱札、曰ク金一朱札、曰ク錢一貫文札、曰ク錢五百文札、曰ク錢三百文札、曰ク錢二百文札、曰ク錢百文札、右金札總計二十九萬九千二百六十二枚、此金貨九萬二千九百五十五兩二分二朱、右錢札總計十七萬八千九百枚、此ノ錢價八萬五千貫文ナリ、其ノ價格明治四年七月十四日、金價一兩ニ付キ、金札二歩六毛、增錢價調錢十二貫四百文ノ屆ニ據テ、定ムル所ノ價格金一兩札一枚ハ新貨價九十八錢ニ當リ、金一分札一枚ハ新貨價二十四錢五釐ニ當リ、金二朱札一枚ハ新貨價十二錢二釐ニ當リ、金一朱札一枚ハ新貨價六錢一釐ニ當リ、錢一貫文札一枚ハ新貨價八錢一釐ニ當リ、錢五百文札一枚ハ新貨價四錢ニ當リ、錢三百文札一枚ハ新貨價二錢四釐ニ當リ、錢二百文札一枚ハ新貨價一錢六釐ニ當リ、錢百文札一枚ハ新貨價八釐ニ當ル、

〔法規分類大全第一編〕政體門制度雜款七

金澤藩ヨリ大藏省ヘ屆三年四月九日

當藩支配地限通用之楮幣、舊幕府ヨリ免許ノ年月、並元製造之員數高、御屆可申上旨御沙汰ニ付、相調候處、寶暦之初年用度差支、且正金銀輸入無數ニテ、國內融通礙ト差支候ニ付、同五年舊幕府ヘ相願、米三十萬石代楮幣發行仕度旨、願立通免許相成、其節銀札製造仕、其後米價之騰貴ニ隨ヒ漸々相增、就中萬延文久ノ頃ヨリ、國事多端用度差支候ニ付、尙又增札出來、去ル明治元年通用銀御廢シニ付、錢札ニ相改追々引換申候、依テ總高四千二百四十餘萬貫文ニ及申候、此段御屆申上候、以上、

〔參考〕

〔新川縣布達〕第三百二十九番

舊金澤藩造紙幣五錢未滿札、押印之上發行之分、交換之儀公布相成候ニ付、本年六月十日限通用ヲ停止、別紙各區交換場日割之通官員派出、銀銅貨ヲ以交換事業取扱候條、右藩造紙幣所持之者ハ、日割之通交換可申請、若各區ニ於テ引換殘有之候ハヽ、本年七月十日迄爲替方ニテ、交換事業取扱候條、右期限中無遺漏交管下各區ヱ

換可申出、尤税金其外上納金ニ差出候儀ハ、七月十日迄ハ差支無之候、此段布達候事、

附リ、引換ニ差出ス舊藩札、裏面ニ白紙ニテ糊着シ、所持人署名押印致シ可指出事、

明治八年五月四日　　新川縣權令山田秀典

舊金澤藩札交換場順次日割

| 郡 | 交換場 | 區名 | 日割 |
|---|---|---|---|
| 新川郡 | 上市村 | 第六大區 | 五月二十一日ヨリ |
| | 魚津町 | 第三大區第五大區第四大區 | 同二十三日マヨリテ |
| | 入膳村 | 第一大區第二大區 | 同二十七日マヨリテ |
| 婦負郡 | 八尾町 | 第十三大區 | 同三十一日 |
| 礪波郡 | 今石動町 | 第二十一大區第二十二大區 | 五月二十一日ヨリ |
| | 井波町 | 第二十四大區第二十五大區 | 同二十三日マヨリテ |
| | 杉木新町 | 第二十六大區第二十三大區 | 同二十六日マヨリテ |
| 射水郡 | 高岡町 | 第十四大區第十七大區 | 同三十一日ヨリ |
| | 新湊町 | 第十五大區第十六大區 | 六月二日ヨリ |
| | 氷見町 | 第十八大區第十九大區 | 同五日マヨリテ |
| 新川郡 | 富山町 | 第九大區第七大區第十大區第八大區第十一大區第十二大區 | 同三日ヨリ |
| | 婦負方 | | 同十日マヨリテ |

但各區ニテ引換殘ノ分、六月十二日ヨリ七月十日迄、爲換方ニ交換ニ可差出事、

右各區日割ヲ以、各交換場ニ於テ可換、因テ午前第七時ヨリ午後三時迄ニ、交換可申出事、

明治八年五月　　新川縣

八月己未朔

二十日、戊寅、兵制を改め、越中國を東京鎮臺新潟分營の管區に屬せしむ、後屢管轄の變更あり、

〔法令全書〕

兵部省第七十三　明治四年八月二十日

今般廢藩被仰出候ニ付テハ、從前所管之常備兵總テ解隊之上、全國一途之兵制御改正可相成之處、差向キ內外警備之爲、別紙之通、各所ニ鎮臺ヲ被置、管地ヲ被

定候條、此旨相達候事、

（別紙）抄

東京鎮臺　常備兵歩兵十大隊

第一分營新潟　常備歩兵一大隊

管　越後　羽前　越中　佐渡（○他ハ省略）

鎮臺本分營之常備兵ハ、元藩下之常備兵ヲ召集シテ充之ヘキ事、

元大中藩之常備兵ハ、其縣下ヘ一小隊ッヽ、備置ヘキ事、

地方城廓之儀、兵部省管轄被仰付候事、

但縣ニ於テ明細之圖面相調、早々兵部省ヘ可差出事、

〔富山縣内務部社寺兵事課調査〕

廢藩ノ爲メ、明治四年八月二十日、兵部省第七十三條ヲ以テ、發布セラレタル改正鎮臺管區ニ依レハ、越中國ハ東京鎮臺第一分營管下ニシテ、其分營ノ所在ハ新潟ナリ、而シテ同分營ニ屬セシハ、越後羽前越中佐渡ノ四箇國トス、

明治六年一月九日、太政官布告第四號ヲ以テ、全國鎮臺配置表改定セラレ、全國ヲ六軍管ニ分チ、石川新川足羽ノ三縣ハ、第三軍管名古屋鎮臺金澤（七尾福井）營所ニ屬セシメラル、

明治八年六月九日、陸軍省布達第百六十九號ヲ以テ、同年四月七日六管鎮臺表等ヲ改訂シタル旨達セラレ、石川、新川、敦賀ノ三縣ヲ第三軍管名古屋鎮臺第七師管金澤（七尾、福井、敦賀）營所ニ屬セシメラル、

明治十八年五月十八日、太政官第廿一號ヲ以テ、鎮臺條例ヲ改正シ全國ヲ七軍管トナシ、一軍管ヲ二師管ニ分チ、各軍管ニ鎮臺ヲ置キ、各師管ニ營所ヲ置カル、其管域表ニ依レハ尾張、三郡、美濃、飛騨、加賀、能登、越中、越前ヲ以テ、第三軍管名古屋鎮臺第六師管金澤營所ニ屬セシメラル、

明治廿九年三月十四日、勅令第二十四號ヲ以テ、陸軍管區表ヲ改正シ、同年四月一日ヨリ施行セラル、本改正ニ據レハ全國ヲ十二師管トナシ、第九師團ヲ金澤ニ置キ、金澤、富山、敦賀、岐阜ノ各聯隊區ヲ管シ、富山聯隊區ハ富山縣及岐阜縣大野郡、益田郡、吉城郡ヲ管轄トセリ、

明治三十六年二月十三日、勅令第十三號ヲ以テ、陸軍管區表改正セラレ、第九師團ニハ、第六第十八ノ二箇旅團ヲ置キ、第六旅團管下ニハ金澤、富山ノ兩聯隊ヲ置キ、富山聯隊區ハ富山縣ヲ管轄セリ、

明治四十年九月十七日、軍令陸第三號ヲ以テ、陸軍管區表ヲ改正セラレ、全國ヲ十八師團ニ分チ、第九師團(金澤)ニハ第六(金澤)第三十一(富山)ノ二箇旅團ヲ置キ、第三十一旅團ヲ高岡富山ノ二箇聯隊區トシ、高岡聯隊區ハ高岡、氷見、射水、東礪波、西礪波ノ五箇郡市、幷ニ石川縣ノ三郡ヲ、富山聯隊區ハ富山、上新川、中新川、下新川、婦負ノ五箇郡市、幷ニ岐阜縣ノ三郡ヲ管轄スルコトトナリ、同十月一日ヨリ施行セラル、

〔參考〕

〔法令全書〕

明治三年十一月十二日　　府藩縣

東海道　北陸道

右辛未四月廿五日ヨリ五月朔日迄ノ內、大坂徵兵方ヘ、御規則ノ人員可差出事、

十月戊午朔

三日庚申、庄川出水、

〔富山縣警察部保安課調査〕　明治四年十月三日、庄川出水一丈四尺、大門町堤防欠壞シ、人家ヲ流失スルコト五戶、死者三人アリ、常盤橋モ亦流失ス、

二十四日辛巳、齋藤彌九郎歿す、

〔齋藤篤信齋履歷書〕

翁、諱ハ善道、字ハ忠卿、彌九郎ト通稱シ、晩ニ篤信齋ト號ス、姓ハ齋藤氏ニシテ、越中國射水郡佛生寺村ノ人ナリ、系ハ藤原ノ朝臣利仁ヨリ出ツ、利仁ノ子孫北陸ニ徙リ富樫ノ莊ヲ食ム、因テ富樫齋藤ト稱ス、元龜天正ノ間、門徒(一向宗)ノ故ヲ以テ擧族織田氏ニ抗シ、連戰利アラスシテ遂ニ民間ニ遁ル、父諱ハ信道、新助ト通稱シ、七子ヲ生ム、翁ハ其長子ナリ、寛政十年戊午某月某日ヲ以テ生ル、幼ニシテ大志アリ、年市メテ十歲、僧某ニ就テ句讀ヲ受ク、

文化九年壬申(翁歲十五)一日嘆シテ曰、僻邑寒鄕、丈夫以テ志ヲ伸スニ足ラスト、奮然家ヲ脫シ單身俱利伽羅ノ嶺ニ至リ、其不動尊ヲ拜シ、我他日志ヲ達スルニ非ラサレハ再ヒ此地ニ來ラスト誓ヒ、終ニ道ヲ間道ニ取リ江戶ニ至リ、(翁鄕里ヲ出ツルトキ、路費金一方(銀貨一分)ヲ持ス、都門板橋驛ニ到レハ、纔ニ銅貨二孔ヲ剩ス、以テ炙半ヲ購ヒ飢ヲ凌キタリト、)微カニ知ル所ノ鄕人土屋某ニ寄リ志ヲ述フ、某其志ニ感シ周旋スル所アリ、暫ラク幕府旗下ノ士能勢祝之丞ノ從者トナル、而シテ當時劍法ノ名家、岡田十松ノ門ニ入リ、始メテ擊劍ノ術ヲ學ヒ、(翁能勢カ家ニ在テ、晝間ハ令子ニ經書ノ素讀ヲ敎ヘ、又使役ニ供ス、故ニ自ラ文武ヲ修ムルノ暇僅少ニシテ志ヲ遂クルノ遲キヲ憂ヒ、)

夜ニ問庭ニ就カス、机ニ憑リテ机上ニ倩スノミ、故ニ額上常ニ痕ヲ存ス、人見テ怪アリト云、又冬夜讀書シテ天明ニ至ル、偶々睡眠サ催スアレハ、唯拳サ書スル時、寒氣ニ堪ヘサレハ、直ニ立テ竹刀ヲ把リ、厩ノ柱ニ向ヒ伐リ反ヘシサナシ、暖サ發シテ寒サ遁ケタリ、後チ入塾ス、又經義ヲ赤井嚴三ニ受ケ、西洋砲術ヲ高島秋帆（四郎大夫ト通稱ス）ニ、馬術ヲ品川吾作ニ學ヒ、兵法ヲ平山子龍、清水俊藏等ニ問フ、鼎勉講習、夜以テ晷ニ繼キ遂ニ其蘊奥ヲ極メタリ、人皆其忍耐ニ服ス、既ニシテ、師十松歿シ、嗣子不肖、父ノ業ヲ襲フ能ハス、茲ニ門弟子會議シ、翁ヲ推シテ其跡ヲ嗣カシム、

文政九年（丙戌）（翁年二十九）飯田町ヘ道場ヲ設ケ、劍術教授ノ業ヲ始ム、是ヨリ先、豆州韮山ノ代官江川英龍（初メ邦次郎ト稱シ、後ナ太郎左衛門ト改ム）、亦十松ノ門ニアリ、翁ト意氣相投シ、開業ノ事ニ於ケルモ頗ル助力アリシカハ、英龍カ代官ノ職ニ就ニ及ンテ、翁ニ囑スルニ内外改革ノコトヲ以テセシニ、翁其厚意ニ感シ之ヲ肯諾シテ暫ラク英龍ノ手代トナリ、左馬介ト名乘リ英龍ノ屬吏ヲ鼓舞シテ、專ラ文武ノ道ヲ勵マシ、節儉ノ風ヲ興シ、屢ハ管内ヲ巡回シテ、人民ニ接スルニ寛猛、以テ奢侈ヲ禁シ惰民ヲ敎戒シ、農ヲ勸メ、凶年飢歲ノ爲、各村ニ年々貯穀ヲ爲サシムル等、事大小トナク身ヲ以テ傭役ノ任ニ當リ英龍ノ職務ヲ助ケタリ、

天保八年（丁酉）（翁年四十二）十九日、大鹽平八郎兵ヲ大阪ニ擧ケ、火ヲ市中ニ放ツノ報ヲ聞クヤ、之ヲ討ントシテ江川英龍ニ謀リ、三晝夜ヲ以テ大坂ニ達ス、此日平八郎父子捕吏ノ圍ム所トナリ、火ヲ家ニ放ツテ焚死スルノ時ニシテ實ニ三月廿七日ナリ、翁遺憾ニ堪ヘス空シク歸東ス、後平八郎殘徒、英龍カ管下甲州及ヒ武相二州ノ近境ニ潛匿セシヤノ報アリ、翁英龍ニ隨ヒ兩人齊シク身ヲ刀劍商ニ裝ヒ、微行シテ之ヲ探ラレタリ、

天保九年（戊戌）（翁年四十一）三月、隣家火ヲ失シ、延ヒテ道場ニ及ヒ悉ク烏有トナル、因テ場ヲ三番町（今ノ招魂社地中ナリ）ヘ再造シ、益々授業ニ勉ム、此土木タル亦英龍ノ費助多キニ居ルト云、

同年十一月、水戸中納言齊昭公ノ召ニ小石川ノ邸ニ謁シ、合力扶持ヲ給セラル、

天保十二年（辛丑）（翁年四十四）五月九日、武州豐島郡德丸村原ニ於テ、幕府高島秋帆ニ命シテ洋式ノ銃隊ヲ演習セシム、閑老水野忠邦（越前守）銃隊操練、及大小砲打方ヲ見ル、（閑老ノ閲覽ヲ見ル、トモ云フ）翁、江川英龍ノ部下ニアッテ野戰砲ノ打方ヲ爲シタリ、

同年八月一日、水府弘道館新築落成シ、開館ノ典ヲ擧ラル、翁召換ノ命ヲ拜シ、舍弟齋藤三九郎門人百合元弁三（後池田智親ト改ム、翁ノ高弟ニシテ、江戸ニ住シ、後師範ヲ以テ藩ト、後因州池田侯ノ胤ナルヲ以テ、同家一族トナリ、細田泰一郎（後藤田姓ヲ冒ス、後幕府ノ徒ニ役トナリ、傍ラ師範ヲ冒ス、同姓ヲ冒ス）友平榮、外山小作等ヲ

率ヒ水府ニ赴キ、數日間、弘道館ニ昇降シ、公ノ賞詞賜モノヲ拜シ、面目ヲ施シタリ、

幡崎鼎ナルモノ長崎ニ在テ、蘭學ヲ修メ頗ル海外ノ事情ニ通ス、江戸ニ來リ蘭書ヲ飜譯シ、當世ノ事ヲ談シ慷慨氣節ノ士ナリ、水戸侯ノ抱トナル、鼎曾テ長崎ニ於テ國禁ヲ犯セシコトアリ、幕府ノ知ル所トナリ、水戸侯ヘ沙汰シテ預トナス、後チ更ニ勢州薦野藩（土力市正）ヘ預ケ替ヘトナリ、護送セラレントス、江川英龍、幕悅ノ情アルヲ以テ翁之ヲ報ス、英龍、金ヲ贈リ鼎カ囚情ヲ慰セントシ事ヲ翁ニ囑ス、翁之ヲ諾シ体ヲ士人ニ變シ其一行ヲ窺フ、警護甚タ嚴ニシテ近ツク可カラス、因テ翁囚ニ先ンシ東海道神奈川邊ニ徘徊シ囚ノ來ルヲ待ツ、時大雨ニ會シ囚徒、茶店ニ憩フ、翁跫跟トシテ泥醉漢ノ爲シ、卒然徒ニ當リ中ヘ金書（書ハ紙ノ燃トナリシタヲ投ス、警護ノ者之ヲ察ラス叱呵シテ去ラシム、翁歸リテ狀ヲ語リ命ヲ復シケレハ、英龍大ニ悅ヒ卿ニ非ラサレハ此事ヲ果ス能ハストナシ、賞賛已マサリシト（時天保ノ末年ニシテ、鼎ハ長崎ニ於テ刑セラレタリト、）

弘化元年甲辰（翁年四十七）五月六日、水戸齊昭公幕府ノ嫌疑ヲ以テ駒込ノ邸ニ謹愼セシメラル、（家老戸田銀次郎、寺社奉行今井金右衛門、側用人藤田虎之助モ禁錮トナル、）茲ニ於テ家臣武田彦九郎、



（後修理ト改メ、晩ニ耕雲齋ト號ス、番頭ナ勤ム、）吉成又衛門（郡奉行ナ勤ム）等士民ニ代テ其寃ヲ雪カント矢ヒ、書ヲ遺シ藩ヲ脫シテ翁ノ許ニ來リ、謀議スル所アリ、翁、內藤新宿萬屋彌三吉方ヘ潛匿セシメタリ、公深ク兩名ノ脫藩ヲ憂ヒ、家臣ニ命シテ百方搜索スト雖モ、遂ニ其行ク處ヲ知ラス、因テ公自ラ書ヲ裁シ密ニ翁ニ賜フ、蓋シ搜索ヲ命スルナリ、其全文ヲ左ニ記ス、

我等襲封以來、天下之御爲日夜心力ヲ盡シ候處、不圖退隱被仰出候儀ハ、從來之不才周旋不行屆故之事ト存候、乍然微衷之赤心ハ、內外共承知ニ候間、誰有テ叛心抔トハ存間敷、終ニハ黑白相分ル事ト存候、長上之命ヲ守リ候儀ハ、敬上之道故嚴密ニ愼居候、然ルニ家中初、農民共迄我等カ赤心之忠節歎訴可致ト騷キ立候、其志我等ヘ對シ致命盡忠ト可存候ヘ共、三親藩之列ヲ汚候身分、對宗室恐悚之至ト存候、此節武田、吉成一命ヲカケ、我等カ赤心歎訴イタシタク、萬一事ノ不就時ハ歸國不致趣書遺シ置、密ニ出府之由承リ及候故、手ヲ分ケ搜サセ候處、居所一切知レ兼候、如何程忠義ノ志ニテモ、宗室有司抔ヘ歎訴イタシ候事ハ、我等ニ於テハ迷惑ニ存候、依出府不致樣豫メ達候上ハ左程ニ存詰タル事ニテモ、前文之意味ヲ能々考ヘ、我等申付ニ背カサルコソ、人臣タ

ル者ノ職ナルヘケレ、何分手ヲ廻シ捜シ得候ハヽ、此旨申諭シ早々歸國致候
樣扱ヒ賴候也、

急キ大亂書推覽

十月十八日

花押

江川殿内齋藤彌九郎ヘ

又宛所ナキ公ノ密書モ、倶ニ翁ノ許ニ藏置ス、蓋藤田虎之助ヘ賜ヒシモノナルヘシ、翁虎之助トハ莫逆ノ友ニシテ、内外ノ事ヲ謀議シ、互ニ憑依スル處アリシカニ、安政二乙卯年十月二日、震災ニ罹リ小石川ノ水戸邸ニ死ス、翁悼惜措カス、即時白家ノ長持ヲ持シ、死體ヲ收メテ水府ヘ送致ス、左ニ記ス、

武田吉成罷登候ヨシノ處、如何程宜敷存意有之候トモ、我等早々歸國イタシ候樣申付候上ハ、早速歸國イタシ、我等カ心ヲ安シ候樣可致事ニ候、遠方ニテハ此地ノ模樣モ不相分候故、兼々我等公邊ヘ御忠節ヲ盡シ候ヲ、表裏ニ相成候故右之タン申延候半ト存罷登候儀ハ、忠心ニ候ヘ共、又右樣之儀申出我等爲ニ惡敷模樣ト申ニモ不拘、一已ノ存念申張度存候テハ却テ不忠ニ相成申候、タトヘ國許ヘ如何樣認置候テ出候トモ、我等ケ樣申候上歸國イタシ候義ハ、少モ耻ニハ不相成、カク迄存込候義タリ共、君命ヲソムキ不申ト申所モ、武



士ノ道ニ候ヘハ、何分早々下リ候ヤウ、又衞門居所モ相分リ申候ハヽ申遣候
テ何レモ下リ可申候、
尙々我等忠心ナルヲ、表裏ノ御扱ニ相成候トテ、此方ニ於テハ被仰付候通リ、
長上ノ命ヲ守リ候ヘハ、其内ニハ公邊ニテモ御分ニ相成候、只今彼是申候者
被仰付ニ悖リ、以ノ外ニテ我惡ム所ニ候故、早々歸國可致候、尙又外々ヘ立ノ
キ等モイタシ候テハ、益兩人ニテ百姓共迄ヲ出シ候ヤウ聞エ、是以ノ外故、此
ダン彌九郎等ヘモ内々相賴ミ、早々歸國イタシ候ヤウ扱セ可申候、公邊御役
方抔ヘ出候儀、決テ不致ヤウ可申候、公邊ノ方ヘハ出國致シ候ヲ其マヽ、不申、
萬一御沙汰ニモ相成候テハ、此方手ヌケ故、逆上モイタシ候哉、宅ニ居リ不申
候處、萬々一歎訴等ニ出候ハヾ、此方ヘ引渡ニ相成樣申置候ヘハ、參リ候テモ
逢候事ハ一切無之、公用人等ヘモ相成候事ハ不相成上、我等初ノ難ニ相成、又
此方ヘ被引渡ニ相成候上ハ、指出ノ義願候トモ指出シハ致シ兼、第一無願ト
申事、夫々ヘ屆置候ヘハ、法ヲヤフリ候人ノ申事、公邊ニテハ取上不申候、又二
度歸リ候事不相成候トテ、此邊ニテ切腹等イタシ候ヘハ、彌百姓共迄サハカ
セ候故ト申ニ可相成、夫ノミナラス死候テハ、以後非常ノ事有之候テモ、我等

ノ爲イタシ候事モ不相成候ヘハ、カタ〳〵早〳〵下リ可申候、韓信ガマタヲクヽリシ耻辱モ其時計ノ事ニ候故、耻辱ト存候トモ、歸申候テ勇氣ヲ養置可申候、命サヘ有之候ヘハ異船等ノ義有之候節、天下ノ御爲モ相成申候故、幾重ニモ我等ノ下知ヲ守リ歸國可致、尙我等ノ書面持參ノ上ハ、耻辱ハ一切無之事、クレ〳〵モ彌九郎等ヘ相賴ミ候テ、引カヘシ候ヤウ扱セ可申候、實ニ只今御役人等ヘ出候ヘハ、我等初メ爲其不宜候故、忠義ノ心得ニ候ハヽ、歸リ候ヤウ可申候也、

彦九郎又衛門ハ、閣老水野越前守役邸ヘ出テ、書ヲ以テ公ノ寃ヲ哀訴セシニ、幕府ヨリ水戸家ヘ沙汰アリ、水戸家ニ於テハ發狂者ノ趣ヲ以テ交付ヲ請フ、即チ十月二十一日、兩人ヲ小石川ノ邸ヘ交付ス、（十一月十六日、幕府公ノ體憤サ解キ藩政ニ干預ス可ラサル旨ヲ命ス、）其時彦九郎ヨリ翁ヘ贈リタル書柬アリ、左ニ

先生　大罪人

兼々御心配ニ相成候處、今日物頭ヲ以御使有之引取申候、誠本望之至候、此段御禮旁認置申候、以上、

十月廿一日夜八鞁

嘉永四年辛亥（翁年五十四）三月十七日、父信道鄕里ニ於テ享年八十ヲ以テ死去ノ訃音ニ接シ、翁慟哭シテ已マス、家族ニ告ケテ曰ク、余鄕國ヲ出テ業ヲ興セシ以來、歸省スル少ニシテ、倚門ノ情ヲ慰スル能ハス、不孝ノ罪逃ルヽニ道ナシ、今ヨリ三年ノ間精進ヲナシ、靈位ヲ祭ラン、因テ庖厨ヘ三ケ年大精進ト大書シ揭ケ、肉食ヲ斷チ三年ノ喪ヲ了ス、十松同門ノ士、武田彦九郎、藤田虎之助等、師歿シテ以來皆翁ニ師事シケレハ、翁ノ名聲天下ニ聞エ、弟子益々增進シ、列藩爭ウテ之ヲ延キ家臣タラシメントス、翁皆辭シ只藩ヘ出入シテ扶持方ヲ受ケシ耳、交ハル所渡邊華山、高野長英、佐久間象山、吉田松陰、二宮尊德、山野邊兵庫、戸田銀次郎、吉成又衛門、立原任太郎、篠崎司直、幡崎鼎、賴三樹三郎、櫻任藏、來島又兵衛、村田藏六（後大村益次郎ト改ム）、井上小豐、後周布政之介、大塚山三郎、鹽谷甲藏、齋藤拙堂、大槻磐溪、中根雪江、橋本左内、内山隆佐、小原二兵衛、鈴木春山、伊東玄朴、岩名昌山等、皆當時ノ人傑ニシテ、其ニ當世ノ務ヲ談ス、又幕臣松平河内守、川路左衛門尉、大久保右近將監（後一翁ト改ム）、羽倉外記、堀織部正等ノ厚遇ヲ受ケタリ、

嘉永六年癸丑（翁年五十六）十二月、長州侯ノ臣、翁ノ塾ニ在ルモノ、井上壯太郎、河野右衛門、桂小五郎、林乙熊、財滿新三郎、佐久間卯吉等六名ヲ引取ラントス、蓋シ長

州侯、幕府ヨリ相模國備場委任ノ命アルニ依ル、因テ退塾ノ際翁ヨリ書ヲ送ル、

今般太守様相州御備場海口要路防禦被爲蒙仰候ニ付稽古御入熟之方々麻布御下屋敷エ御引取異國船渡來御指圖有之次第御出張之趣御沙汰有之右者國家之御大任武門之御威光恐悦至極ニ奉存候就テハ此度公邊エ被召出候土佐國漂流人萬次郎ヨリ承候處方今蠻夷ノ形勢火攻軍船ニ熟練イタシ彼國迄國ワツカ七拾年來國體殊之外相開ケ候由我朝ニテハ異國人トモ鎗劔等ハ一向未熟之趣申聞候ヘ共彼國於武官ハ鎗劔ハ勿論柔術稽古迄行届殊ニ全世界中不至處モ無之交易イタシ年々歳々繁昌相増シ候由之處來三月大軍艦數艘着向御挨拶之次第ニヨリ兩國ノ民安穩不相成趣背鞘ニ相見候ヘハ三月若船有之候節御穩便之御沙汰可被仰渡候トモ委細不構致上陸若陣屋ニテモ相構此方ヨリ差留候テモ不取用候節ハ其儘ニ難差置自然兵端可相開ハ必定ニテ不容易一大事ニ御座候間如何様ニモ御嚴備可有之處御臺場等是迄之姿ニテハ不備ニ候間小田原宿詰手ニ築立相成候ヨーロツハ洲仕立御臺場至極輕便ニ御座候間鎌倉由比濱ヨリ三崎町邊迄數ケ所取定二十四ホント八十ホント鐵銑筒御備相成三浦郡不動山邊エ反射爐鐵銑筒鑄立場補理四大將被仰合御鑄立相成御同掛リ之方々様被仰合大砲八十門以上相備候大軍艦凡ソ五六十艘モ御出來不相成候テハ防禦之儀無覺束候處右何レモ半年一年ニテハ出來不申軍艦一艘西洋ニテハ大ケ年モ相掛候由差掛リ當節之議論ニ御座候間當今堅馬之急務致勘辨候處有器械無之候テハ無據次第ニ付彼ニ十倍ノ人數ヲ以テ決戰イタシ候ノ外無之異人火砲ヲ以テ可攻掛候間我長器鎗劔ヲ以テ手元ニ可馳入手段ニ候處彼之術法不識ニテハ不發ノ基ニ候間仍テハ彼ノ國戰爭火攻之機會能々熟練イタシ三月ハ必死覺悟之心得ニ致度昨今之時務此他ハ有之間敷候御承知之儀ニ可有之候得共爲覺悟及御相談候云々同時男新太郎能巻ヨリモ諸侯出馬ノ際人數ニ加リ出ンコトヲ申請セシニ臨機出張ヲ通達スヘシトノ報アリ

翁、嘗テ水戸侯・越前侯・長門侯等ノ殊遇ニ感シ、屢時事策ヲ献ス、此時ニ當リ海外諸國來テ修好互市ヲ請ヒ、和戰ノ議朝野ニ囂シク、一日水戸侯齊昭公ヘ縣劔隊



ヲ組織シ、實地演習ノコトヲ陳ス、公大ニ善ミシ門下ノ子弟ヲシテ、演習觀覽ノ命ヲ辱ス、則チ安政三年丙辰四月五日、水戸侯小石川ノ邸ニ於テ、劔隊野戰ヲ演シ觀覽ニ供ス、其方兵ヲ分ツテ兩陣トナシ、劔隊銃伍以テ正兵ニ充テ、突騎長槍以テ奇兵ニ充テ、對抗シテ戰ニ擬ス、號令嚴肅進退意ノ如シ、蓋我國三兵ノ對抗、翁ヲ以テ嚆矢トナス、公歎シテ曰ク、嗟海内ヲ擧テ精鋭此ノ如クナラシメハ、外侮モ憂フルニ足ルモノナシト、因テ自ラ報國ノ二大字ヲ書シ、刀劔馬具ヲ併セテ之ヲ賜ハル、茲ニ於テ練兵館ノ名益世ニ顯ハル、是ヨリ先三番町ノ原ニ屢ハ演習ス、事幕府ニ聞ヘ、勘定奉行松平河内守近直ヨリ其方法ノ諮詢アリ、因テ答申書ヲ出ス、

去十一月中松平河内守様ヨリ御沙汰ニテ野試合仕組出來候ハヽ於角筈村御覽可被遊旨御沙汰モ御座候ニ付此段奉申上候右野試合掛口之儀ハ私共劔術試合稽古ヨリ心付候承ニテ片隊片陣ニテハ足輕調練等仕候テモ緩急機發ノ場合如何ニモ無覺束奉存從來野試合心掛罷在候處近來火術從流ニ相成候ニ付テハ此上戰爭ハ總テ劍炮二術ニ限リ可申奉存候因テハ双方戰士小筒打許間合何十歩ニ至リ候時汐合ヲ見極メ齊シク切込可申所肝要ニテ毫釐之遲速聊先後之位置ニテ大勝大敗ノ分ルヽ處野試合之眼目自然活潑之妙用此ニ可有之奉存候右奇正遲速之儀ハ座上ニテ相分リ來候間双方於廣場進退掛引稽古仕士氣引立候様作興相加度奉存候陣法巧拙等之儀ハ追々有識之批評ヲ待日新ニ改正仕度奉存候因テ此段奉申上候云々（安政三年丙辰三月）

尋テ閣老見置ノ命アリ、三月十八日ヲ以テ三番町ノ原ニ於テ、劔砲隊演習ヲナシ、賞詞ヲ受ク、但角筈村三番町ノ原ニ更ヘシナリ、翁、又獻議ヲナス、當時武備御世話被爲在候ニ付盛ニ調練有之候處大

平ノ士民、師範之人ニテモ、戰爭ノ義ハ不レ致目擊事ニテ、武器類手馴不申、往々怪我等有之、不調法至極ニテ喫敗儀ニ候、殊ニ劍・炮・鎗・馬・水泳ノ五術ハ、方今兵士ノ急務ニ候、御座候處、御治世以來、華法之偏固ニ習熟イタシ、武道不審ニ御座候、中ニハ技術專ヲ行ハレ、雖相開、素盞嗚ノ人術ヲ流派ト申ハ無拍子ニ、師家ノ槽ヲ授リ、自皿イ無差別、天下ノ耳目ヲ以テ、流派ノ時勢ニテハ、分安心罷在候ヲ以テ、當時ノ上、兵士組立調練ノ事情ト、外國ノ事情モ不相臨時、

今上天皇明治四年

家臣毛利筑前（家老波多野金吾、後廣澤兵助ト改ム）井上小豐後、毛利登等隨從ス、此諮詢タル極メテ秘密ニ屬スルヲ以テ、樞要ノ者耳ヲ侍セシメ、他ハ悉ク之ヲ遠ケタリ、侯、攘夷ノ事ヨリ勤王佐幕ノ論ニ及フ、是ヨリ先、藩論二途ニ分レ歸着セル所ヲ知ラス、茲ニ於テ侯狩獵ニ托シ翁ヲ山莊ニ諮ヒ、此大義ヲ以テス、翁答ヘテ曰ク、方今天下ノコト尊王攘夷ニ歸ス、是朝旨ノアル處、幕府ヲ佐ケテ膺懲ノ典ヲ擧クルノ秋也、臣タル者致命シテ君ニ盡サヾルヘカラス、苟モ公ノ方向決定セサレハ、忠トナシテ進ムモ不忠トナリ、義トナシテ退クモ不義トナル、此レ藩論一定セサル可カラザル所以ナリ、此時水府ニ於テ、一發鑒廟ト號スル大礮ヲ鑄造ス、始メ鑄物師某、千辛一意鑄造スト雖モ鑄損シタリ、之ヲ再ヒスルモ又全ヲ得ス、時ニ鑄物師、烈公ノ清覽ニ際シ、面目ヲ失フトナシ、湯壺ニ投シテ死セントス、公直チニ之ヲ止メ、懇諭シテ尚改鑄セシメ、漸ニシテ精工ノ礮ヲ製造セリト、公ノ良臣、皆斯ノ如ク身命ヲ公ニ捧ケテ、忠節ヲ盡スモノナリ、幕府若シ朝命ニ應セサレハ、已ムヲ得ス、幕府ヲ捨テ朝旨ヲ遵奉セサルヘカラス、是小節ヲ捨テ大義ヲ取ル也ト、腹心ヲ披陳ス、公之ニ感激シ意志確定サレタリト、其時又勇士ヲ四方ニ募ラントシテ事ヲ翁ニ託ス、翁之ヲ承諾シ砂村ナル侯ノ邸ヲ預リ、移ッテ



一武州豐島郡代々木村ニ於テ、土地三千三百七十五坪ヲ購求シ、精力ヲ盡シテ開墾ニ從事シ、數年ナラスシテ大ニ茶園ヲ起シ、世人ヲシテ殖產ノ道ヲ知ラシム、又鄕里ナル弟新助（婿ノ次弟ニシテ、ノ家名ヲ繼ク、）ヲ諭シ、茶園ヲ開キ漆木ヲ山ニ殖エシム、而シテ該種苗等皆之ヲ求メテ送致セリ、

文久二年壬戌（翁年六十五）秋、長門侯（毛利元德）自ラ翁ノ代々木山莊ニ臨ミ時事ヲ諮フ、

住シ門生ヲ教育ス、門人堀鐵太郎ナル者、攘夷ノ勝算ヲ問フ、翁答テ曰、勝算ナシ、然リト雖モ、勢茲ニ至ル、攘夷セサル可カラス、果シテ敗セハ、其時ニ於テ償金ヲ出シ、初メテ積弊ヲ一洗シ、士氣ヲ振興スヘシト、茲ニ於テ久保無二三、今秀臣ト稱ス、佛生寺彌助・高部彌三雄・水戸屋藤次郎・北村北辰齋・三宅小備後・野原正一郎・齋藤九一・吉田虎雄・石川小早太・奈須唯一・新坂小太郎・益田半之丞・後藤又兵衛後藤相馬ノ弟等ノ輩ヲ薫陶シ、勇士組ト號シ長州ヘ送ル、

同年十一月十三日、久坂義助・高杉晉作・寺島忠三郎・大和彌八郎・長嶺内藏太後渡邊ト改ム、志道聞太今井上馨ト改ム、品川彌二郎・山尾庸三・松島剛藏・有志熊次郎・赤根幹之丞等、櫻田邸毛利侯上屋敷ヲ脫シ武州金澤ニ赴キ、外國人ヲ斬ランコトヲ企ツ、事發覺シテ神奈川臺下田屋ヨリ江戸ニ歸リ、十一士ハ櫻邸ニ幽セラル、于時世子長門守迄、十一士ハ藩ノ爲メ、夜中乘馬ニテ出張セラレタリ、此幽囚中、窃ニ邸ヲ出テ御殿山外國人應接所ヲ放火シテ焚ク、十二月品川・山尾・赤根ハ深川鶴歩ノ毛利邸ニ移シ、翁ヲシテ管督セシメ翌春ニ至ル、

翁、嘗ニ悍馬ニ乘リ、代々木砂村ノ間ヲ奔馳ス、他人之ニ乘ルトキハ忽チ横行電逸シテ耐ユル能ハス、翁ニ非サルヨリハ御スルヲ得ス、翁膽勇ニシテ又馬術ニモ長セシヲ知ル、



明治戊辰之變、官軍三道ヨリ江戸ニ薄ル、府下ノ人心洶々タリ、翁毅然トシテ順逆ヲ論シ、衆窃ニ之ヲ憚ル、此時ニ當リ德川氏ノ臣屬、相率キテ上野寛永寺ニ據リ彰義隊ト號ス、其首領等相謀リ翁ヲ延イテ節制ヲ受ケントス、乃使某來リ請コト切ナリ、翁容チヲ改メ言テ曰、卿等ノ舉寔ニ天下ノ治亂ニ關ス、抑モ卿等ノ志ス所果シテ主家ヲ復スルニ在ルカ、大義犯ス可カラス、名分紊ル可カラス、苟シクモ大義ヲ犯シ名分ヲ紊ルトキハ、敗亡立トコロニ至ル、果シテ身ヲ殺シ仁ヲ爲ス乎、老夫無似ト雖モ請フ一策ヲ献セン、德川氏恭順謹愼以テ恩典ヲ冀フト雖モ、天怒未タ霽レス、之カ臣屬タル者、宜シク駢首屠腹シ其屍ヲ堆積シ、上以テ主家ノ罪ヲ購ヒ、下以テ臣子ノ分ヲ盡サハ、老夫亦卿等ト俱ニ死シ以テ厚誼ニ報イン、辭色甚決ス、某愕イテ謝シテ曰、謹ンテ高論ヲ聞ク、再議ノ上以テ答ヘント、翁曰、事既ニ此ニ至ル、何ソ再議スルニ遑アランヤ、因テ嘆シテ曰、嗚呼好男子此田舍翁ニ愧ルコト勿レト、既ニシテ彰義隊果シテ敗レタリ、明治元年戊辰、翁年七十二、七月十四日、徵命アリ、翁兒孫ヲ顧ミテ曰ク、吾齡七旬、氣魄復昔日ニ非ラス、然リト雖モ、聖代ニ遭遇シ斯恩命ヲ蒙ル、死シテ且朽チサルナリ、卽チ上京、八月廿六日、徵士會計官判事試補ヲ拜ス、同九月五日、大阪會計官中各司撿視ノ

命アリ、尋テ會計官權判事ヲ拜シ大阪ニ在勤ス、明治二年己巳(翁年七十二)六月左ノ如ク達セラル、

勤仕中、格別勵精之段神妙之事ニ候、今度官員御減省ニ付、徵士並是迄之職務被差免候事、

齋藤篤信齋

同七月廿三日、造幣局權判事ヲ拜シ、職務局中監督ヲ命セラル、九月十四日造幣允ニ轉任ス、

同十一月四日、造幣寮火アリ、翁驚イテ驅馳シ、到レハ已ニ烏有ニ屬セントス、公文書ヲ僚屬ニ問フ、出スヲ得スト答フ、翁奮然焰中ニ入テ簿書貨幣等ヲ提ケテ出ツ、時頭髮燃ヘ面火傷ス、翁少シモ屈セス尙ホ力ラヲ消防ニ盡シテ息マス、見ル者感激セサルハナシ、火傷ノ際、翁ヨリ男綱九郎、新太郎、六郎之助兄弟ヘ付シタル書柬ノ略、去四日夜、造幣寮出火、念場驅付火中飛込、御用書物類其外金銀諸道具、外國產鍍物類引出候ヘ共、類燒ノ品モ有之、自分、四郎之助両人共面部ヤケタ〻レ、老衰故カ余程痛、五日夕方ハ惡寒發熱立居モ不方ニ暮、冥途出立ト覺悟、四郎之助儀ハ痛ハ左マデ無之候ヘ共、自分大病ニテ十人ニテ心配、緒方見舞、藥用ニテ六日朝ハ覺ヨロシク候ヘ共、風ニアテテ候儀被禁候ヘ共、一生ノ納一寸テモ役所迄出勤可致、是迄一日モ引不申殘念至極ナリ、出掛度候處、四郎始同席一同涙ヲ流シ留候故、夫成拵今日迄引籠養生ノ處、最早平日同樣ニ相成御處安心可被成候云々、蓋簿書ヲ失ナヘハ、會計ノ跡ヲ徵スルモノナク、疑ヲ殘

齋藤彌九郎寫眞 東京齋藤滿平氏所藏



命アリ、尋テ會計官權判事ヲ拜シ、大阪ニ在勤ス、明治二年己巳翁年七十二六月左ノ如ク達セラル、

齋藤篤信齋

勤仕中格別勵精之段神妙之事ニ候、今度官員御減省ニ付徵士並是迄之職務被差免候事、

同七月廿三日、造幣局權判事ヲ拜シ、職務局中監督ヲ命セラル、九月十四日造幣允ニ轉任ス、

同十一月四日、造幣寮火アリ、翁驚イテ馳驅シ、到レハ已ニ鳥有ニ屬セントス、公文書ヲ條屬ニ問ヒ、出スヲ得スト答フ、翁奮然焔中ニ入テ簿書貨幣等ヲ提ケテ出ツ、時頭髮燃ヘ、面火傷ス、翁少シモ屈セス、尚ホ力ヲ消防ニ盡シテ息マス、見ル者感激セサルハナシ、[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

成ノ御安心可被成候云々[illegible]書ヲ失ヒ、會計ノ跡ヲ徵スルニ由ナキヲ憾

スノ嫌アリ、故此擧動ヲナシ暗ニ僚屬ヲシテ、會計ノ忽諸ニスヘカラサルヲ示セシナリ、後チ火傷モ治療ヲ加ヘ、數日ヲ出テス平愈ス、翁ヨリ、又彌九郎、新太郎、兄弟ヘ付セシ書柬ノ略、

自分今儀、火傷大事可相成哉ト心配之處、存外手輕全快、去ル十六日出勤、御安心可被成候、尤モ日々經二三百程ツヽ、十日程ツヽメリ藥ニテ乾キ候故、臓持不申、御中越之通經上筑、委細四耶之助ヨリ御承知可被成候、云々、自分事、本職何分永續六ヶ敷、諸事不便ノ事而已ト申ハ、耳目不自由御察可被成候、來春ニモ相成候ハヽ辭職安樂ニ致シ度、云々、

明治三年庚午(翁年七十三)五月廿五日、鐵山大佑ニ轉シ、疾ニ罹リ東歸ス、

明治四年辛未(翁年七十四)十月廿四日、卒ス、小石川昌林院ヘ葬ル、

翁容貌魁偉、幼ニシテ善ク親ニ事ヘ、既ニ長シテ大膽果決、慷慨氣節ヲ尚トヒ、門弟子ヲ待ツコト嚴格ナリ、文武ヲ兼チ修メ、業ヲ授ケテ倦マス、是ニ於テ人材輩出ス、又信義ヲ重ンジ、屢ハ人ノ急難ニ走リ、紛ヲ解ク、時幕府ノ末造ニ屬シ、上下奢侈ニ流レ、武備廢弛ヲ極ム、翁一介之寒士ヲ以テ、其間ニ卓立シ志操ヲ變セス、直言讜議シテ顧慮スル所ナシ、故ヲ以テ屢ハ幕吏ノ忌疑スル所トナリ、翁免レサルヲ知リ、訣飲シテ通宵死ヲ待ツコト數次、而シテ壽ヲ以テ家ニ終焉、

及門ノ士蓋三千、前顯ノ名士、就中木戸孝允高杉晋作品川彌二郎赤根幹之丞井上勝渡邊昇山尾庸三楠本正隆太田市之進(後御堀耕助ト改ム)増井熊太尾崎鏻五郎井吸

唯一・保母・健・渡邊藏太・冷泉五郎・兒玉少介・内山介助・關口隆吉・原保太郎・久保秀景・中山鐵三郎（今館間洗耳ト改ム）・澤野一兵・辻庄一郎・澤田仙次郎（今可逸ト云）・後藤相馬等尤高弟トス、

室堀氏、五男一女ヲ生ム、長男龍善（初メ新太郎ト云フ）・彌九郎ト稱シ家ヲ襲フ、東京府士族タリ、二男歡之助大村侯ニ仕フ、長崎縣士族タリ、三男善孝靜岡縣平民タリ、四男新太郎東京府士族タリ、五男某早世ス、長女象、伊豆國人岡田直臣ニ嫁ス、

〔官報〕

明治四十年五月二十七日

贈從四位　故　齋藤篤信齋

特旨ヲ以テ位記ヲ贈ラル、　故　齋藤篤信齋

十一月（丁亥朔）

二十日、（丙午）富山縣を廢して新川縣を置き、礪波、新川、婦負の三郡を管轄せしめ、射水郡は七尾縣に屬せしむ、

〔法令全書〕

明治四年十一月三十日（布）

今般北陸道並飛驒、信濃、甲斐國ニテ、從來ノ諸縣ヲ廢シ、更ニ左ノ縣々被置候事、

但廢縣從前管轄ノ地所、當未年ヨリ物成鄕村等、新置ノ縣々ヘ可引渡事、

能登國一圓　七尾縣

越中國射水郡　新川縣

越中國

礪波郡　新川郡　婦負郡

○越中國以外は省略す、

二十五日、（辛亥）中島錫胤、七尾縣令に任せられ、幾くならずして轉任す、

〔内閣書記官室履歴課調査〕

明治四年　十一月二十日　七尾縣ヲ被置

同　年　十一月二十五日　中島錫胤ヲ七尾縣令ニ任ス

今上天皇明治四年

同　年　十二月七日　兵頭正懿ヲ七尾縣參事ニ任ス

同　年　同　月十八日　中島錫胤轉任ス

同　五年　九月二十五日　廢縣

是歲、小矢部川に二上橋を架す、

〔高岡市沿革志〕　當時長谷部兵吉、管テ藩廳ノ許可ヲ得、新タニ小矢部、千、保二川會合ノ直下、卽チ木町ト渡村ノ間ニ架設セシ二上橋成レリ、抑モ二上ノ渡舟場タル、其ノ初メヲ詳カニセスト雖トモ、天正十三年、利長公未タ守山城ニ徙ラレサリシ以前ヨリ、之レアルハ今更言フヲ俟タス、○下略



# 補遺

# 補遺

## 光格天皇

### 享和二年

○十月二十七日利幹、山田谷村の農の善行を賞する條の次（二二三頁、第六行の次）

是歳、中田高寛歿す、

〔諸藝雜誌〕六　爰ニ中田文敬先生ハ幼ヨリ數學ヲ好ミ、初廣瀨吉兵衛ヲ師トシテ除乘ヲ學ヒ、後松本武太夫ニ付テ學フトイヘトモ、點竄謗書ヲ用ル事稀ニシテ、演段交式斜乘ナク、招差ニ渾沌方程ナク、煎管ハ括用ヲ要スル而已、如此類勝テ數得ヘカラス、木村羽左衛門ト云アリ、家ニ入江兵庫カ書ヲ貯フ、先生得之晝夜不懈怠視之、寶暦ノスヘハ松本ニ超過セリ、安永三年甲午至東都、山路氏ノ門人ト成、山路先生不幸ニシテ辭世後、米府藩中藤田定資ヲ師トシテ算ノ壺奥ヲ窮ム、其頃同志ノ輩三百有餘人、藤田ヲ首トシテ文敬子ハ第三ニ列ス、選スル所ノ算書數卷ニ及フ、是ヨリ富山ニ大ニ開ル、門ニ入ルノ徒高木藤右衛門、高木吉兵衛、片山彦助、林金治等、各關夫子ノ傳ヲ授、享和二ノ年文敬先生歿ス、塚ヲ五

時谷ニ築キ、七律ヲ作テ、其才ヲ稱テ曰ク、

關子正宗山路存　先生算學出其門　天元演段造玄妙
弧背立圓窮本源　明練九章追隸首　精研十等遡軒轅
千秋不朽遺編在　一世逈遷雖復論

關流累代

關新助藤原孝和
荒木彦四郎藤原村英
松永安右衛門源良弼
山路彌右衛門平主任
藤田權平源定資
中田文藏高寛
高木吉兵衛廣當
稲野三重郎盛胤

〔石黑舊記〕

並物　一百一十餘品

中田高寛著　一冊



精要算法上卷術解　同　三冊
同　中卷解術　中上　同　二冊
同　中卷　利息割綴術解　同　二冊
雜題後編　同　二冊
草術開立方　同　二冊
草術開立ノ解　同　一冊
諸角斜術諺解　同　一冊
累截招差之法演段　同　一冊
草術算顆術　同　一冊
草術算顆術之解　同　一冊
同　勾股術　同　一冊
消息式諺解　同　一冊
解見題之法諺解　同　一冊
關流算法草術　算題術　同　一冊
消長演的起術　同　一冊

編

同　一冊

著

同　一冊

| | | | |
|---|---|---|---|
| 同 | 編 | 一冊 | 貝原算法答術鈔 |
| 同 | 述 | 一冊 | 算用手引草改術諺解 |
| 同 | 著述 | 三冊 | 雜題　一、二、四、 |
| 同 | 著 | 一冊 | 算學訓蒙 |
| | | | 勾股變化之法用例諺解 |
| | | | 極數 |
| | | | 雜題 |
| 中田高寛著 石黒信由校正 | | 一冊 | 關流算法草術　算數答術 |
| 中田高寛著 石黒信由訂正 | | 二冊 | 雜題　一百條 |
| 中田高寛編 石黒信由著 | | 二冊 | |
| 中田高寛著 石黒信由校 | | 一冊 | |
| 中田高寛編 石黒信由訂正 | | 二冊 | |

## 仁孝天皇

### 天保七年

○十二月、測量家石黒藤右衛門歿す條の綱文に、三日、壬子、の四字を冠し、測量家の三字削り、更に其の條の石黒系譜の次、四五頁、第一行の次、

〔石黒信由畫像〕　裏書

## 石黒信由先生事蹟

先生姓ハ藤原、氏ハ石黒、名ハ信由、字ハ藤右衛門、越中射水郡大袋庄高木村之農家ナリ、先生之舊譜云、其先ハ石黒太郎光弘、壽永二年木曾冠者義仲ニ方人セシヨリ以來、世々越中礪波半郡ヲ領シ、木船ノ城ニ住シ、石黒左近ト稱ス、其後八州管領越後春日山ノ主上杉入道謙信ニ屬シ、又幕府信長公ノ旗下トナリ、六萬石ヲ領ス、天正九年、同十年、同國魚津ノ役ニ候ス、織田家滅亡ノ后、越中之守護佐々成政ノ爲メニ所領ヲ失ヒ、家族離散ス、同年射水郡二口村ニ住シ、農業ヲ事トス、左近男子二人アリ、一ヲ左助ト云、二ヲ久三郎ト云、是先生之元祖トス、先生ノ由緒云、○中略六代先生也、幼名與十郎ト云、寶暦十年十一月十八日生ル、三歲ニテ父死シ、祖父ニ養ハル、天明四年七月、祖父死ス、同八月十五日、祖父ノ跡ヲ續キ、高八拾八石四斗九升ナリ、名ヲ藤右衛門ニ改メ、村肝煎代リ役ヲ勤ム、寛政七年二月、射水郡繩張役被仰付、河北郡礪波郡ニテ數十ケ村御檢地御用相勤メ、新川郡能美郡ニテ數十ケ村內檢地御用、且又能州石動山論所分境分間、婦負郡射水郡出合用水小竹江筋分間、新川郡舟倉野等新開所能州口郡邑知潟廻リ分間方等御用相勤、射水郡ニテ數十ケ村內檢地暨分間方等御用、數十ケ年相勤ム、然所文化

十三年三月、御書立ヲ以、白銀壹枚拜領被仰付、文化元年寅十月、新川郡内山村領畠直新開折反歩等内撿地方御用被仰付、文化十四年七月二十二日、新田才許並被仰付、諸郡分間方等御用可相勤旨被仰渡、御代官千石被仰付、同十五年寅六月、石川郡松任地方御田地割算用者被仰付、文政二年卯二月、石川郡大野川ヨリ犀川川尻邊迄水矯並分間方御用被仰付、同閏四月、新田才許本役並陰聞兼帶被仰付、同正月、御次ヨリ諸郡道程調理方等御用被仰付、諸郡往還道筋等町間相調理、一郡一枚宛ノ分間繪圖、道程帳、郷庄分村名帳、右御領國三州ノ御繪圖全出來仕、文政七年申三月迄ニ御次江奉指上候處、藤右衛門義御領國繪圖被仰付、數年情ニ入リ出來イタシ、御用立候ニ付、五人御扶持被下置段、同年十二月被仰渡、右御次江上ケ申御繪圖、郷庄分ケ村名帳相添、一通リ御役所御扣、並加越能三州一國一枚宛ノ組分繪圖相添、竪組分村名帳相添指上可申旨、重而被仰渡候ニ付、則三州ノ御繪圖等全出來、外ニ加越能三州略圖相添、文政八年酉七月御役所江指上候處、金二兩被下、右三州一國一枚宛ノ組分繪圖三枚、同村名帳三冊、加越能三州略繪圖一枚相添、文政八年七月御次江奉指上候處、文政九年七月、金子五百疋御次ヨリ被下候、文政六年正月、新川郡舟倉野新開勢子役被仰付、文政十三年六月、射水郡賣藥方主附被仰付、天保三年辰五月、御次ヨリ三州測量ノ圖籍清書被仰付、天保六年迄全出來イタシ指上候、天保六年、加越能三州郡分略繪圖大一枚小一枚御次江指上候處、小判三兩被下、天保四年十一月、新川郡舟倉野新開勢子深ク心懸爲骨折、御改作所ヨリ金拾兩被下、天保五年十月、子孫乃爲、持高ノ内三百六拾五石二斗五升縮高ニ被仰付、祖父ノ跡ヲ續キ候節ハ、八十八石四斗八升ナリ、百九十七石二升六合ナリ、此ノ内ヲ三百六十五石二斗五升縮高ニ被仰付候ナリシカ、追々持高相蓄ミ、今年ニ至リテ五ヲ三如左、

射水郡新田才許高木村藤右衛門義、分間測量方等衆ニ抽御用立候ニ付、御領國不殘分間繪圖等被仰付候處、巨細山野ヲ馳廻、右圖面ヲ全出來、骨折方モ不容易趣ニ付、御扶持モ被爲下、其上及老年候迄、役筋モ大切ニ相勤、家業高方ノ儀モ無油斷相勵、追々取高モイタシ申儀、彼是奇特ノ至ニ候、右ニ付格別ノ勤苦ヲ以高重サニモ至リ申儀、藤右衛門子々孫々、自然切高等イタシ候樣ノ儀有之候而者、藤右衛門、辛苦ノ功モ消行候儀ニツキ、格別ノ詮義ヲ以、左ノ村々高〆三百六拾五石二斗五升、役所ヨリ縮高申付候條、此段申聞請紙面可指出候勿論、右等ノ趣、子孫ノ者共、聊無麁略、急度相心得可申候事、

天保五年十月　　山森雄次郎

南　兵左衛門殿
橋下條村瀬一郎殿
宮　庄五郎殿
高木村　藤右衛門方

吉田兵馬
井上井之助
高田幸助
島田權五郎

天保六年三月、射水郡年寄列ニ被仰付、新田才許當分此迄ノ通リ被仰付、同七年二月、公儀江元祿年中御指出ノ御繪圖調理方被仰付、同三月、三州測量圖籍御役所御扣先達而被仰渡候ニ付、右圖籍全部拾二冊一箱ニ入指上申候、同月、能州鳳至郡時國村論所分間方御用ニ罷出候處、御領所御奉行所ヨリ白銀一枚被下候、同七月、先達而被仰付置候五人御扶持御指除、草高拾五石頂戴被仰付、天保六年、加越能三州大路水經被仰付、全部六冊下書出來仕、追々清書相調指上可申處、天保七年十二月三日、七十七歳ニテ天年ヲ以テ終フ、

先生者質朴ニシテ名利外飾ヲ事ト爲サズ、父母兄弟和樂シテ間言ナシ、奴婢ヲ御スルコト愛子ノ如シ、鄉里譏ル者無シ、天之保ツ所歟、子孫漸富貴也、天明二年十一月十九日、二十三歳越中富山中田文藏高寛先生之門ニ入リ、算術ヲ學ヒ、寛政八年正月十八日、三十七歳關流算學ヲ皆傳授ス、又西村太冲得一先生之門ニ入リ、天文曆學ヲ學フ、其所著之算書頗多シ、文政二年算學鉤致ヲ板行シ、又天保六年渡海標的ヲ板行ス、皆有用ノ實學ニシテ、無用之空學ニ奔ルコト無シ、其算術全傳ヘル所ノ者二人、越中礪波郡内島村五十嵐小豐次厚義、金城日下理兵衛自明ナリ、先生偶來テ予ヲ問フ毎ニ、必天文地理之測量推步之術、暨民生日用之算ヲ論シテ、渡海之法ニ及フ、皆酷暑祁寒ヲ忘テ終日夜半ニ至ル、未嘗テ倦トコロ有コトヲ見ズ、所設之飲食酒肉ハ必ス不知味者ノ如シ、

先生ハ天文ヲ學ヒ、算術ニ達シ、地圖ヲ製ス、皆古人未發之妙法ヲ考成シ、役儀ハ肝煎ヨリシ年寄列ニ（十村列也）昏ミ、御扶持高拾五石ヲ給フ、先生之大功有ル事此ノ如シ、其小功ニ至リテハ擧テ數フ可カラス、故ニ擧家、先生ノ肖像ヲ模寫シテ此ヲ祭ランコトヲ欲テヤ、高岡之畫工淺野彌兵衛ニ模寫セシム、像裝共成テ而テ先生ノ事實ヲ其裏ニ書、永ク不朽ニ傳ヘン事ヲ欲シテ之ヲ予ニ乞フ、予ハ先生

ノ門人之末員也、故ヲ以テ辭スルコト能ハス、故ニ其舊譜及由緒之要用ヲ拔キ、又予カ親ク見聞スル所ヲ以テ此ニ書スルコト爾リ、

天保十四年六月三日　河野久太郎通義

○同上の條の石黑舊記の次、四四六頁、第十行の次、

〔石黑舊記〕

測遺

山崎流祖　山崎兵太夫
二　小田定行
三　田中彦七
四　中谷玄兵衛
五　西村千助遠里
六　本保十太夫以守
七　宮非柳之助安泰
八　石黑藤右衛門信由

三池流ヲ兼修
三池流最上流ヲ兼修

算學流租

東都御旗本領知弐千石　關新助藤原孝和
寶永五戊子年十月二十四日歿

一傳　關氏門人　同　領知三千石　荒木彦四郎藤原村英
一傳　關氏門人　同　領知二千石　建部彦治郎源賢弘
二傳　荒木氏門人　日向州臼杵郡延岡內藤備後守江戸定府領知一百俵　算學士　松永安右衛門源良弼字翼
但瓦弼ハ尾張國寺內ノ產也算學ニ依テ被召抱
二傳　建部氏門人　京都ノ町人天文算學ニ依リテ江戸ヨリ拾人扶持金銀兩替座御免　中根文右衛門字璋元珪
日向州延岡內藤備後守家士　久留島喜內義太
三傳　中根氏門人　久留島氏門人　松永氏門人　此久留島氏ハ無師ニシテ諸算書ヲ視テ算敎ノ靈奧ヲ盲ヲ寶仙才ト雖モ其書甚少シ於是乎一家ヲ不可立ト云
四傳　山路主任門人　東都御旗本領知一百俵　天文博士　山路彌右衛門平主任字君樹逸只軒
四傳　山路主任門人　東都山路主任男領知一百俵　天文博士　山路久治郎平之徽
五傳　山路之徽門人　筑後州久留米有馬中務太輔　算學士　藤田權平源定資字子瞻
藤田定資門人　但藤田定資ハ江戸御旗本藤田氏ノ二男也算學ニ依テ被召抱
六傳　中田高寬門人　越中州富山松平出雲守足輕扶持一十四俵　中田文藏源高寬字文敬、孔卜軒、
越中州射水郡高木村百姓領知拾五石　石黑藤右衛門藤原信由松香軒號高樹、

天保十年

補遺

○五月十八日摩島弘致すの一條削る、五〇二頁の第八行より五〇三頁の第二行まで

## 孝明天皇

### 安政四年

○三月二十三日婦負郡四方町火あり條の次六〇二頁第七行の次に補ふ、又安政二年、富山藩家老富田兵部自及の一條削り、其條引用の前田氏家乘は參考として富田兵部一件の次に移す、

四月壬午朔

二十三日、甲辰、富山藩、家老富田兵部の罪あるを以て、其の秩祿を收め、瀧川主税の家に幽す、後兵部自刄す、

〔安政四年富田兵部一件〕

富田兵部

右追々御取立職役等茂被仰付置候得者、一身心得共者勿論、萬事正道を相守可申之處、近年之勤振、奸計不少、就中絶言語口姦婬之所業有之、七ヶ年以前、既事明白に達御聽候義も在之候得共、其頃嶋嶽院樣、重き御不例中に付ては、種々御樣子も被爲在、格別御口省之思召を以御沙汰にも不被爲及、其段は急度徹心根可有之と思召候處、返而御厚恩之程令忘却、其以來勤向等表裏奸計儘有之、其他拘欲賄賂取、更不正之取計多く、是又先年御代替并其後出府被仰付候折に心得共方之儀、譯而段々御直諭茂被遊置候處、第一補佐之主意取失ひ、詰中他見而已正敗取飾り、懦弱大膽之行日々令增長、殊更右手筋等内外々不容易奸計談言を以思召奉昏昧候樣爲取計、尙役々下々迄も格別之續柄、或は恩分を荷ひ候族も指加置、内間之手配致し、右に乘し種々佞奸邪智之取計甚敗、其上内妾同樣之婦女を以君邊に可指置、深き遠謀之人迄も有之、將亦御國政從來之樣子一々乍口出府前後之境々格別事柄相違之儀も有之、都而不審之次第に相成、正御家中御救方等、厚き思召も被爲在候得共、下江不相通、却て追々御領中不靜謐、加之今度從御本家樣不一通重き被仰進之儀も不及御聽、重々積惡之次第、沙汰之限り不屆至極思召候、依之深き糺問被仰付、嚴科可被行筈に候得共、舊功も有之、家筋の者に候間、出格御憐愍之思召を以、先一等御宥免、御知行被召上、瀧川主税江御預被置候旨、被仰付候、以上、

巳四月二十三日

今度富田兵部江被仰出候義有之候處、今□自殺候之趣、達御聽、依之右被仰出候事趣、近類中江申聞候樣被仰出候、右に付則別紙相達候、家內之もの、曁家來之もの共、早速令離散候樣可被□候、申達候、

右に付左之通

一御代々樣ゟ被下置候御直書之類、
一御印之物類、
一御紋付之類、
一御品拜領之類、　御大小之類、
一寄合所向都而御用之書物類、

右之通、取調理急速可被差出候、尤家屋敷家財共御取上けに相成候條、家屋敷之義は御作事奉行江、家財は横目江可被引渡候事、

元治元年

○七月一日富山藩士島田勝摩等、山田嘉膳を要擊する條の次、六九〇頁、第三行の次、

十七日、乙卯、富山藩儒岡田淳之歿す、

〔富山藩士由緒書〕

岡田萬三郎淳之

同苗岡田專達高祖父瑞仙惠堅三男ニ御座候之處、靈昭院樣、○利幹御代、文化元年四月、文學格別出精仕候ニ付、廣德館訓導筆頭被仰出、每歲銀子七枚被下之候、同十年十月、廣德館學正轉役被仰付候、同十二年九月、學業格別心掛宜ニ付、御手廻組御雇被仰出、二人扶持、金五兩七十目、人給等被下之候、同十四年六月、廣德館教授轉役被仰付候、文政二年十二月、是迄之被下方御引直拾人扶持被下之、御手廻組被召出候、同十一年五月、儒者役被仰付候、天保六年、文學格別出精仕候ニ付、御組替役人組被仰付候、龍澤院樣、○利保御代、天保六年十二月、爲詰來二月中出府仕候之樣被仰出候、同七年二月、着府仕候處、在府中御近習並被仰出候、同八年正月、於江戸表以思召二人扶持御加扶持、御近習奥儒者被仰出候、同九年正月、文學格別出精門弟取立宜ニ付、以御目錄銀子十枚被下之候、弘化二年正月、役中銀三枚被下之候、隱嶽院樣、○利友御代、弘化四年四月、龍澤院樣御近習御免被仰出候而、隱嶽院樣御近習被仰出候、嘉永二年十二月、男子所持不仕候ニ付、願之上小西達二次男順二養育之、姪ニ聟養子仕候、同三年正月、以思召是迄之御擬作御引直御知

行六拾石被下之、定番足輕頭並御近習頭被仰出、頭料金拾兩、少身ニ付銀子拾五枚被下之候、龍澤院樣御用是迄之通相勤候樣被仰出候、碻嶽院樣御代、嘉永五年十一月、御持筒頭並轉役勤向是迄通被仰出候、大殿樣○利聲御代、嘉永七年三月、奥儒者不及相勤候旨被仰出候而、龍澤院樣御近習頭相勤候樣被仰出候、安政二年十二月、及老年隱居被仰付候、當御代、○利同文久二年八月、廣德館學頭被仰出、毎歲銀子拾枚被下之候、同三年四月、殿樣當分文學御師範被仰出、相勤罷在申候、同年六月、近來脚力軟弱難儀仕候ニ付、爲御稽古罷出候節、御城中杖相用候儀御免被仰付被下候樣奉願候處、願之通被仰付、杖相用罷出申候、

〔雜綴〕　卜王父栗園先生事略

王父栗園先生、諱淳之、字太初、栗園其號、小字爲之助、通稱萬三郎、橘姓、岡田氏、考諱惠堅、稱瑞仙、妣大野氏、有五男、長子天、次子英之承家、第四子則先生也、其先出於伊勢、自高祖諱重遠後、世以醫仕富山侯、先生少好學、與伯兄日夜研鑽、業大進、文化元年、甲子、靈昭公第九代利幹公、嘉其力學、擢廣德館訓導、九年、壬申、遊昌平黌、業成而歸、十二年、乙亥、爲手廻組扈、尋進廣德館教授、給俸二口金五兩及僕賃銀若干金、文政十一年、戊子、進文學、天保七年、丙申、龍澤公第十代利保公、命祇役江戸、爲近習、兼師範、公嗜和歌、長本草學、而其著書頗多、莫不一經先生之校訂、嘉永三年、庚戌、碻嶽公第十一代利友公、爲近習頭、給俸六拾石、安政二年、乙卯、以老致仕、後特進廣德館學頭、班于祭酒之上、蓋異數也、元治元年、甲子、七月十七日、溘焉逝、時年七十有九、先生爲人敦厚謹恪、友于兄弟、以稱人之善爲樂、家素乏書、以故或借覽、或謄寫、經史百家之書莫不涉獵、嘗在昌平黌、不列詩文會、或勸之、先生曰、余遊于此者、欲見天下希覯之書耳、詩賦文章非我輩之所願矣、齒達而立、著四書一得、寄之伯兄曰、欲以壓世儒、其教人也恂々乎不倦、學宗護園、然爲子弟講經籍、概由程朱、不必樹異、先生病革也、喊先考曰、近人爲師父、開追悼會者多矣、然不過衒虛名、予無德可稱、汝曹勿倣之、先生所著評註國語、戰國策、考字彙校正、天保辛卯、二年、罷、災蕩盡、唯栗園文集四卷、四書一得若干卷、正之家藏焉、配平井氏、子四人、伯某夭、仲爲之助、叔直之助、季則先考、諱元之、始稱定之助、也、直之助、襲宗家、伯兄家而死、乃先考亦入嗣、其後、後爲之助死、於是先生養小西有斐仲子信之、二稱順以繼家、正之信之第二子也、孫忠良謹撰、

〔吳陽遺稿〕　栗園全集序

家君今茲春秋七十有四矣、手自集錄其平日所作詩文、釐爲四卷、家君性嗜典籍、既老手不釋卷、尤竭力於經學、其於文章也、貴簡古、而賤新奇、嚮所撰著、有四書一得廿

9285
3



卷戰國策考五卷晏子春秋考五卷栗園隨筆十卷辛卯燈下錄一卷暨詩文稿若干篇惜乎稿未脫而燬於天保辛卯之火一掃蕩盡矣嗣後廿五年來所作詩文稿漸積至若干篇復罹安政丁卯之災悉爲烏有幸有門人岩城某所鈔錄者一卷存焉即借以謄寫之及一詩一文散在於人間者亦搜索而集之屬者集錄已成乃使門人島田某淨寫以永傳家塾命信之序之信之以爲衣服器玩雖屬烏有苟有財貨可以再償之詩文則不然精神所鍾心術所寓一旦蕩盡雖散萬金不可復購微岩城生藏之一班其可復寬乎因謹序其梗概使子孫勿敢失墜若夫學術文章則世自有公論非信之所敢私議也

14593